

明花向A

で斜位、裏面で横位方向に施文されている。胎土は少量の繊維を含み、小礫、砂粒が多く含まれている。

第1・2・3・4号土壙

出土土器は全て第V群土器であるが、小破片のため、図示し得なかった。全体的に表裏面に条痕が施文されるものが多く、有文土器、口縁部破片等は出土していない。

第7号土壙（第34図1・2）

出土土器は第V群土器であり、小破片が多く図示したものは2点である。1は表面に細かな条痕が縦方向に施文されるもので、裏面は無文になっている。胎土は繊維を若干含むが緻密であり、白色粒が目立っている。焼成は良好である。2は底部破片であり、尖底の角度は比較的広いものとなっているが、先端部は乳頭状に突出している。胎土は繊維を少量含み、若干の小礫を含むが緻密である。焼成はあまり良好とは言えず、器面の剥落が目立つ。条痕は表面に施文されている。

第11号土壙（第34図3）

3は器形的には段を持つ胴部破片であり、段部に文様帶の下端が来るものと思われる。太沈線で区画された内部に、やや太目の沈線が充填されているが、太沈線区画の両脇の胎土が盛り上り微隆起線状の区画となっている。充填される沈線は角頭状施文具によって施され、角張った深い沈線となっている。第V群土器である。

第13号土壙（第34図4・5）

出土土器は全て第V群土器で、有文土器及び口縁部破片は出土していない。4は表裏面に条痕の施文される土器で、繊維を少量含む。5は表裏面に条痕ではなく、擦痕が観察される土器で、繊維を少量含む。

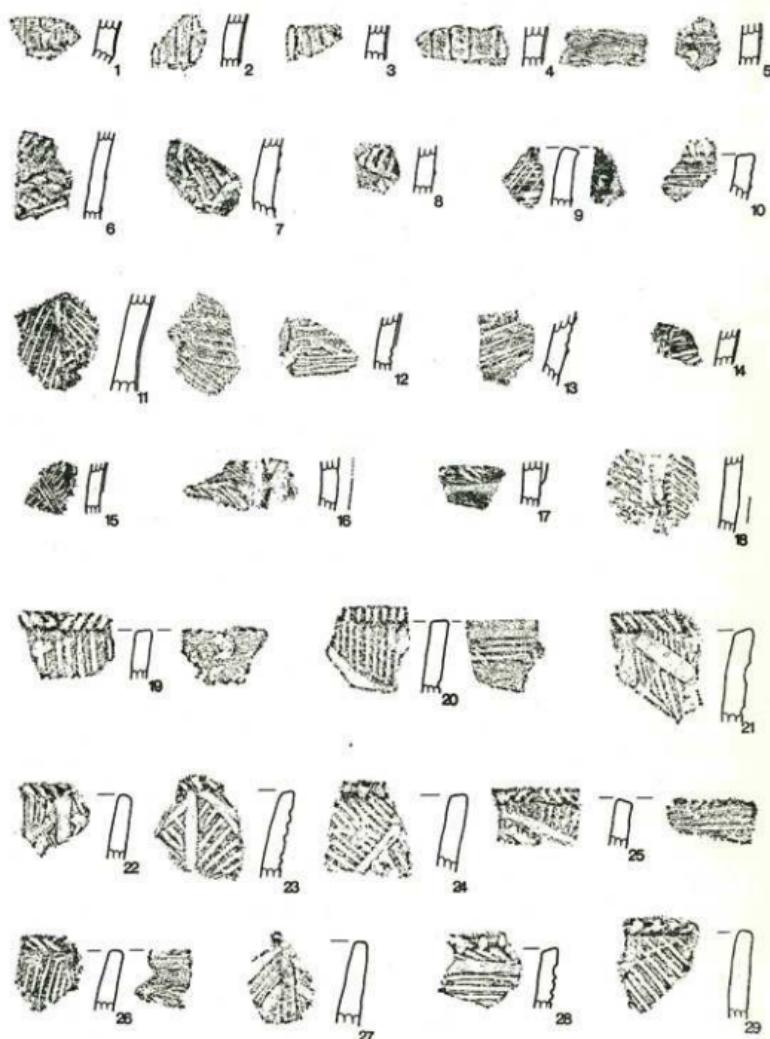
（5）グリッド出土の土器

明花向遺跡A区から出土した土器は、小破片を除いて約1800余を数える。その大部分は第V群土器であり、他に第VI群土器と第IV群土器が若干出土している。出土土器から言えば、縄文時代においてはA区は縄文時代早期後半、条痕文系土器群の前半に位置付けられる遺跡である。

しかし、造構確認面まで削平されていることを考慮すれば、他の時期の造構、造物が消滅している可能性も残されている。また、造構外から出土した縄文時代の遺物は細片が多く、その属性を判別することが困難なものであった。削平時の遺物の損失等を考え合わせれば、統計処理を施すには不適当な遺跡であると言わざるを得ないであろう。ここでは第V群土器を中心にして、その内容を検討してみたい。

第V群土器

条痕文系土器群は田戸下層式以降早期終末までの長期に亘って存在する土器群であり、多くの型式に細分されている。本報告においては、便宜上田戸上層式以降茅山上層式までに比定されると思われるものを条痕文系土器群前半として捉え第V群土器とし、茅山上層式以降早期終末までに比定されると思われるものを条痕文系土器後半として捉え第VI群土器と呼称することにした。以下、第V群土器の分類を行いたい。



第40図 グリッド出土土器(1)

明花向A

第1類（第40図1～7）

文様要素として細隆起線文のみ使用される土器群を一括して本類とする。細隆起線文とは貼付によるものとする。文様構成の相違によって細別される。

第1種（1～5）

細隆起線が文様帶下端に向って、等間隔に垂下されるものである。1は文様帶下端に段が認められ、段の部分まで細隆起線が垂下する。2～4の器形は判断されないが、文様帶の下端に近いものと思われ、2と4には水平な細隆起線が配される。5は段や括れは認められず、水平に配される細隆起線に直交する形で等間隔の細隆起線が垂下されている。いずれも繊維を若干含み、緻密な胎土である。1～4は明るい褐色系の色調であるが、5は黒褐色を呈している。2・3の裏面に僅かに条痕がみられる。

第2種（6～8）

細隆起線で区画した内部に、更に同種の細隆起線が充填されているものである。6は併行する細隆起線で区画された内部に、やや斜めではあるが梯子状に細隆起線が充填されている。7・8は幾何学的な区画の内部に細隆起線が充填されている。7は段の存在する器形になるものと思われる。いずれも繊維を若干含み、裏面には条痕というよりも擦痕がみられる。

第2類（第40図9～15）

細隆起線で区画された内部に、細沈線が充填されるものである。9・10は口縁部破片であり、10の口唇部に刻目が施される。9は細隆起線区画に対して斜行する細沈線が、10は併行する細沈線が充填されており、両者の細沈線は浅くなる様に施文されている。9・10とも繊維を若干含み、裏面の条痕は不明瞭である。

11は垂下する細隆起線を中心にして、矢羽状に細沈線が施される。裏面には条痕が施され、繊維を少量含む。12・14は垂下する細隆起線に対して直交する水平な細沈線が充填され、13は斜行区画に対して併行な細沈線が充填される。いずれも繊維を少量含み、裏面の条痕は不明瞭である。

15は細隆起線が垂下して区画されるが、更に細沈線によって区画されている。小破片のため全体の文様構成は掴めないが、細隆起線は文様帶を分割するものかもしれない。繊維を少量含み、裏面の条痕は不明瞭である。

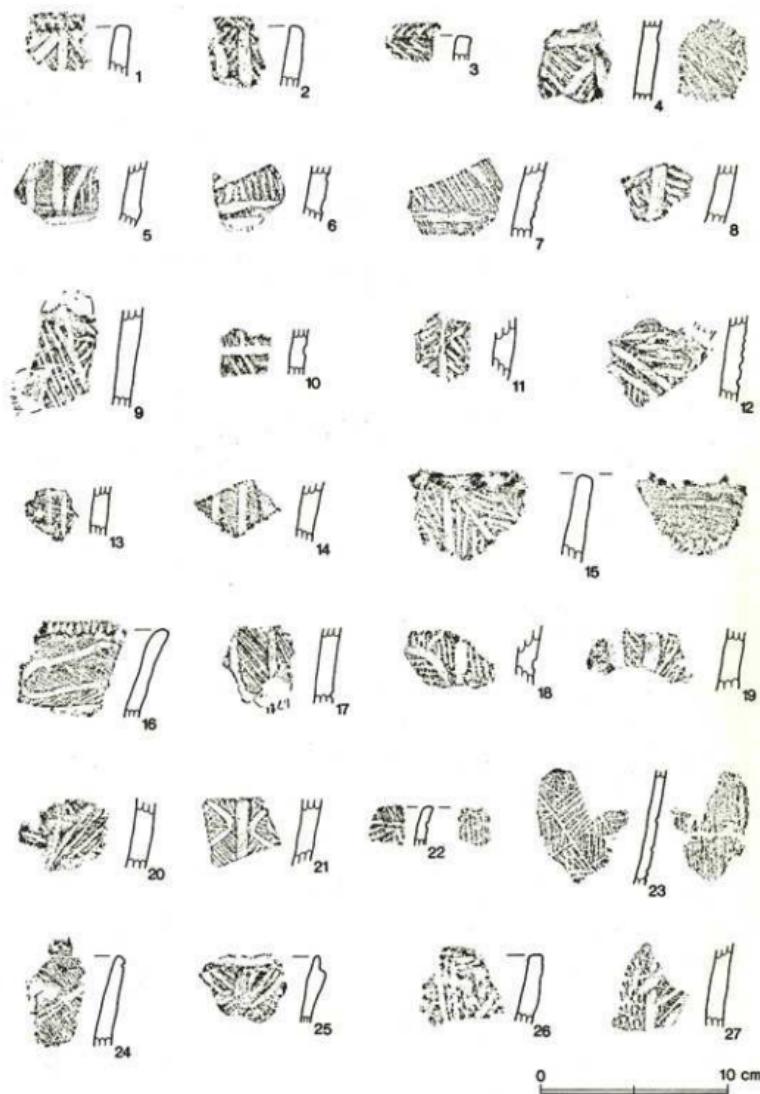
第3類（第40図16～18、第42図8）

太くて高い隆帶によって文様帶が分割されるものである。分割された内部は沈線等によって区画されると思われるが、出土資料中区画線の理解されるものは少なく、ここでは区画内充填要素によって細別した。

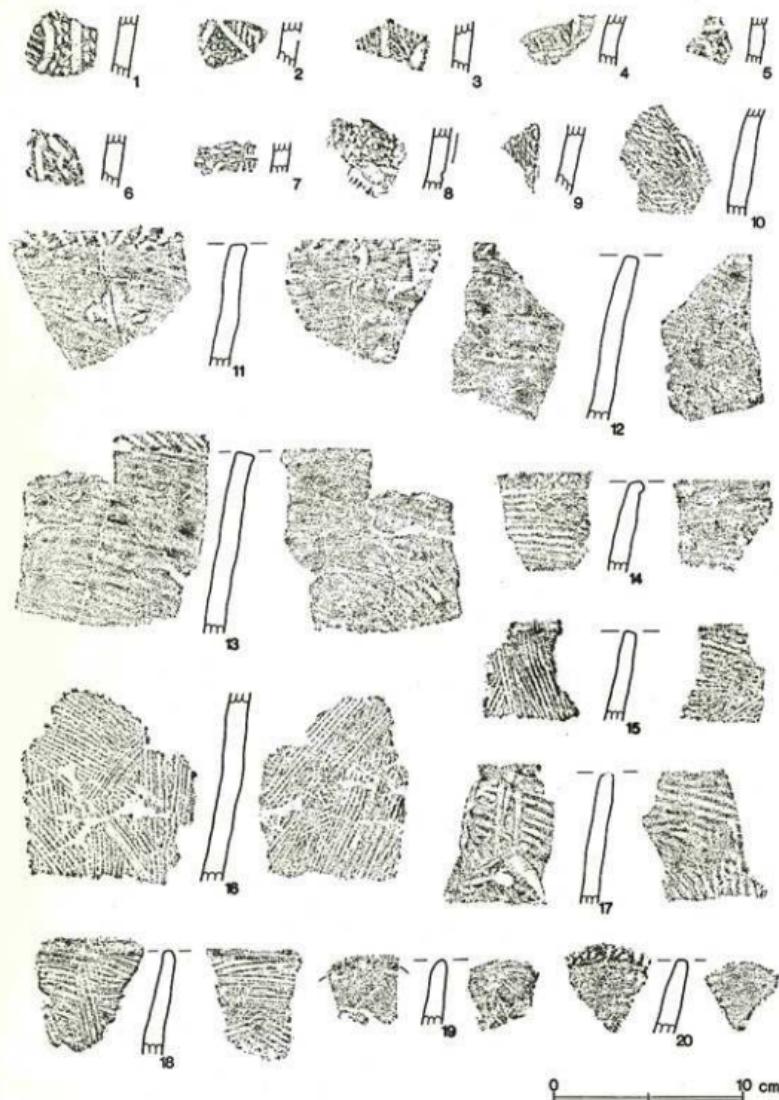
第1種（16・17）

区画内に細沈線が充填されるものである。16は断面三角形の太くて高い隆帶が垂下し、細くて浅い沈線が施文されるものである。隆帶上に刻目は認められない。繊維を多目に含む。裏面には僅かに条痕が認められる。17は文様帶下部の段であるが、扁平な隆帶が貼付されている。隆帶上には充填要素としての細沈線が施文されている。繊維を少量含む。

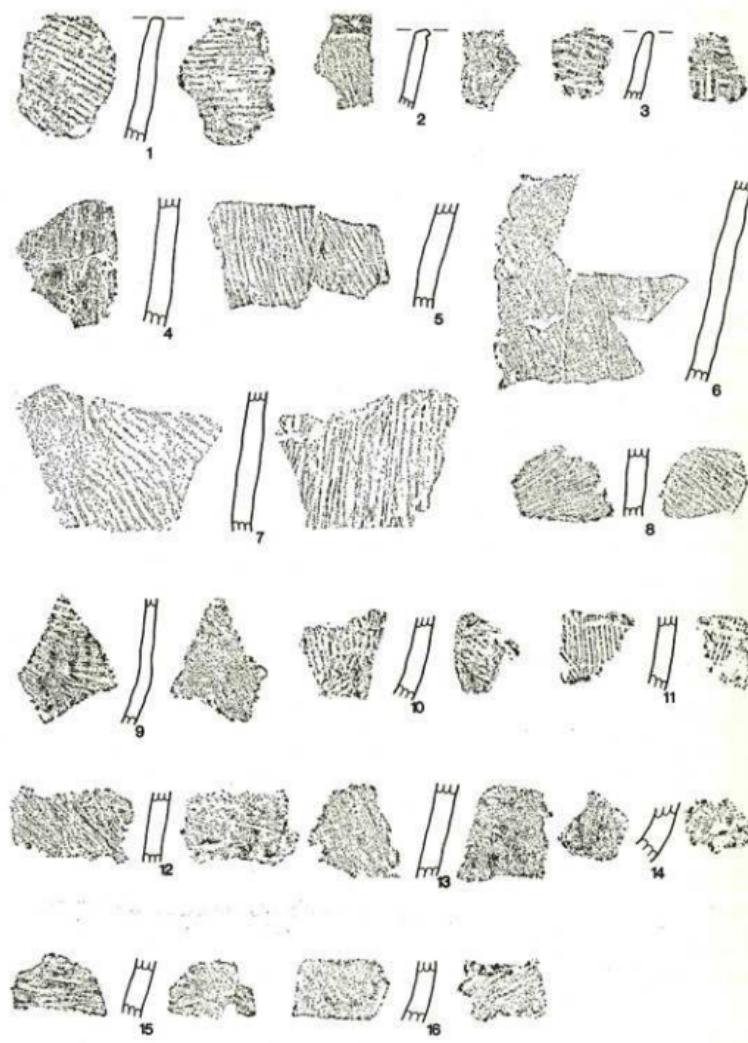
第2種（18）



第41図 グリッド出土土器(2)



第42図 グリッド出土土器(3)



第43図 グリッド出土土器(4)

第1種と同様の縦帯が垂下し、沈線と刺突文が施文されるものである。18は角棒状の同一施文具による沈線と、押し引き状の刺突列が施文される。繊維を少量含み、裏面の条痕は不明瞭である。

第3種（第42図8）

第1種、第2種と同様の縦帯が垂下して文様帶が分割され、分割内に沈線区画を施した後、刺突文を充填するものである。8は第40図18の押し引き状の刺突とは異なり、丸棒状の施文具で斜めに突き刺す刺突文が充填されている。

第4類（第40図19～29、第40図1～21）

太沈線で区画され、区画沈線よりも細い沈線が充填される土器を一括した。

第1種（第41図5・12～14）

2本対の太沈線によって区画されるもの。5は段のみられる器形で、2本の太沈線が併行して垂下され、文様帶が分割されるものであり、区画にも同様の太沈線を使用している。区画内は細沈線が充填される。13・14も器形は不明であるが、同様の施文手法であろう。共に繊維を少量含み、裏面に条痕が僅かに観察される。12は分割線ではなく区画線として併行の太沈線を使用している。区画内には区画に近い太さの沈線と細沈線を充填する。繊維を少量含み、裏面には条痕が施文されている。

第2種（第40図19～29、第41図1～4・6～11・15）

直線的な太沈線1本で分割、区画されるもので、区画より細い沈線が充填されるものである。この種の口縁は平縁が多く、口唇部には全て刻目が施されている。第41図15は刻目というよりも指頭で押捺した小波状を呈している。

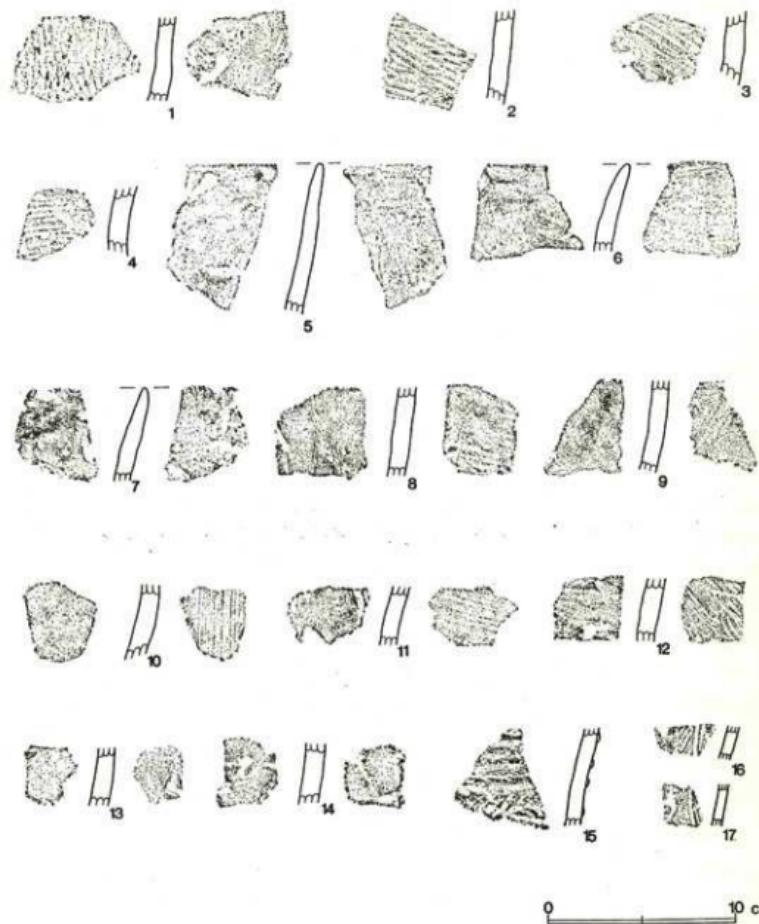
文様構成としては第40図23・27、第41図1の様に、垂下する太沈線で文様帶を分割し、更に縦状に区画するものと、第40図21・22・25、第41図2・4の様に、太沈線分割は同様であるが幾何学的な区画を行なうものとが存在する様である。他の破片は細片であるため区画が縦状であるのか、幾何学状であるかは判別出来ない。充填される細沈線は、区画線の方向と異なる様に施文されている。全ての土器に繊維が少量含まれている。裏面の条痕は第40図20・21・23～28、第41図1・2・4・6～9・15に認められ、他のものは条痕というよりも擦痕状の痕跡が観察される。

第3種（第41図16～21）

太沈線による区画が曲線状のもので、細沈線が充填されるものを一括した。16、17、19は区画の末端が連結されて、曲線状の区画になっているものである。16は口縁部破片であり、口唇部には刻目が施される。区画内には細沈線が充填されている。いずれも繊維を少量含み、裏面の条痕は剥落等により不明瞭である。18、20、21は直線区画と曲線区画が組み合わるもので、垂下する直線は文様帶の分割線の可能性が高い。21は波状の蛇行沈線が垂下するものと思われる。繊維は少量含まれている。21の裏面は擦痕が観察される。

第5類（第41図22～25）

区画線と充填線が同じ太さの沈線で施文されるものを一括する。この場合、細沈線が使用される。22、23は同一個体である。22は口縁部破片で角頭状の口唇部には刻目が施される。口縁下に一条沈線が廻り、同種の沈線が充填される。23は細沈線で斜格子状に区画され、区画内に隣接する格子区



第44図 グリッド出土土器(5)

画面で対応しない方向の細沈線が充填される。器壁の薄い小形の土器で、繊維を少量含み、裏面に条痕が施文される。24は口縁部破片で、口縁下に一条の沈線が巡る。区画線と充填線は同一のものであり、区画は不規則でルーズなものとなっている。胎土に繊維を少量含み、裏面は剥落が著しい。

25は口縁部形態の異なるもので、口縁部に段を有し、内側が突出する形態をとる。全体の区画構成は不明であるが、放射状の沈線が施文されている。器壁が薄く、小形の土器と思われ、繊維を少量含む。裏面の条痕は不明瞭である。

第6類（第41図26・27、第42図1～7・9・10）

太沈線で区画された内部に細沈線と刺突文が充填されるものを一括する。第41図26は口縁部破片であり、口唇部には刻目は施されない。併行する沈線で区画され、押し引き状の刺突が充填される。また、併行沈線内にも刺突が施されている。繊維を少量含み、裏面に僅かに条痕が認められる。同27、第42図2・3・4・5・6は直線的な太沈線区画内に、細沈線と刺突文が充填されるものである。2の刺突は押し引き状の刺突と異なり、角頭状施文具を突き刺す刺突である。いずれも繊維を少量含み、裏面には僅かに条痕が認められる。

第42図1は直線的な太沈線と曲線的な太沈線で区画した内部に、細沈線と刺突文が施文されている。同7・9・10は刺突文のみ観察される土器で区画内の部分と思われる。10の刺突は押し引く距離が長いため、短沈線状となっている。いずれも繊維を少量含み、裏面の条痕は不明瞭である。

第7類（第42図11～20、第43図1～16、第44図1～14）

文様の認められない無文の土器を一括する。この類の中には、第1～6類の胸部破片も含まれるが、ここでは便宜上、条痕施文法の相違によって細分した。

第1種（第42図11～20、第43図1～16）

器表裏面に条痕が施文されるものを一括する。条痕の大きさ、深さ等千差万別であるが、器面に対してくっきり施文するもの、ナデる様に施文するもの等が存在する。表裏面に条痕を施文するものが圧倒的に多い。

a 平縁のもの。平縁の口縁部は第42図11・12・13・14の様に刻目の施される場合が多く、口唇部形態は角頭状になるものが多い。11～13は表裏面ともナデる様な条痕が施文されている。また、刻目の施されない第42図15・17・18、第43図1・2・3は、条痕が比較的くっきりと施文されている。いずれも多少の差はあるが、繊維を含んでいる。

b 波状口縁のもの。第42図19、20の様に量は少ないが波状口縁が存在する。19の口唇部には刻目は施されないが、20には存在する。20の刻目は通常の刻目と若干異なり、絡条体圧痕の可能性もある。表裏面とも条痕というより、擦痕状の整形が施されている。繊維は19にやや多目、20に若干含まれる。

c 口縁形態不明の胸部破片。第42図16、第43図5・7・8・11の様にくっきりと条痕が施文されるものや、第43図4・6・12・13・15・16の様に擦痕状のものがある。同10、14は底部付近の破片であり、裏面の条痕は不明瞭である。いずれも量の多寡はあるが、繊維を含んでいる。

第2種（第44図1～4）

表面に条痕が施文され、裏面が無文になるもの。無文といってても擦痕状のナデが観察される。1・4は縱位の、2・3は斜位の条痕が施文され、裏面は条痕施文具以外の工具によるナデ状の擦痕がみられる。いずれも少量の繊維を含む。

第3種（第44図5～12）

表面が無文状となり、裏面に条痕又は擦痕が施文されるもの。5・6・7は口縁部破片であるが口唇部に刻目は施されない。5～9の裏面は薄い擦痕が観察される。10は幅広の施文具でナデた様な縱位の条痕がみられる。11は横位の、12は斜位の条痕が施文されている。いずれも少量の繊維を

含む。

第4種（第44図13・14）

表裏面とも無文となっているもの。無文といつても全くの無文ではなく、薄い擦痕がみられる。
13、14とも繊維を少量含む。

第V群土器（第44図15）

1点のみ出土した。15は縄文LR施文後、隆起線を貼付し、刻目を施している。器面は荒れてい
る。前期後半諸磯b式の浮線文土器に比定される。

第VI群土器（第44図16、17）

細片であるが数点出土した。16は二本単位の沈線が重下し、無節の縄文Lが施文されている。17
は2本単位の懸垂文と1本の蛇行懸垂文が配される。縄文LRが施文されている。いずれも小形の
土器であり、中期後半加曾利E式に比定されるものである。

(6) 石 器

本遺跡から出土した石器は10点であり、面積からすると少な過ぎる。かなりの点数が削平時に損
失したものと思われるが、大宮台地の地域性として石器は少ない傾向にある。

A類…尖頭器（第45図6）

1点のみ出土した。柳葉形を呈するもので、現存部は中央部に当るものと思われる。器面の風化
が著しく、正確な剥離面の切り合い関係は不明である。中央部が比較的厚く、全体的に造りは雑な
感じを受ける。

B類…石鏃（第45図1～4）

4点出土した。1～3がチャート製で、4が黒耀石製である。2・3は基部の抉込みが比較的深
く、1・4は浅い。

C類…トランシェ様石器（第45図5）

1点のみ出土した稜線のはっきりした剥片を使用しており、刃部と片側の側縁に調整剥離が施さ
れている。主要剥離面側の頭部に剥取の際の打点が残っている。断面形態は台形状になっている。
器面は風化し、バティナの付着がみられる。石質はフォルンフェルスである。

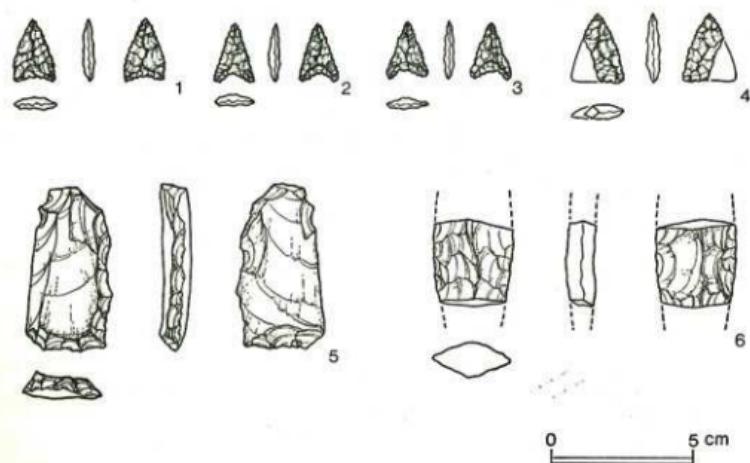
D類…石斧（第46図1～3）

3点出土した。1は中央部がやや括れる形状のものと思われ、その部分から刃部までが現存す
る。片面に自然面を大きく残し、大きくて粗い調整によって形状を整えている。刃線は弓状を呈す
る。2は厚身の石器であり、礫そのものを素材としている。刃部は片側からの剥離で成形され、側
縁は細かい調整剥離によっている。頭部の紐かけの部分と思われる所に擦った跡が認められる。3
は刃部のみ現存する石斧で、礫表面は残されていない。刃線は直線状になる。

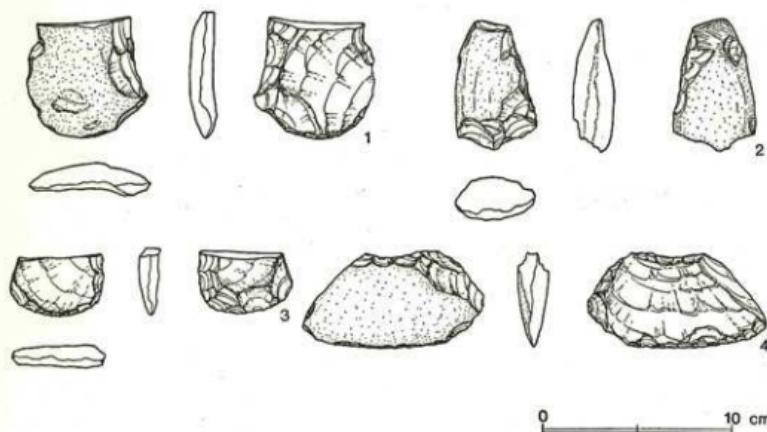
E類…搔器（第46図4）

1点のみ出土した。礫から薄く剥取された剥片を使用しており、礫表面との間に出来た鋭いエッ
ジを刃部としている。片側は殆ど礫表を残しており、成形のための調整剥離が周縁部に施され
る。刃線は直線状となる。

（金子 直行）



第45図 石 器(I)



第46図 石 器(2)

4. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（S I-1）（第47・48図）

調査区の南端部、N-6-17グリッドを中心に位置する。削平のために壁の大部分を失い、さらに近世土壇による攪乱も多い。平面は隅丸長方形を呈するが、やや四辺が張っている。長軸7.0m、短軸5.8mを測る。面積は約36m²、主軸方向はN-53°-Wを指す。

覆土は以下の13に分層したが、削平のため床面上はほぼ一枚が乗る形となる。

第1層 耕作土

第2層 褐色土 きめ細かいがしまり弱い。ローム粒を多量に含み、他層との境界は明瞭である。

第3層 明黄褐色土 ローム粒を全体的に含み、黄色味が強い。きめ細かいがしまり弱い。

第4層 暗茶褐色土 きめ粗くややボソつく。ローム粒を多く含む。

第5層 明黄褐色土 きめ細かくしまり良い。ローム粒・ロームブロックを含み、斑文様を呈する。

第6層 暗茶褐色土 しまり良いがきめ粗い。ローム粒を多く含み、やや斑文となる。

第7層 黒褐色土 しまり良く、ローム粒・焼土粒を多く含む。他層との境界は明瞭である。

第8層 黑褐色土 しまり良く、ローム粒を多量に含む。他層との境界は明瞭である。

第9層 茶褐色土 ローム・黒色土粒からなり、しまり悪くボロボロ。

第10層 暗黄色土 ほとんどローム。壁床ロームの溶軟化層。

第11層 暗黄色土 ローム粒・ロームブロックが多く斑文を呈する。若干の焼土粒を含む。

第12層 黑褐色土 きめ粗くしまりも悪い。ローム粒を多量に含む他焼土粒を若干含む。

第13層 暗黄褐色土 しまりは良いがボロボロ。ローム粒・ブロックを多く含み黄色味を帯びる。

壁は先述のようにその大半が削平され、西側ではまったく遺存していない。最も残る東側でも、わずか5cm程を認めるにすぎない。

床は直床式であり、緻密で良く踏み固められている。概ね平坦となるが、やや中央が低くなっている。

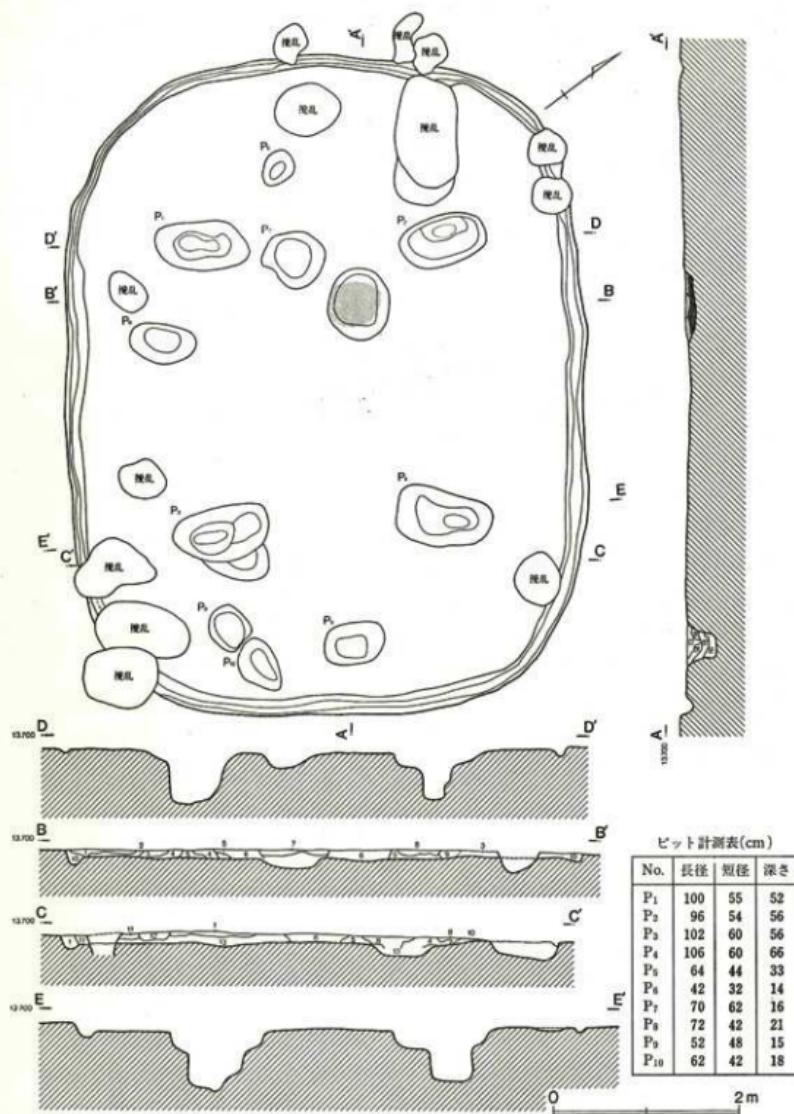
壁溝は全周するものと思われるが、一部近世土壇により切断されている。幅約14cm、深さ約9cmを測る。

P₁～P₄は主柱穴であり、主軸に対して直交する梢円形を呈する。壁は垂直に立ち上がるが、上部は段を有して広がっている。図示できなかったが覆土は主にロームで構成されており、硬くしまっていた。

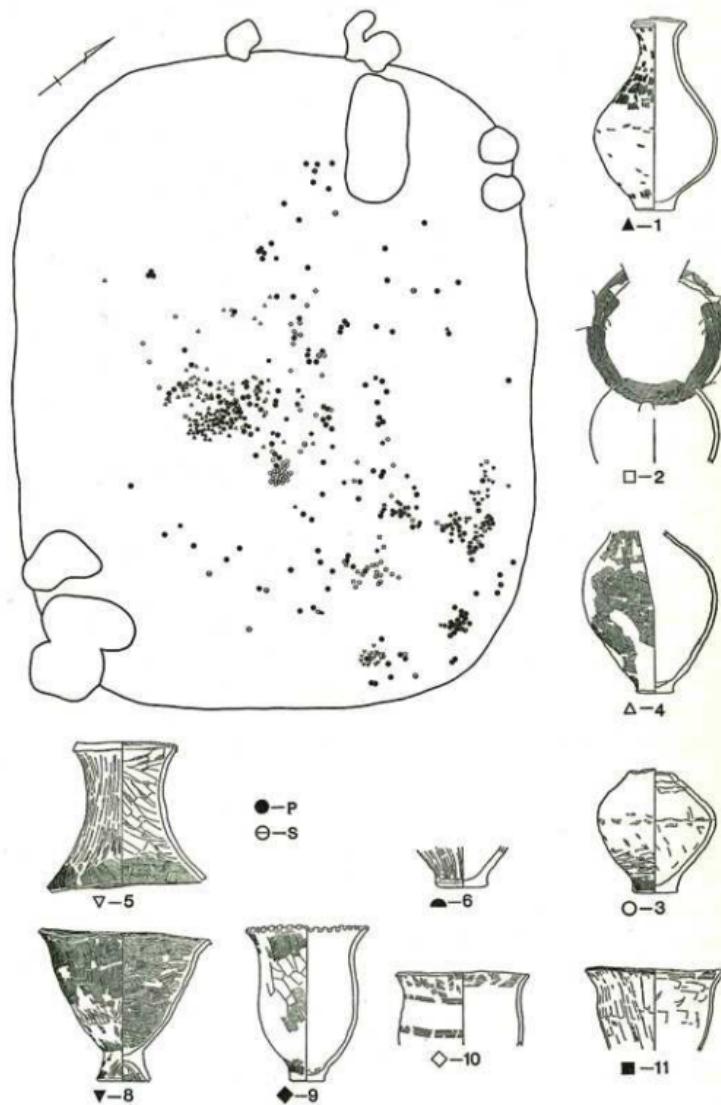
P₅～P₁₀は主柱穴に比していずれも小規模であり、覆土もきめ粗くしまりの劣るものである。このうちP₅は他と形態や規模が異なり、覆土も粘性・しまりともにかなり良好となる。位置的にあるいは入口に關係する柱穴かとも思われるが、覆土は黒色土で構成されており、堆積状態からはこれを故意の充填と認められなかった。

第14層 暗褐色土 ロームブロック溶混が全体に広がり黄色味を帯びる。やや汚れた感じとなる。

明花向A



第47図 第1号住居跡 (S I-1)



第48図 第1号住居跡遺物分布状態

第15層 暗黄茶褐色土 きめ細かくしまり・粘性とも優れる。全体的にロームを溶混する。

第16層 黄茶褐色土 概ね單一的でほとんどロームからなる。やくすんだ色調となる。

炉跡は主軸線上やや東寄り、 P_1 と P_2 を結ぶ線の内側に當まる。80×68cmの橢円形を呈する地床炉である。深さは約8cmを測り、覆土は焼土粒とかなり大形（径約2～5cm）の焼土ブロックで構成され、炉床もガリガリとなっている。

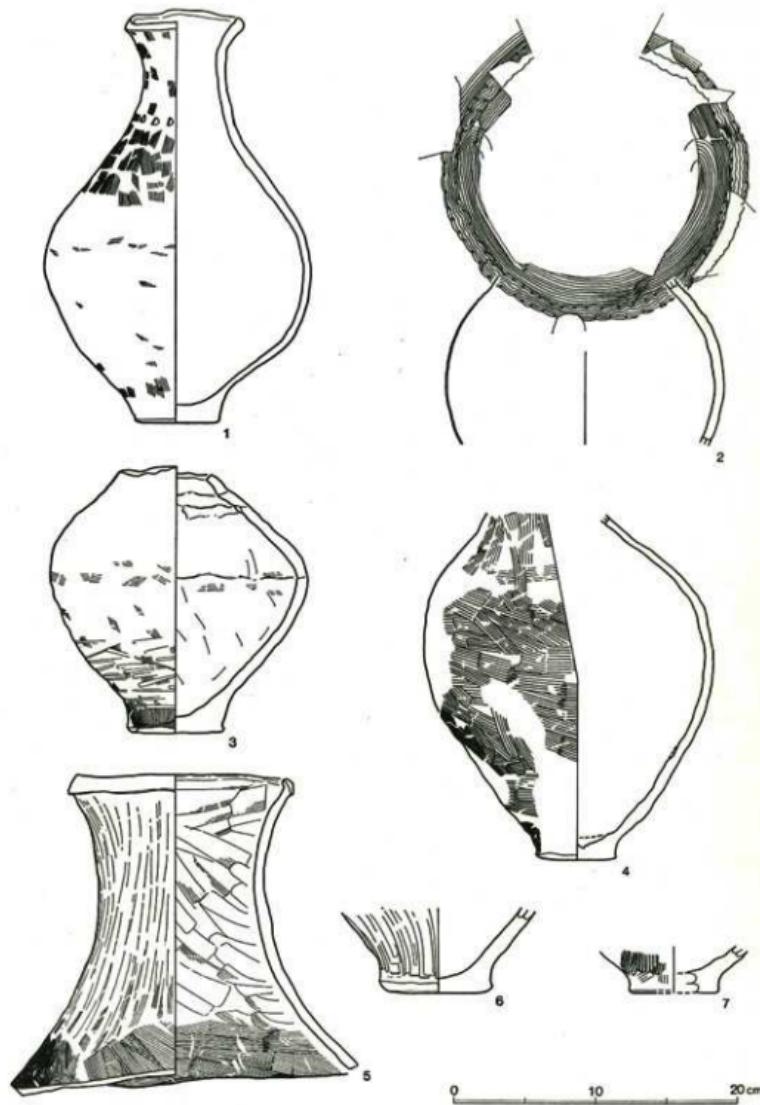
遺物は削平の激しさに反し、復元可能な個体がかなり多く出土した。これらはいずれも押し潰された状態で床に密着しており、 P_4 と東壁の間に壺形土器2個体、 P_4 の南に櫛描文を有する壺形土器1個体、その南側壁寄りに器台に転用したと思われる大形の壺形土器1個体、さらに中央部に壺形土器3個体、壺形土器1個体が各々検出された。また炉跡脇より磨石状石器が出土している。

出土遺物（第49・50図）

1は胴部下位を1/3程欠損するが、ほぼ全体を窓える細口の壺形土器である。器高29.7cm、口径8.5cm、頸最小径5.8cm、胴最大径は中位にあり19.2cm、底径6.0cmをそれぞれ測る。胎土には細かい砂粒を多量に含み、器面はザラザラとしている。色調はにぶい黄橙色を示し、焼成はあまり良くない。胴部はほぼ球形を呈し、緩やかに頭部へ移行している。口縁部は強く外反しており、丸味を帯びる口唇部は上端をわずかにつまみ上げている。器表面は肩部に縱方向の刷毛目を残すが、他の部位では磨耗が激しいために不明瞭となっている。また、頸部には刷毛状工具による刺突列点文が巡っている。器内は概ね薄く、特に胴部下位ではわずか0.5cm程となっている。

2は肩部から胴部にかけて復元された壺形土器である。胴部は全周しており、現状での最大径は20.0cmが測れる。目の粗い砂粒を良く含んでおり、焼成は極めて良好で浅黄色を呈する。器表は縱方向の刷毛調整の後、横位に細かく磨かれ滑沢となる。文様帶は肩部にあり、櫛齒状工具（6本齒）によって流水文（？）及びコンパス文が表出される。文様は頭部より続くものと思われ、同一個体の可能性が高い。12・13がこれに相当しよう。認められる範囲内での施文は、まず上部から右方向へ併行沈線が引かれ、これがU字を描くようにして左へ方向を転ずる。その際、以前に引かれた線を切断している。次に一箇所の起点を経て胴を1/3程巡り、再度Uターン（この部分は上からもう一度押えられる）して右へ進む。これも一箇所の中継ぎを置いて初めのターン部分で工具を器面から離し、両ターンの頂部を右方向の施文で結ぶ。この後、下部にコンパス文が右方向へ一巡しており、最低4回の描継ぎが認められる。さらに、コンパス文の下部1/3周程にも併行沈線が施されるが、これはこの部位でコンパス文が大きく山なりとなっており、その空隙を埋めるためにとられた処置と思われる。尚、以上の状態から見て、施文には回転台を用いていないものと判断される。

3は頭部以上を欠くが、欠折部を二次口縁とする完形の壺形土器である。器高19.1cm、現口径7.1cm、胴最大径18.5cm、底径6.9cmを測る。砂粒を良く含み、にぶい黄橙色で焼成は普通である。底部に粘土の巻き上げ痕、胴最大径部裏面に周回する接合痕、肩部より上に幅約1.5cmの輪積み痕3段をそれぞれ認める。特に裏面の後二者は明瞭であり、現口縁部も頂度その接合部にあたるものと思われる。器壁はほぼ直線的に広がり、これが接合部で「く」字状に強く屈曲している。器表面は底部に縱方向、胴接合部に横方向の刷毛目がわずかに残り、胴下位ではこの上より横方向の粗い

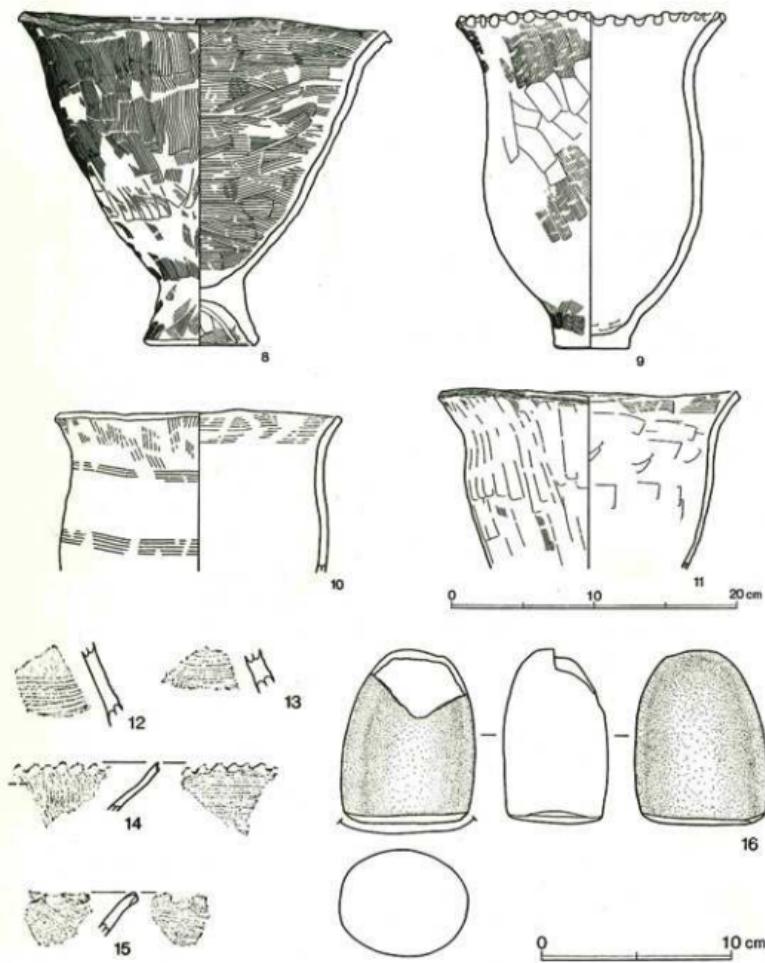


第49図 第1号住居跡出土遺物(1)

明花向A

磨きが施される。裏面は胴接合部にのみ刷毛目、これを境として下半は丁寧なヘラ撫でが見られる。

4は頸部以上を欠損する壺形土器である。現存部も1/3程の復元にすぎないが、かなりゆがんだ安定の悪い器体となっている。現高24.8cm、推定される胴最大径はやや上位にあり20.9cm、底径5.8cmを測る。胎土中には目の粗い砂粒を多く含み、焼成は良好でにぶい橙色を呈する。器面は粗い横方向の刷毛目が良く残るが、肩部以上は浅い縱方向となる。内面は剥落が激しいため不明である。



第50図 第1号住居跡出土遺物(2)

5は大形の壺形土器の口頭部である。仕居跡の床面に横転した状態で出土しており、あるいは器台(?)に転用されたものかもしれない。現高22.0cm、口径16.2cm、頭最小径12.8cmを測る。幅約1.0~1.5cmの輪積み成形で、多量の砂粒のほかに小石を良く含んでいる。焼成は良好で、にぶい赤褐色を呈する。器面には細かい刷毛目が良く残る。頭部はほぼ直立し、緩く外反して口縁部へ至る。口唇部は内彎ぎみに強くつまみ上げられ、外周には幅約1.5cmの粘土紐が薄く貼付される。

6は底部で、現高5.8cm、底径8.1cmを測る。縱方向に丁寧な磨きがあり、胎土中には非常に細かい砂粒を良く含んでいる。焼成は良好で赤褐色を呈する。7も1/4程の底部破片である。現高3cm、底径は推定で約6.5cmを測る。砂粒を多く含み、焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。器表面にはわずかであるが粗い刷毛目を残す。

8はほぼ完形の台付壺形土器である。高さ23.8cm(台高は約4cm)、口径26.8cm、頭径23.4cm、壺底径(くびれ部)6.0cm、台底径8.2cmをそれぞれ測る。台は円筒状のものを壺に接着し、さらに台内部には粘土を充填補強している。尚、台は器肉が厚く(約1cm)、「ハ」字状に踏んぱり安定感が強い。壺胴部は内彎ぎみで緩やかに立ち上がり、口縁部は直線的に外反する。口唇部は平坦に整形され、ここに横方向の刷毛調整が施される。器表面は縱方向、裏面は横方向の粗い刷毛目が残る。細かい砂粒を含み、焼成は良好でにぶい赤褐色を呈する。

9は底部を除く1/2程が失なわれるやや下ぶくれの壺形土器である。器高24.0cm、推定される口径約19.3cm、同頭径約14.8cm、同胴部最大径約15.7cm、底径5.4cmを各々測る。胎土中にはかなり細かい砂粒を良く含み、焼成は普通でにぶい赤褐色を呈する。胴部は内彎ぎみに立ち上がり、口縁部で強く外反する。口唇部は丸味を帯び、これに表裏から指頭による交互押捺が加えられる。器表面には縱方向の刷毛目がわずかにみられるが、裏面は底部にヘラ痕が残るもの、全体に滑沢で工具痕は認められない。

10も壺形土器であるが、胴上半1/3程の破片にすぎない。現高11.3cm、以下図上復元で口径約20.6cm、頭径約18.2cmを測る。非常に細かい砂粒を含むが、ほとんど目立たない。焼成は普通で、色調はにぶい褐色を呈する。器面は磨耗が著しく、刷毛目は口縁部にうっすらと残るにすぎない。尚、頭部及び胴部には同工具によると思われるやや深い併行沈線が見られ、器体を一巡するようである。

11の壺形土器も胴部上半2/3程の破片で、現高12.5cm、推定される口径約21.6cm、同頭径約18.1cmとなる。細砂粒を含み、焼成は良好でにぶい褐色を呈する。胴部はほぼ直立し、口縁部も直線的に外反している。口唇部は平坦となり、横方向の刷毛調整が施される。器表面は縱方向に、裏面は横方向に刷毛目が残るが、全体的にはヘラ撫で状となっている。

14・15は壺形土器の口縁部破片で、いずれも口唇部は平坦に整形されている。ここに14は刷毛状工具による刻み、15は指頭による押捺が各々加えられている。

16は磨石状の石器で、自然縁の一端をかなり広い梢円面(6.3×4.5cm)として磨出している。その端部は縁取られているが、磨出された面自体は平滑ですべすべとなっている。高さ9.3cm、径7.2×5.4cmを測り、重さは590gである。

(2) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓 (S Z-1) (第51図)

L-7-23グリッドを中心位置する。一部を掘削あるいは削平により切断されるが、溝は4本が独立するものと思われる。各溝は方形に配され、隅部は概ね直角をなす。溝幅を含めた中軸長は南北13.5m、東西15.0mを測る。主軸方向はおよそN-5°-Wを指す。尚、主体部は検出されなかつた。

周溝の覆土は以下の11層に分かれる。

- 第1層 暗褐色土 ロームブロックを良く混入し、ローム粒も少量含む。しまりに欠ける。
- 第2層 黒褐色土 ロームブロックを若干含む他、炭化物を多く含む。第1層よりしまりが良い。
- 第3層 茶褐色土 大形のロームブロックを少量含む。黒色土が部分的に含まれる。
- 第4層 褐色土 ローム粒が多量に混入し、黒色土がブロック状に含まれる。
- 第5層 黄褐色土 ロームブロックが過剰に混入する。しまり良いがボソボソとなる。
- 第6層 黒色土 ローム粒及び微量の焼土粒を含む。しまりはあまりない。
- 第7層 黄褐色土 ローム粒が多量に混入する。しまり・粘性ともに強い。
- 第8層 暗褐色土 ローム粒が少量含まれる。
- 第9層 暗褐色土 第8層よりもしまりがない。
- 第10層 暗茶褐色土 ローム粒を多数含む他、焼土・炭化物も微量ながら含む。
- 第11層 暗茶褐色土 ローム粒を多数含む。しまりが悪くさらさらしている所がある。

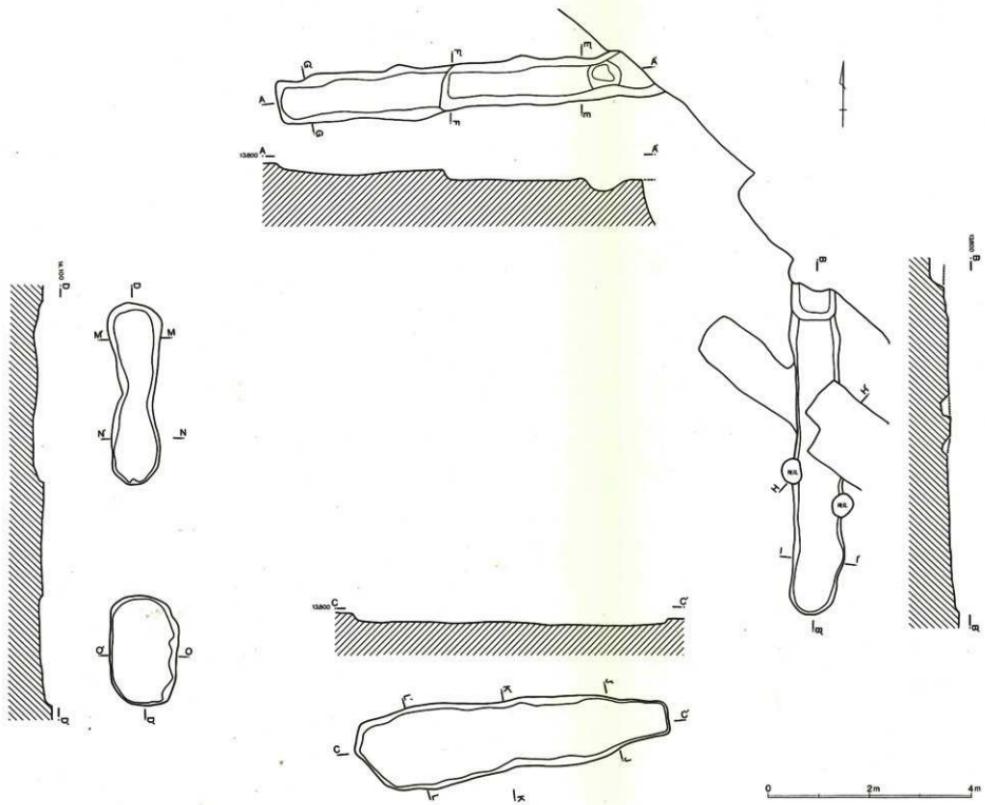
4本の周溝のうち北及び東の溝は長く、幅は狭く一定している。これに対して南と西の溝は短く、幅も広くて不整である。

北溝は東端部を切断されているが、現状で長さ7.75m、幅0.9mを測る。西端から約3.3m付近で一段低くなり、溝底を二分している。この段より西側は舟底状を呈し、その中央部は両側からの傾斜でわずかに低くなっている。この部分での深さは約22cmである。東側は段を境として西側よりもおよそ20cm深くなり、全体は概ね平坦となっている。この東端部には径70×50cm程の梢円形の掘り込みが見られ、溝底より約24cm深くなっている。溝の横断面はやや凹凸が激しく、段部以外は立ち上がりも緩やかである。遺物は最東端部で頭部以上を欠く壺形土器(第54図1)が検出された。土器は溝底よりやや浮いており、横転した状態(第53図)であった。

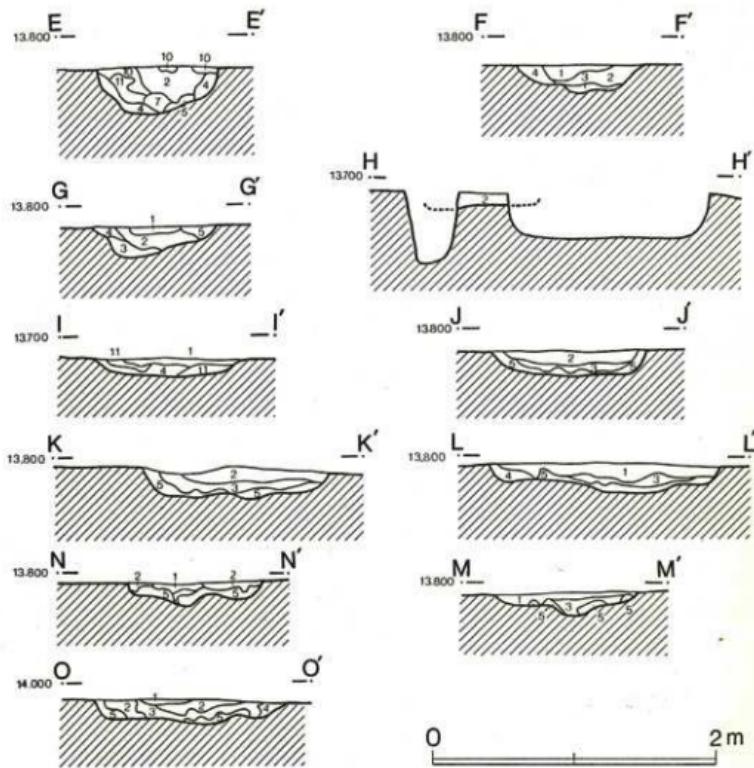
南溝は長さ6.55m、幅0.7×1.72mを測り、西側へ向け膨らんでいる。溝底はほぼ平坦で深さは約20cmであるが、中央部がわずかに浅くなっている。横断面はやや凹凸を有しており、立ち上がりはいずれも緩やかとなる。遺物は北溝のものを除き、すべて本溝の第2・3層より出土している。

東溝は北側を台地掘削により、また中間部を近世造構によりそれぞれ切断されており、現状では長さ6.6mとなっている。幅は約0.95mで一定しており、溝底も深さ約12cmで平坦となる。横断面も他溝に比して平らとなり、立ち上がりは緩やかである。

西溝は2本に分断された状態となっており、北側の溝は長さ3.65m、幅0.6~1.1mで中央部がくびれ、深さは約10cmである。また、南側の溝は小判形を呈しており、長さ2.2m、幅約1.35m、深



第51図 第1号方形周溝墓(SZ-1) (1)



第52図 第1号方形周溝墓（S Z-1）(2)

さ約14cmを測る。但し、標高的に見ると溝底は他溝のそれよりも高位置にあり、削平を考慮に入れれば本来は南溝に準じた形状（溝底中央部が浅くなる）。あるいは溝中土壌を有する1本の溝であったと推定される。この場合、その長さは中間部を含めて8.05mになる。

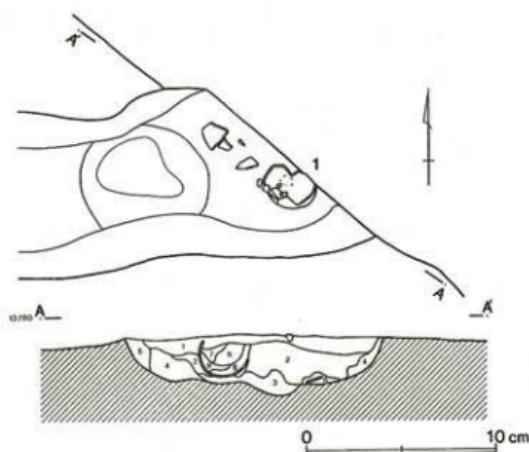
出土遺物（第54・55図）

1は北溝々底から出土した壺形土器である。頸部以上を欠損するが、現高28.0cm、胴最大径は中位にあり27.7cm、底径7.7cmを測る。胎土中には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。胴部はきれいな球形でやや安定感の弱い器体となっている。器表面は全体にヘラ磨きされており、胴上半にはその痕跡が良く残る。裏面は剥落が激しくザラザラとなり、器面調整は不

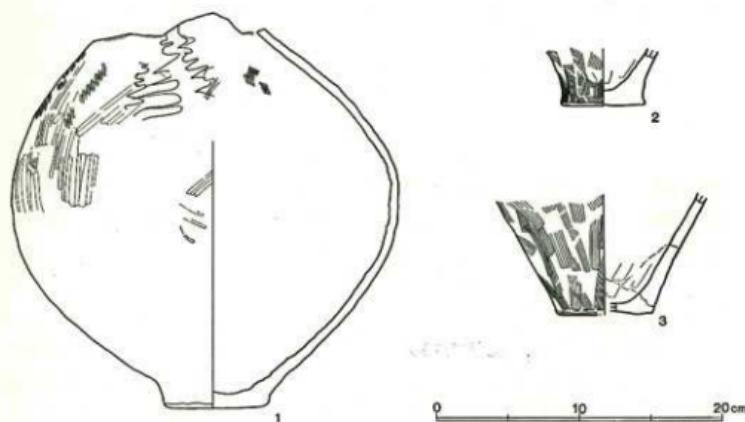
明花向A

明である。文様帶は肩部にあり、対位置をなして鋸齒状文（1箇所3～4本）及び、その間に縱方向の单節LR繩文（各3箇所？）が施される。鋸齒状文は細い籠状工具によるとと思われるが、いずれも浅く幅も1～1.5mmにすぎない。

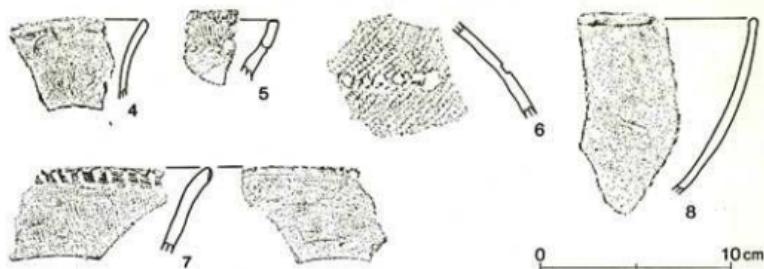
2は変形土器の底部である。現高3.8cm、底径6.0cmを測り、褐色で焼成は良い。器表面は刷毛目を良く残し、裏面にはヘラ痕が認められる。3も変形土器底部1/2程の破片である。現高8.5cm、推定される底径は約6.8cmを測る。器表面は粗い刷毛目が見られ、裏面はヘラ撫でのほかに巻き上げ痕が認められる。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。
4・5は壺形土器の口縁部破片で、5は幅1cm程の粘土紐を乗せて成形し、やや肥厚している。



第53図 第1号方形周溝墓北溝遺物出土状態



第54図 第1号方形周溝墓出土遺物(1)



第55図 第1号方形周溝墓出土遺物(2)

この下端には棒状工具による刺突列点文、表面には刷毛目が見られる。口唇部は平坦となり、ここに同工具による細かい刻みが押捺される。6は壺形土器の肩部破片で、地文には単節L Rの縦文が施され、ここに断面四角形の棒状工具による刺突列点文が加えられる。7は壺形土器の口縁部片で、丸味を帯びた口唇部には刻み目が施される。8は大形の鉢形、あるいは高壺形土器の破片と思われる。器面はきれいに施でられており、口唇部は丸縁状となる。砂粒はあまり含まれず、焼成はかなり良好で灰褐色を呈する。

第2号方形周溝墓 (S Z-2) (第56図)

M-7-13グリッドを中心位置する。S Z-1のはば真南にあたり、中心間の距離約13.7m、最も近接する溝間では約1.8mとなる。台地の掘削と削平は著しく、西溝以外は極めてその遺存状態が悪い。現状から推して、4本の独立した溝で方形に区画されるものと思われる。現存部での中軸長は南北8.8m、東西8.6mを測り、主軸方向はおよそN-10°-WでS Z-1とは概ね同一方向を指す。遺物の出土はまったく見られなかった。

周溝の覆土は以下の3層が識別できる。

第1層 暗茶褐色土 黒色土粒及び褐色土粒を多量に含む。スコリア粒を少量含有。

第2層 暗褐色土 ローム粒・黒色土粒を多く含む。しまりあり。

第3層 暗茶褐色土 ロームブロックにより構成されている。粘性あり。

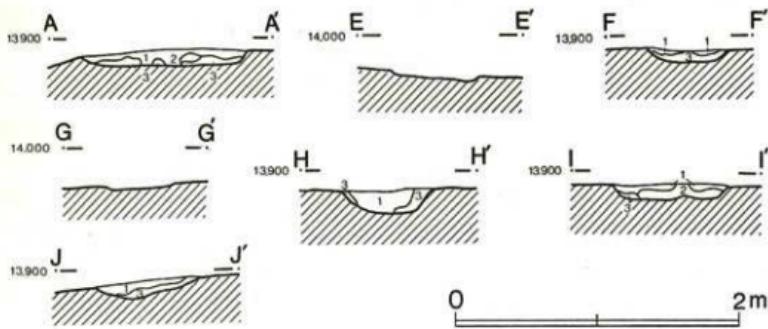
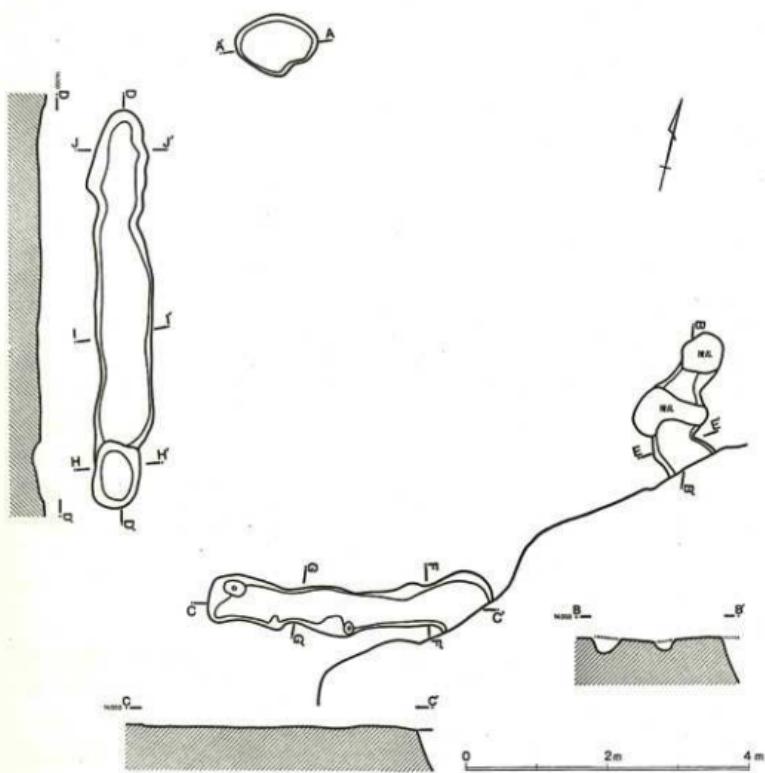
周溝はローム層に掘り込まれているがかなりの部分で損われており、北溝などは既に溝の形状をなしていない。また他の3溝にしても、わずかに溝底部が残存するにすぎない。

北溝は長径1.2m、短径0.9mの橢円形を呈する土壤状の掘り込みが検出されたのみである。底面は平坦となり、深さ約12cmで東側の立ち上がりは急となる。あるいは溝中土壤であるかもしれない。

南溝は東端部を掘削により失うが、北辺は明らかに返っており、溝自体の東限または段をなして東へ続くものと思われる。この部分までの長さは4.2mを測り、幅は0.5~0.9mで一定せず、屈曲が激しい。溝底は平坦であるが、わずかに北へ傾斜している。深さは5cm程度である。

東溝もその一部が認められたにすぎず、破壊は既に著しいものとなっていた。現状では「く」の

明花向A



第56図 第2号方形周溝墓 (S Z-2)

字様に強く屈曲しており、長さ1.6m、幅約0.7mである。溝底はほぼ平坦であるが、東へかなり傾斜している。確認できた深さは約3cmと極めて浅く、立ち上がりも不明瞭である。

西溝は本跡中で唯一溝の形状を止どめており、長さ5.7m、幅約0.8mを測る。深さは約10cmで溝底は概ね平坦であるが、やや中央部が浅くなる。このうち南端部には幅95×65cm程の掘り込みが見られ、溝底はさらに約10cm深くなる。この土壙状の掘り込みは溝と長軸方向をあわせながらも、これを切断するように設営されている。その底面は平坦であるが、北へ強く傾斜している。また、北溝と同じく立ち上がりは溝底に接する部分が急となる。

(3) 溝

第1号溝（SD-1）（第57・58図）

調査区最南端、0-6-6グリッドを中心に位置する東西溝である。現状で長さ9.5mを測るが、両側は台地掘削により失われており、全体の規模・形態は不明である。幅は1.3~2.0mであり、西側が太くなる。横断面はV字状を呈し、深さ約90cmではほぼ一定している。但し、この部分での削平はかなり激しく、本来的には1.5mかそれ以上の深い溝であったと推定される。

壁は中～下位でわずかに稜をなしているが、両壁面ともほぼ平坦となっている。立ち上がりはやや南壁が急であり、稜も弱く滑らかである。

以上のことから推して、本溝は集落を囲繞（あるいは墓域と区分）する環濠的な施設と考えられる。

覆土は以下の10層に分けられる。

第1層 黒褐色土 ローム粒を少量含み、色調は明るい。しまりが良い。

第2層 黒色土 ローム粒と炭化物が若干含まれ、しまりが良い。

第3層 暗褐色土 ローム粒が多く含まれ、やや大きめの粒になる。しまり良い。

第4層 茶褐色土 ローム粒が多量に含まれ、若干のスコリアが含まれる。しまり・粘性が良い。

第5層 明茶褐色土 色調的に明るく、ロームの含まれる割合が第4層よりも少ない。

第6層 黑褐色土 ローム粒が少量含まれ、しまり良く粘性も強い。

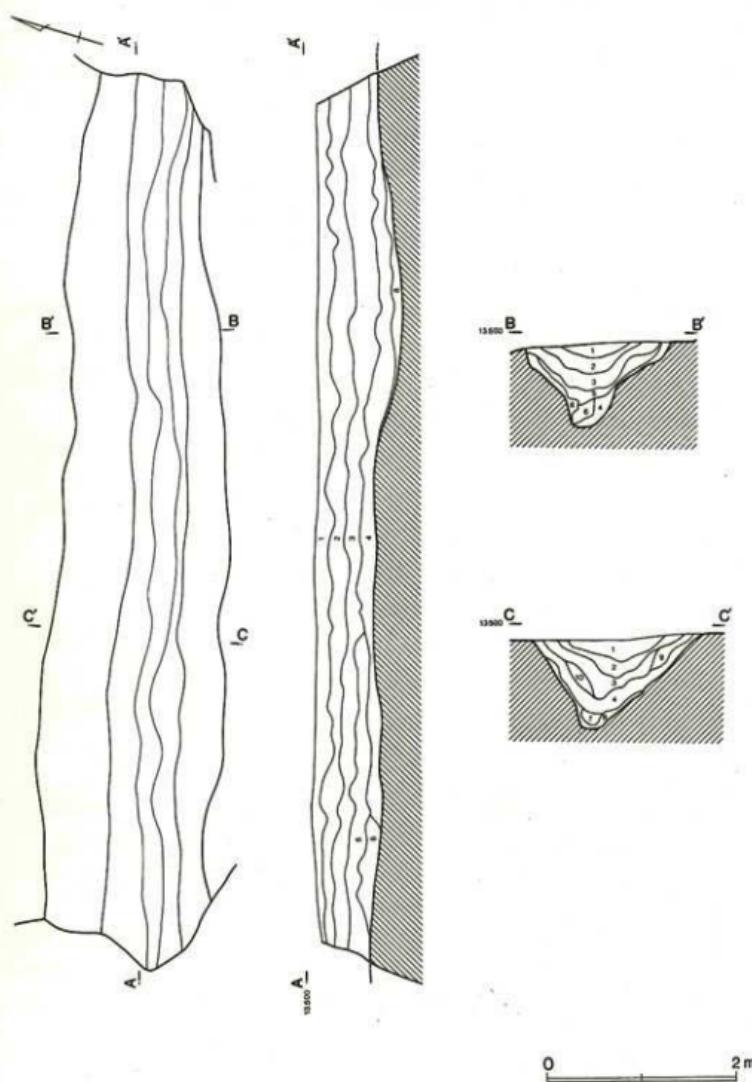
第7層 黒褐色土 色調的にやや明るいが、ローム粒を多く含む。粘性・しまりとも非常に良い。

第8層 暗茶褐色土 色調は暗く、しまり・粘性ともに増す。ロームブロックを少量含む。

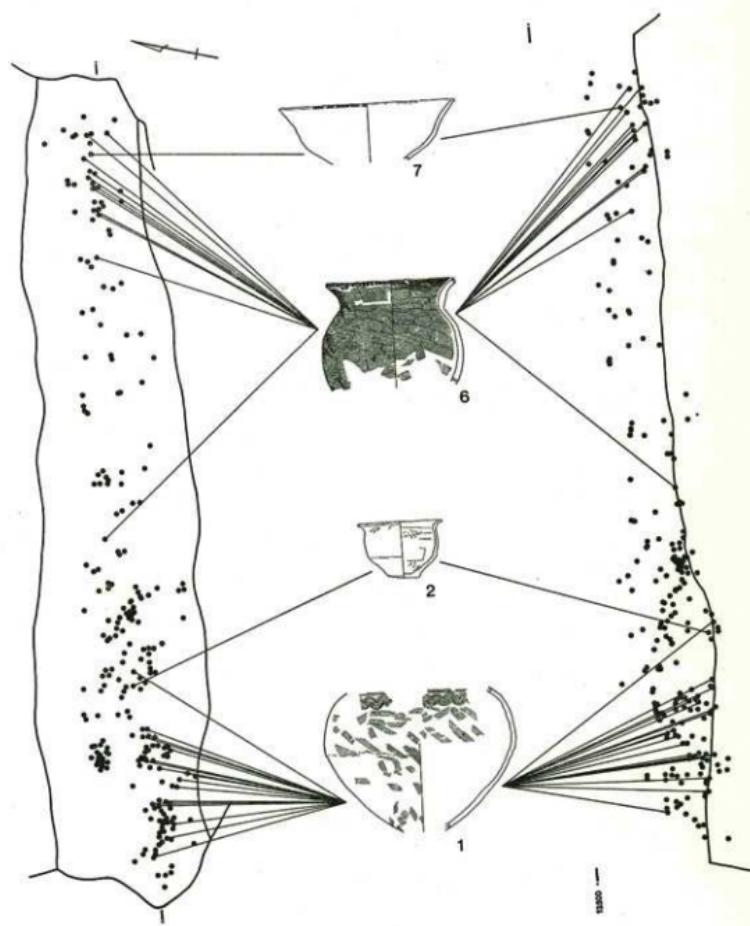
第9層 暗褐色土 第3層よりもローム粒が多く含まれ、色調的にもやや明るくなる。

第10層 茶褐色土 ローム粒をよく含み、しまり・粘性はほぼ同様である。

遺物は破片数で200点余を数えるが、西側でやや多く出土している。土器は宮ノ台式及び弥生町式の両時期に属するものが混在し、量的には後者が多い。しかし、時期的な層位集中は認められず、両者とも覆土上～下位にわたって分布している。このうち復元された個体も時期に拘らず、主に溝底部より出土している。



第57図 第1号溝(SD-1)



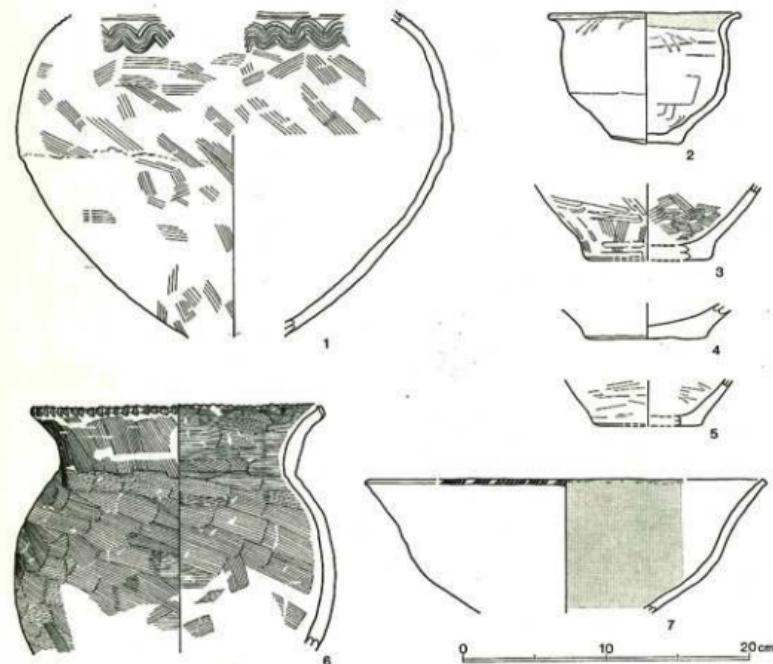
第58图 第1号窑造物分布状态

出土遺物（第59・60図）

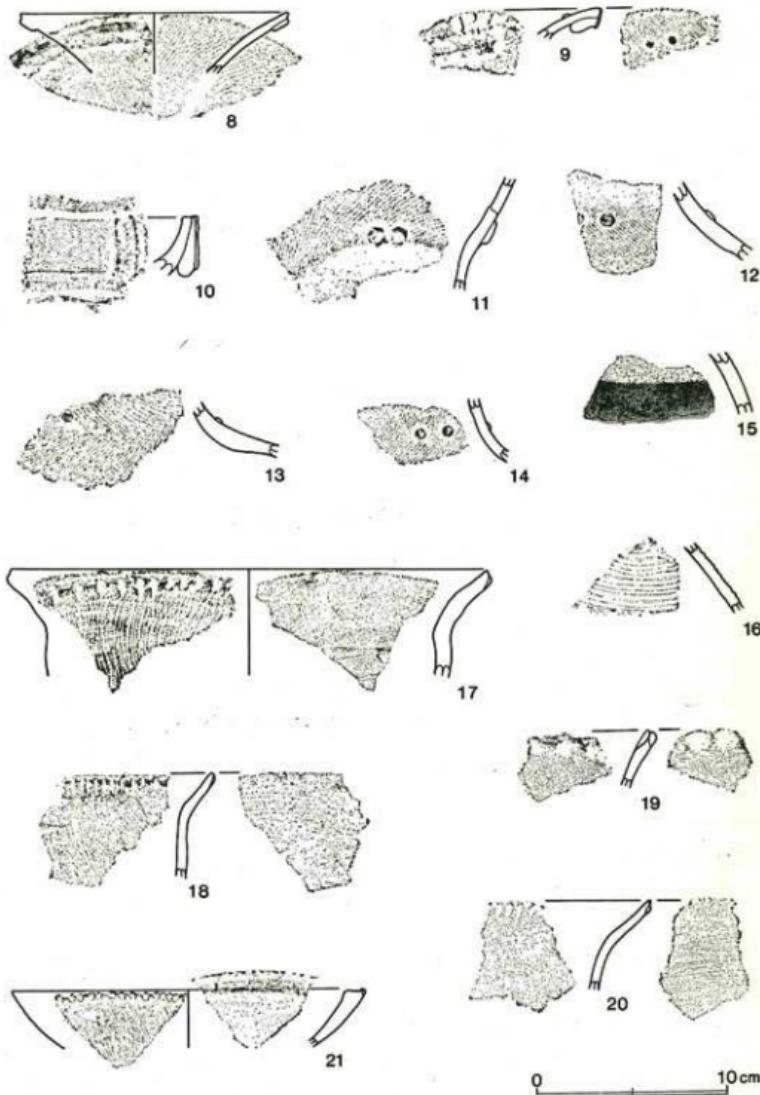
1は胴部1/3程が復元されたにすぎないが、かなり胴が太く張り出すものと思われる。中位に接合痕が見られ、これを境として上部は強く内彎している。肩部には櫛歯状工具（5本歯）によるコンパス文が施され、さらにその上にも同工具で併行沈線が引かれるものと思われる。器表面は粗い刷毛目が残り、裏面は丁寧に撫でられている。胎土中に砂粒は目立たず、焼成は普通で灰白色を基調とする。

2は溝底より単独で出土した小形で広口の壺形土器である。口縁部以外を完存し、器高9.4cm、口径13.8cm、頸径11.6cm、胴最大径12.0cm、底径5.3cmを測る。器壁は胴下位で稜をなして屈曲し、上半はほぼ直立している。口縁部は「く」字状に強く外反し、さらに口唇部も鉗状に広がり丸味を帯びる。器表面は粗い刷毛調整後にきれいにヘラ磨きされ、裏面口縁部には赤色塗彩される。胎土中には砂粒を良く含み、焼成は良好で明褐色を呈する。

3～5は壺形土器の底部である。器表面は3に磨きが認められるものの他は不明瞭である。裏面も3で刷毛目が良く残るが、他は概ね平滑となっている。底径は4が8.8cm、3・5は推定で各々



第59図 第1号溝出土遺物(1)



第60図 第1号溝出土遺物(2)

明花向A

9.0cm、7.7cmを測る。胎土中にはいずれも砂粒を多く含み、4がやや目の粗いものとなる。焼成はともに良好で、色調は3が黒褐色、4がにぶい黄橙色、5が赤色である。

6は底部を欠く壺形土器である。現高17.7cm、口径21.0cm、頸径16.7cm、胴最大径22.8cm、器肉は厚く約1cmをそれぞれ削り、胴は球形を呈する。これが頸部で強く外屈（裏面は稜をなす）し、肥厚した口縁部へ立ち上がっている。口唇部は斜めに整形され、ここに刷毛状工具による刻み目が加えられる。器面は横から斜方向の刷毛目で覆われるが、表面口縁部では縦方向になり、裏面下位はこれが稀薄である。

7は高壺形土器である。1/3程の破片にすぎないが、図上復元で口径29.0cmとなる。器壁は緩やかなS字状となり、斜めの口唇部上には単節LRの繩文が見られる。器面は表裏とともに良く磨かれており、裏面には鮮かな赤色塗彩が施される。

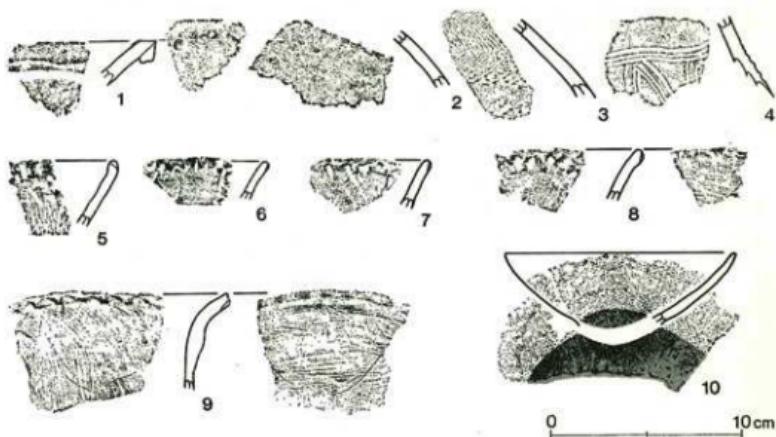
8～11は壺形土器の口縁部である。8はラッパ状に広がるものと思われ、口唇部表面には幅約1cmの粘土紐が貼付される。また、口縁部裏面には単節LRの繩文が施されている。9・10も所謂二重口縁となるが、9はラッパ状に広がり、10は受口状を呈する。いずれも粘土帶表面には細かいLR繩文が施され、ここに棒状貼付文が加えられる。さらに9の口縁内面及び11の口縁下端には小粒の円形粘土が貼付されている。12～16は壺形土器の肩部破片であり、12～14は円形の粘土粒が貼布され、S字状の結節文で区画される繩文帯を有するものが見られる。15はこの下より赤色塗彩がなされる。16は櫛歯状工具による平行沈線が施され、SI-1の2に似ている。17～20は壺形土器の口縁部で、口唇部には17・18が刷毛状工具による刻み、19・20は指頭による交互押捺が加えられる。21は浅い壺状を呈すると思われるが、器種は不明である。推定で口径約19cmを測る。口縁は立ち上がるに従って肥厚し、平坦に成形される口唇部では約0.9cmの厚さとなる。口唇部の外端はつまみ引きされ、ここに刷毛状工具による細かい刻み目が入れられる。器表面は刷毛目が良く残るが、裏面は撫で消されている。砂粒はあまり含まれず、焼成は良好で灰褐色を呈する。

(4) グリッド出土の遺物（第61・62図）

地区的概要に述べたように、本調査区はかなり激しく削平されている。現表土は再堆積土層であり、このためグリッドより検出された遺物は極めて少量で、かつ磨耗の激しいものである。

1～4は壺形土器、5～9は壺形土器、10は高壺形（あるいは壺形）土器、11・12は片刃の整形石器である。

1は口縁部であるが、ほぼ直線的に開くものと思われる。口唇部は平坦に成形され、その外周を角棒状の粘土が巡る。この外側のみは細かいLRの繩文が施されるが、他は表裏面とも刷毛目となっている。尚、口唇部内角にはS字状の結節文と粘土粒の貼付が加えられる。2は胴部上半の破片であるが同じく繩文LRが施され、その下端はS字状の結節となっている。3も同様であり、上より繩文LR、RL、LRと施され、その下をこれも結節文で区画している。4は頸部下位の破片であるが、3本の棒状工具を同時使用したと思われる併行沈線文、及び複線櫛歯文が見られる。器表面はわずかに刷毛目を残し、にぶい橙色を呈する。



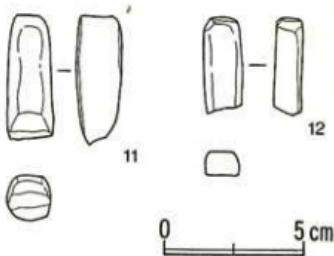
第61図 グリッド出土遺物(1)

臺形土器の口縁部では5がやや内彎し、9が強く外反するものと思われる。口唇部は6がやや尖锐である以外は概ね斜めに成形されており、このうち8はわずかに肥厚している。その外端には5～8が刷毛状工具による刻み目、9は指頭押捺が各々加えられている。器表面には刷毛目が残るが、8・9以外の裏面と6・7は撫で状となっている。

10は壊部1/3程の破片にすぎないが、その器壁は内彎ぎみに緩く立ち上がり、平坦な口唇部へと移行している。ここより器表面には、撫系Rが網目状、縄文LR、網目状の順に施文されている。文様帶の下部及び裏面は丁寧に磨かれたうえ、赤色に塗彩されている。胎土中には細砂粒を良く含み、焼成はかなり良好で硬質である。

11・12はともに刃部を欠損するが、全面を良く磨かれている。現状では11が長さ4.3cm、幅1.5cm、厚さ1.5cm、重さ20.5gを測り、断面は円形様となる。12は長さ3.6cm、幅1.3cm、厚さ0.7cm、重さ9.5gを測り、断面は蒲鉾形を呈する。

(創持 和夫)



第62図 グリッド出土遺物(2)

5. 近世の遺構と遺物

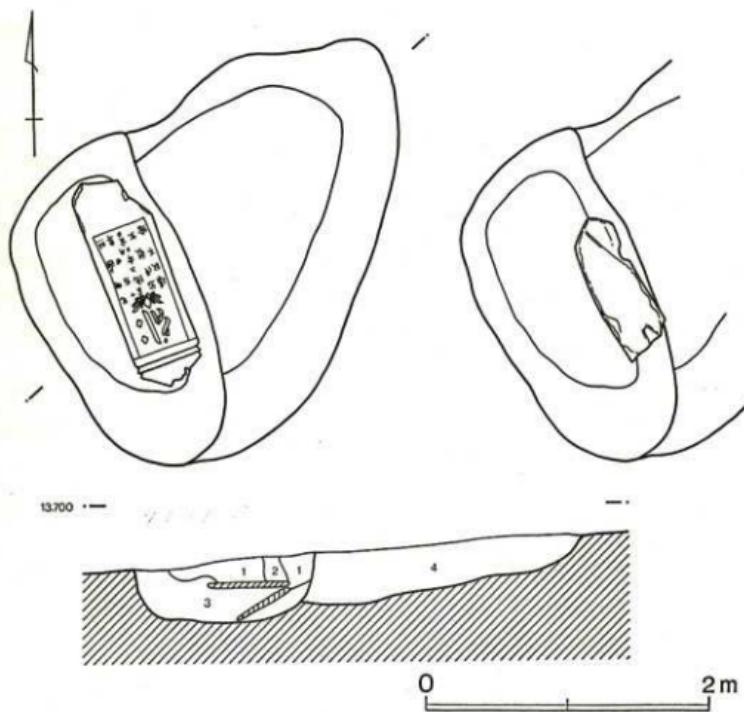
調査区内には数多くの近世遺構が存在するが、紙数の関係もあって大半は割愛する。ここでは板石塔婆を出土した土壙、及び墓壙群についてのみ記す。

(1) 土 壙

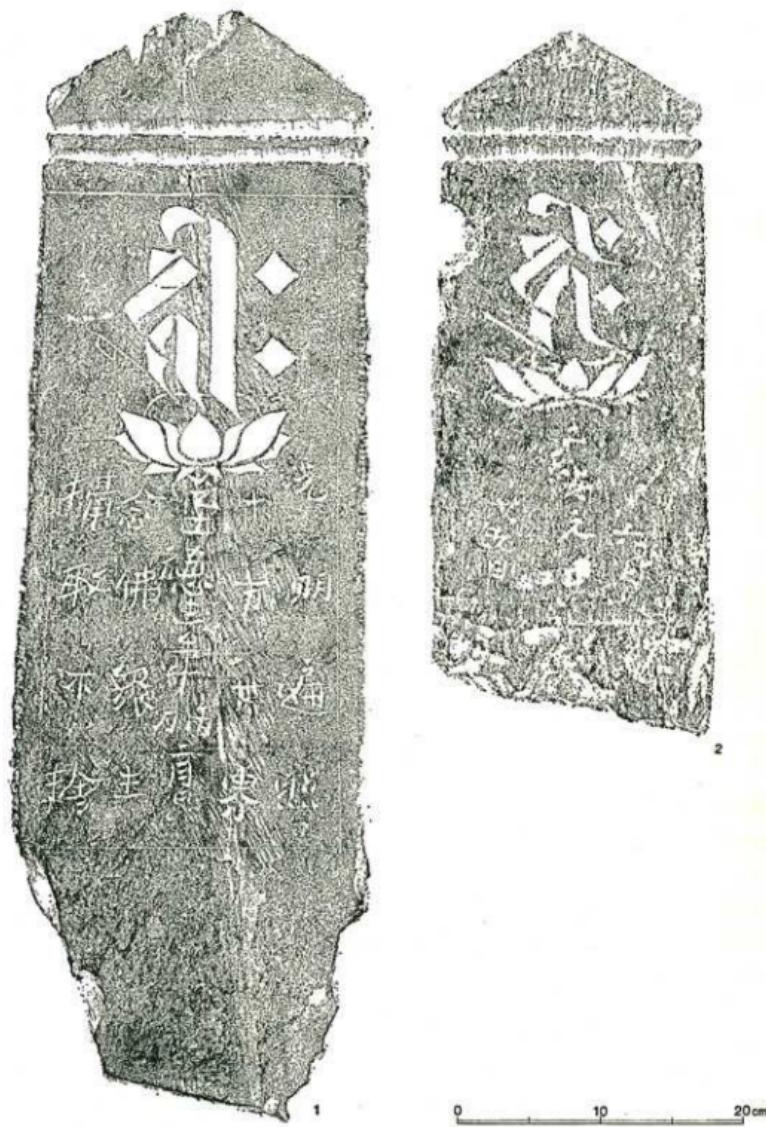
第15号土壙 (SK-15) (第63図)

(位置) N-6-6 グリッド (形状) 楕円形を呈する土壙2基の切り合いである。西側の板石塔婆を出土した土壙が新しいものであるが、底面はほぼ舟底形を呈している。以下もこの西側土壙を中心に記していく。(規模) 120×60×23cm (主軸方向) N-29°-W (覆土) 以下の4層に分かれる。

第1層 暗黄色土 きめ細かいがしまり悪くバサつく。ローム粒を全体に含有する。



第63図 第15号土壙 (SK-15)



第64圖 第15號土壤出土遺物

第2層 暗黄色土 ロームブロック層

第3層 暗黄褐色土 ほとんど、ロームによって構成される。粘性は良いがしまりやや悪い。

第4層 褐色土 ローム粒を多量に含むが、しまり悪くバサつく。

(遺物) 中世の板石塔婆2基が土壤長軸に平行して出土した。2基は裏面を合わせるような形となっており、1基は覆土中位に浮いている。

出土遺物（第64図）

1は頂部をわずかに欠損するが、高さ80cm、上幅22.5cm、下幅24.5cm、厚さ2.5cmを測る。頭部には二条線及び額が表出される。枠線は46.6cm×21.8cmを測り、この内に種子でキリーク（阿弥陀）、蓮台、紀年銘、偈が表出される。種子と蓮台はきれいな薬研掘りとなっている。

紀年銘は「至徳三年（1368）^丙_{（一月）}二月日」また偈には「光明遍照 十方世界 念佛衆生 摂取不捨」という一文が記されている。この他拓影では不明瞭であるが、中心線及びそこから左右に約5cmづつ各1本、枠線の下線から約7cm毎に4本の浅い条線が見られ、枠線内を16枡に分割している。その後に中心線上へ紀年銘、1枡1文字で偈がそれぞれ掘られている。これらの条線は文字割り付けのために施されたものと思われるが、その文字は種子と蓮台に比して稚拙な感をまぬがれない。

2は下部を欠損するものと思われるが、高さ48cm、上幅17.5cm、下幅19.5cm、厚さ2.5cmを測る。頭部に二条線が施され、枠線は29.7cm×15.7cmの浅いものである。種子でキリーク（阿弥陀）を表出し、その下に蓮台が付く。

紀年銘は「^{（一月）}安元年（1368）六月廿五日」と読める。やはり種子と蓮台はきれいな薬研掘りであるが、紀年銘は稚拙である。

(2) 墓 墳

第1号墓塙（ST-1）（第65図）

(位置) M-5-9グリッド（形状）下整橈円形であるが、一部ST-2に切断される。底面はほぼ平坦で浅い。（規模）105×80×20cm（主軸方向）N-50°-W（覆土）以下の2層に分かれる。

第1層 明褐色土 ローム粒を多量に含む。きめ細いがしまり弱くバサつく。

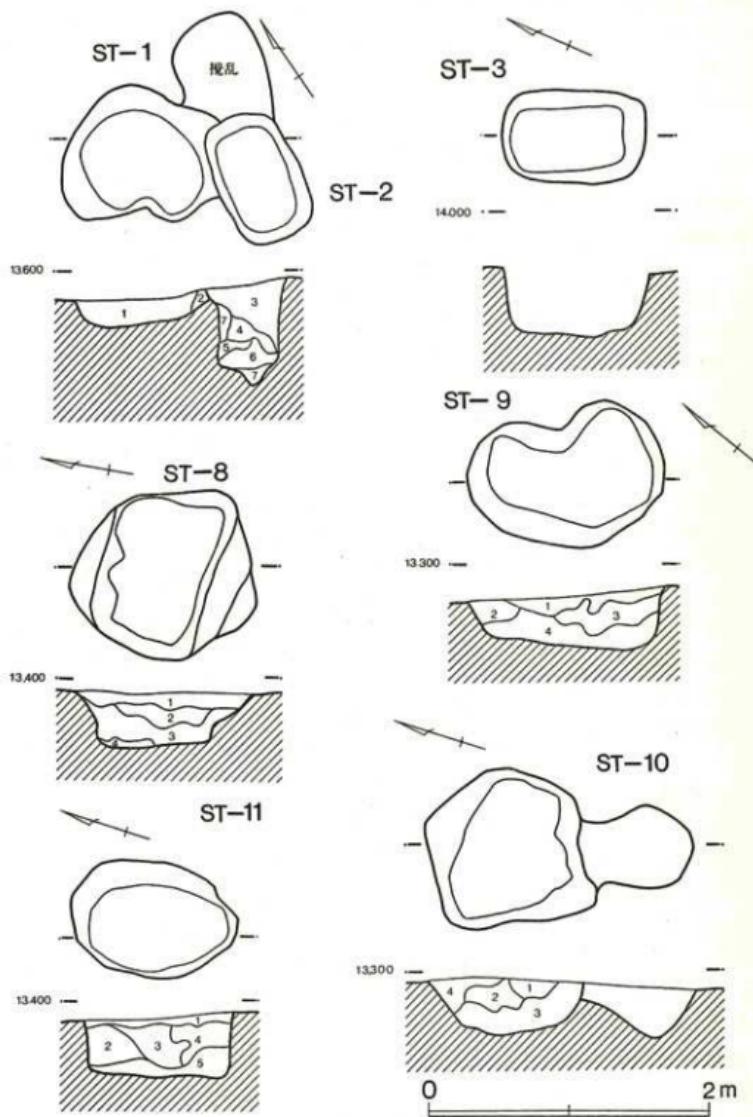
第2層 茶褐色土 第1層に極似するが、炭化物を少量含んでいる。

(遺物) 見られなかった。

第2号墓塙（ST-2）（第65図）

(位置) M-5-9グリッド（形状）隅丸長方形でST-1を切断する。断面は箱形を呈し、壁は垂直に立ち上がる。（規模）170×60×65cm（主軸方向）N-13°-E（覆土）以下の5層に分けられる。

第3層 黒褐色土 ローム粒を少量含むが、きめ粗くしまり弱い。



第65図 第1・2・3・8・9・10・11号基壙 (ST-1・2・3・8・9・10・11)

明花向A

- 第4層 茶褐色土 ロームブロックが点在し、ボソつく。
第5層 黒褐色土 黒色土がしみ状に広がり、わずかに骨片が見られる。
第6層 茶褐色土 ローム粒を多く含み、人骨が多く見られる。
第7層 茶褐色土 ロームブロックで構成される。（遺物）見られなかった。

第3号墓壙（ST-3）（第65図）

（位置）M-5-20グリッド（形状）隅丸長方形で断面は箱形を呈する。（規模）100×70×50cm
（主軸方向）N-28°-W（遺物）永楽通宝6枚が重なって出土している。（第68図）

第4号墓壙（ST-4）（第66図）

（位置）M-5-20グリッド（形状）長方形で断面は箱形を呈するが、南をST-5に切断される。（規模）110（推定）×65×35cm（主軸方向）N-45-W（遺物）寛永通宝6枚が重なって出土している。（第68図）

第5号墓壙（ST-5）（第66図）

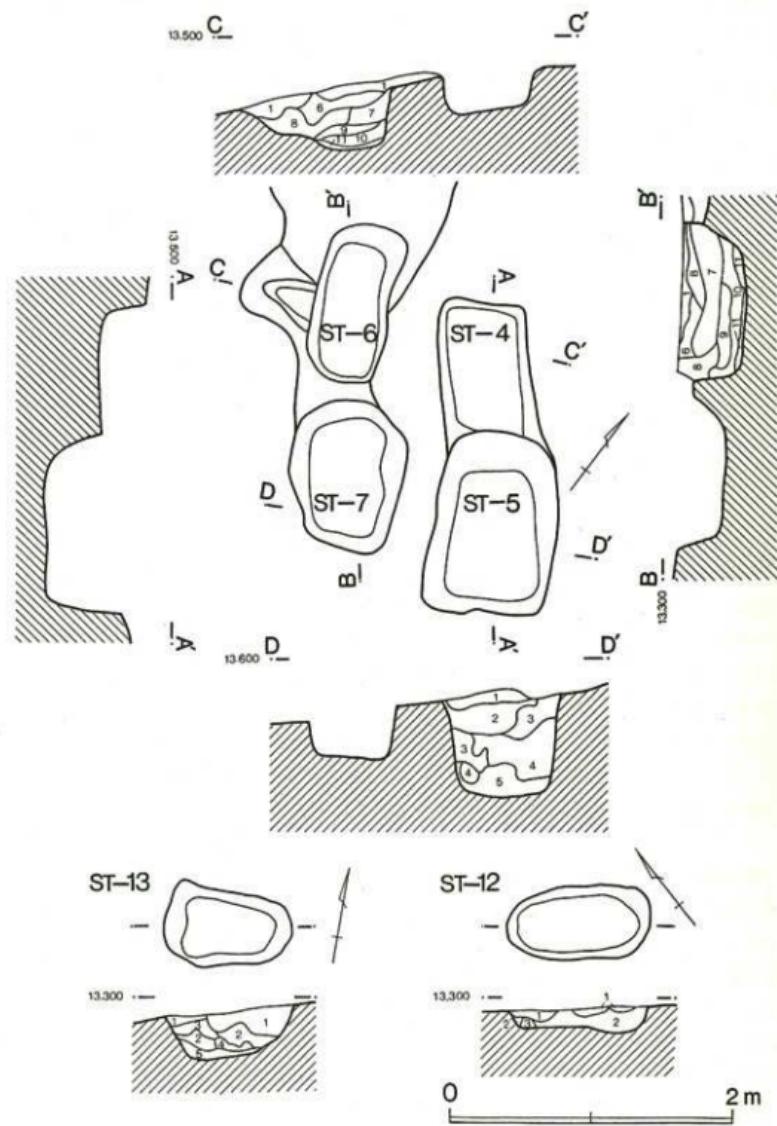
（位置）M-5-20グリッド（形状）長方形で断面は箱形を呈する。ST-4を切断。（規模）130×90×70cm（主軸方向）N-30°-W（覆土）以下の5層に分かれる。（ST-6と共に）

- 第1層 暗茶褐色土 多量のローム粒を含むが、きめ粗くしまり弱い。
第2層 茶褐色土 少量のローム粒を含む。きめ粗いがややしまり有り。
第3層 明茶褐色土 きめ粗くしまり弱いが、大形のロームブロックを良く含む。
第4層 暗茶褐色土 ローム粒を多く含む。きめ細かくしまり良い。
第5層 暗茶褐色土 ロームブロックにより構成され、骨片を含んでいる。
（遺物）見られなかった。

第6号墓壙（ST-6）（第66図）

（位置）M-5-19グリッド（形状）隅丸長方形を呈する火葬墓で木炭層が見られる。西壁には焚口様の突出部が設けられる。（規模）115×55×45cm（主軸方向）N-29°-W（覆土）以下の7層に分かれる。

- 第1層 ST-5参照。
第6層 茶褐色土 ローム粒を多く含む。きめ細かくしまり有り。
第7層 暗茶褐色土 ローム粒を少量含み、しまり有り。
第8層 暗茶褐色土 ローム粒炭化物を少量含む。
第9層 淡黒色土 加熱ローム粒・炭化物を含み、骨片が多く見られる。
第10層 木炭層 薪状の雜木及び竹がきれいに並べられている。
第11層 褐色土 ロームブロックが混入する。底面はわずかに火を受けており、赤く変色している。



第66図 第4・5・6・7・12・13号墓構造 (ST-4・5・6・7・12・13)

明花向A

(遺物) 寛永通宝16枚がワラ状の植物繊維に差し通されて出土している。本跡は火葬墓であるがこれらは火を受けておらず、火葬後に副葬されたものと思われる。(第68図)

第7号墓壙 (ST-7) (第66図)

(位置) M-5-25グリッド (形状) 楕円長方形で断面は箱形を呈する。(規模) 105×80×40cm

(主軸方向) N-41°-W (遺物) 見られなかった。

第8号墓壙 (ST-8) (第65図)

(位置) M-5-25グリッド (形状) やや不整の椭円長方形を呈するが、南北断面では一段浅い立ち上がりが見られる。(規模) 135×130×40cm (主軸方向) N-83°-W (覆土) 以下の4層に分かれる。

第1層 暗褐色土 黒色土がしみ状に広がり、ローム粒はほとんど見られない。

第2層 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

第3層 黄褐色土 大形のロームブロックで構成される。

第4層 暗黄褐色土 大形のロームブロックで構成され、骨片を良く含む。

(遺物) 見られなかった。

第9号墓壙 (ST-9) (第65図)

(位置) M-5-25グリッド (形状) 不整梢円形を呈し、底面は南側へやや傾斜。(規模) 140×80×40cm (主軸方向) N-24°-W (覆土) 以下の4層に分けられる。

第1層 茶褐色土 ローム粒はあまり見られない。しまり弱くバサつく。

第2層 茶褐色土 混有物があまり見られず、単一的土層となる。

第3層 茶褐色土 ロームブロックを多量に含むが、しまり弱くボソつく。

第4層 茶褐色土 ローム粒を多量に含み、粘性が強い。若干の骨片が見られる。

(遺物) 見られなかった。

第10号墓壙 (ST-10) (第65図)

(位置) M-5-25グリッド (形状) 不整方形で断面も舟底形を呈する。(規模) 110×110×40cm

(覆土) 以下の4層に分かれる。

第1層 茶褐色土 ロームブロックを多く含むがボロボロする。

第2層 茶褐色土 きめ細かく、ロームはあまり含まれない。

第3層 茶褐色土 ローム粒を多量に含むが、しまり弱くバサつく。

第4層 茶褐色土 ロームブロックで構成され、ボロボロとなる。わずかに骨片を含む。

(遺物) 見られなかった。

第11号墓壙 (S T-11) (第65図)

(位置) M-5-25グリッド (形状) 楕円形を呈し、断面は箱形となる。(規模) 120×85×65cm
 (主軸方向) N-17°-W (覆土) 以下の5層に分かれる。

- 第1層 暗褐色土 ロームをわずかに含む。しまり弱くパサつく。
 - 第2層 明褐色土 大形のロームブロックを含み、しまり弱くボソつく。
 - 第3層 茶褐色土 ロームブロックを少量含み、下位に若干の骨片が見られる。
 - 第4層 茶褐色土 第3層に近似するが、ロームをより多く含む。骨片は見られない。
 - 第5層 暗茶褐色土 ロームブロックは見られず、しまり・粘性ともに強い。
- (遺物) 見られなかった。

第12号墓壙 (S T-12) (第66図)

(位置) N-5-5グリッド (形状) 楕円形 (規模) 100×50×15cm (主軸方向) N-52°-W (覆土) 以下の3層に分かれる。

- 第1層 暗茶褐色土 ローム粒を多く含むが、しまり弱くパサつく。
 - 第2層 茶褐色土 第1層に近似するが、ロームがより多く含まれる。わずかに骨片が見られる。
 - 第3層 茶褐色土 粘土
- (遺物) 見られなかった。

第13号墓壙 (S T-13) (第66図)

(位置) N-5-5グリッド (形状) 楕円形で断面は舟底形を呈する。(規模) 90×50×30cm (主軸方向) ほぼE-W (覆土) 以下の5層に分けられる。

- 第1層 茶褐色土 ローム粒及び小形のロームブロックを多量に含む。
 - 第2層 暗茶褐色土 大形のロームブロックを多く含む。しまり弱くボソつく。
 - 第3層 暗茶褐色土 ローム粒を若干含むが、全体的に黒味がある。きめ細かくしまりも良い。
 - 第4層 黑褐色土 黒色土と褐色土が混じり合っており、若干の骨片を含む。
 - 第5層 明褐色土 粘質土。
- (遺物) 見られなかった。

第14号墓壙 (S T-14) (第67図)

(位置) N-5-5グリッド (形状) 長方形で断面は箱形となる。(規模) 100×55×50cm (主軸方向) N-69°-W (覆土) 以下の7層に分かれる。

- 第1層 茶褐色土 ロームブロックを多く含む。しまり弱いが粘性強い。
- 第2層 茶褐色土 第1層に近似するが、より大形のロームブロックとなる。しまり強い。
- 第3層 暗茶褐色土 ロームの混入はまれである。しまり弱くパサつく。
- 第4層 茶褐色土 粒の粗い土で構成される。ロームの混入はまれである。
- 第5層 茶褐色土 ロームブロックで構成されるが、ボロボロである。

明花向A

第6層 茶褐色土 きめ細かく粘性が強い。骨片を多く含む。

第7層 明褐色土 ロームブロックで構成され、しまり強い。

(遺物) 見られなかった。

第15号墓壙 (ST-15) (第67図)

(位置) N-6-1グリッド (形状) 楕円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。(規模) 140×75×24cm (主軸方向) N-17-W (覆土) 以下の6層に分けられる。

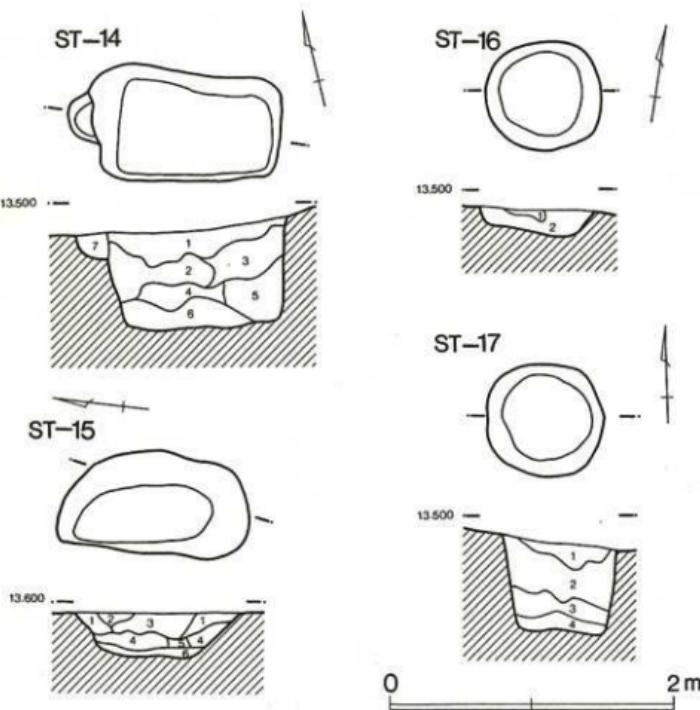
第1層 茶褐色土 きめ細かくしまりも良いが、バサバサする。

第2層 ロームブロック。

第3層 茶褐色土 ロームがしみ状に含まれ、粘性良好。

第4層 茶褐色土 ロームブロックを多く含み、ボソボソする。

第5層 暗褐色土 ロームブロックを良く含むが、しまり弱い。



第67図 第14・15・16・17号墓壙 (ST-14・15・16・17)

第6層 ロームブロックで構成される。しまり・粘性ともに強い。わずかに骨片が見られる。
 (遺物) 見られなかった。

第16号墓壙 (S T-16) (第67図)

(位置) N-5-10グリッド (形状) 円形を呈するが、きわめて浅い。(規模) 85×80×15cm (覆土) 以下の2層である。

第1層 黒褐色土 ローム粒と黒色土粒の混合層。きめ粗くしまりなし。

第2層 暗茶褐色土 きめ細かく、しまり・粘性強い。ごくわずかに骨片を含む。

(遺物) 見られなかった。

第17号墓壙 (S T-17) (第67図)

(位置) N-5-15グリッド (形状) 円筒形を呈する。西を向いて跪座状態の人骨を検出。(規模) 85×80×50cm (覆土) 以下の4層に分かれる。

第1層 茶褐色土 ローム粒を多量に含み、きめ粗くボソつく。

第2層 暗茶褐色土 第1層に近似する。ロームブロックを少量含みボソつく。

第3層 茶褐色土 ローム粒を少量含む。しまりなく頭骨を含む。

第4層 黒褐色土 きめ細かくしまりなし。人骨を多く検出。

(遺物) 寛永通宝6枚が太腿骨上より出土している。(第68図)

出土遺物 (第68図)

遺物は第3・4・6・17号墓壙より出土しており、すべてが古銭である。いずれも墓壙底面より浮いた状態であったが、各銭は密着して検出されている。これらは所謂、三途の川の渡し貨としての「六文銭」と考えられるが、第3・4・17号墓壙のものが文字どおり6枚であるのに対し、第6号墓壙では16枚と多くなっている。六文銭は第3号墓壙が永楽通宝、他は寛永通宝で構成されている。

人骨の出土した墓壙は多いものの、その大半は腐蝕が進行しており、骨片あるいは歯牙のみが認められたにすぎない。このなかで、第17号墓壙の遺骨だけは埋葬時の状態を保っており、西方を向いた跪座の姿で安置されたことが窺える。また、第6号墓壙は現地での火葬を示しており、薪炭を組んだ上で遺体を茶毬にふしたと思われる。但し、墓壙の規模は大人を仰臥させた場合にかなり狭いことや遺存する人骨が細いことなどから見て、あるいは子供を埋葬したものかもしれない。他がすべて土葬墓であることや副葬された六文銭の量が多いことなど、本墓域内においてやや異質な点が見られる。

尚、各墓壙内より検出された歯牙のほとんどは異常な程に磨耗しており、咬合部のエナメル質はほぼ失われ、歯髄にまで達していたことを付記しておく。

(飼持 和夫)

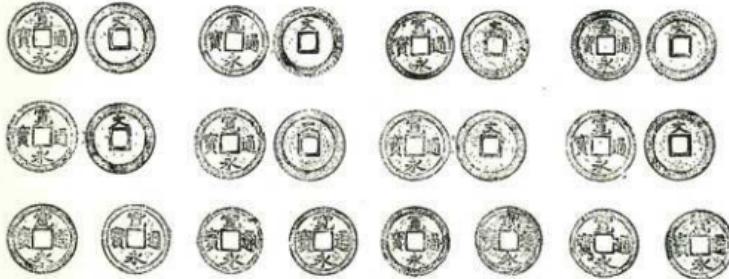
ST-3



ST-4



ST-6



ST-17



0 5 cm

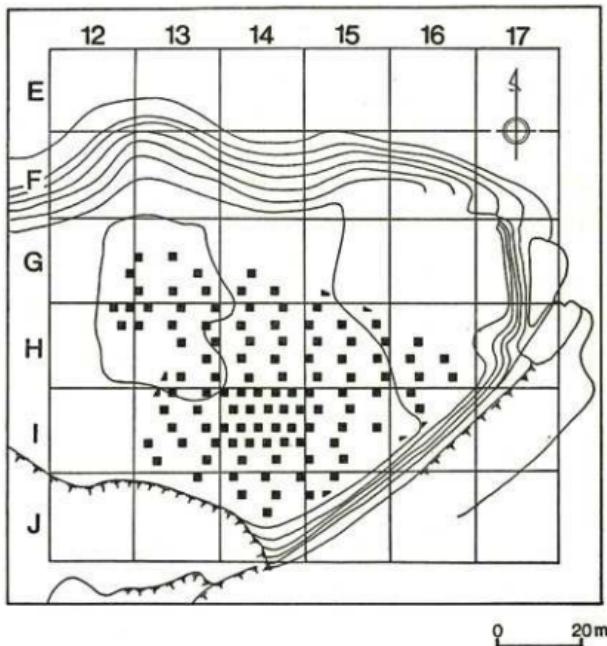
第68圖 第3·4·6·17號墓出土遺物

V 明花向遺跡B区の調査

1. 地区の概観と調査経過

B区は県道柳崎・大宮線の通る小谷を挟み、台地の東側部分にあたる。A区と同様に全面を削平されているが、40~50cmの表土下は西側で一部遺物包含層を残している。しかし、反対に東側はハードローム層下位にまで達しており、造構確認面は東へやや傾斜したものとなった。この他にA区と同じく近世の溝と土壙が全体に分布しており、削平以前の造構を切断しているものが多い。尚、^(註1)
B区は昭和39年の「東中尾」の付編、柵文早期遺跡地名表のNo.5遺跡として紹介されており、柵文時代早期の櫛糸文、山形文土器の散布することが記されている。

B区の層序はC区のそれに準ずるが、上述のように一部に遺物包含層を残している。第70図にはこの部位の層序を示してあり、以下にその概略を記す。



第69圖 明花向遺跡B区先土器時代調査区

第Ⅰ層 茶褐色土層 きめ細かいが、しまり弱くパサつく。ローム粒を良く含む。再堆積土層で、この下が削平面となる。

第IIa層 黒褐色土層 遺物包含層であり、しまり、粘性ともに強い。弥生時代の遺構が掘り込まれる。

第IIb層 暗茶褐色土 上・下層との中間的土層で、その変化は漸移的である。縄文時代の遺物を包含する。

第Ⅲ層 黄茶褐色土 層所謂ソフトロームにあたり、下第Ⅳ層との境界は凹凸が顕著となる。

第Ⅴ層 褐色土層 ハードローム層に相当し、調査区東方ではこの面が露出している。

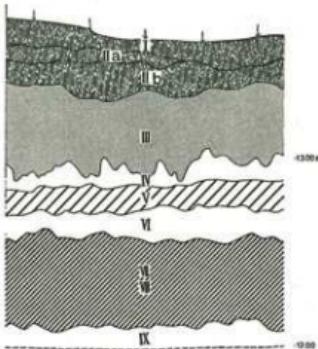
第Ⅵ層 暗褐色土層 第Ⅰ黒色帶に相当すると思われるが、明花向遺跡区の当該層に比して色調が薄い。このため、下層との境界は不明瞭となる。

第Ⅶ層 桃色土層 下層との境界は明確であるが、明花向遺跡A・C区に比して混有物が少ない。

第Ⅷ層 暗褐色土層 所謂第Ⅰ黒色帶上部に該当すると思われるが、明花向遺跡A・C区のように下部との境界は不明確である。

第Ⅸ層 暗褐色土層 第Ⅰ黒色帶下部に相当すると思われるが明確ではない。

第Ⅹ層 黄褐色土層 先土器時代の確認調査は本層途中まで行ったが、何ら遺物の出土は見られなかった。上層との境界は明瞭である。



第70図 明花向遺跡B区層序

検出された遺構は縄文時代早期の住居跡1軒、炉穴6基、土壙4基、弥生時代中期の住居跡6軒、方形周溝墓1基、弥生時代後期の住居跡3軒、中世の堅穴状遺構2基、墓壙19基他である。縄文時代の住居跡と炉穴はほぼ台地中央に集中するが、内一基は30以上の炉床が複雑に切りあいながら設営されており、北端の台地肩部に広い集中分布を示す。弥生時代の住居跡は、西側の台地奥部に中期、東側の台地縁辺部に後期のものが分布し、それぞれ一つの集落を形成している。そしてそのほぼ中央に方形周溝墓が存在している。中世の墓壙は台地中央の西寄りに一部切り合いながら集中し、堅穴状遺構はその北側に位置する。グリッドからの遺物は包含層の残る西側に多く出土したが、大半は縄文時代早期の条痕文系土器であった。また小形ではあるが、縄文式・弥生式土器に混じって小形の銅鏡が出土したことが特筆できよう。

B区は堆土の搬出が困難であるため、調査区内を南北に二分して土を置き換えた。このために調査の手順も不規則となり、全体写真も断念せざるを得なかった。昭和56年11月19日より、まず南側のI・Jグリッド西方から調査を開始する。12月7日に弥生時代中期の住居跡を検出し、その南・

東への集落の広がりを慎重に追った。しかし、意に反して近世の土壌が確認されるばかりであった。昭和57年2月1日は台地縁部で著しく削平を受けた弥生時代後期の住居跡1軒、さらに縄文時代早期の炉穴一基を検出した。ついで炉穴の精査中には、この炉穴が縄文時代早期の撚糸文土器を伴う住居跡の中央にあることが判明し、2月23日には航空写真撮影を実施する。遺構測量後、先土器時代についてその確認調査（ 4×4 mのグリッド試掘）を行うが、一点の遺物出土も見られず3月16日に終了した。3月4日までこの住居跡を精査する。また同時にB区北半部の調査に入る。北半部は東側より着手し、やはり台地縁部より弥生時代後期の住居跡2軒を検出す。3月9日までに先の縄文時代住居跡のすぐ北に4基の炉穴を確認した。さらに3月8日には方形周溝墓を検出し、精査を行う。この後、再び排土の移動を行い、調査区北西に調査を移す。4月20日には落込みとしては不明瞭ながらも、広範な焼土粒の広がりを認め。これが多数の炉穴の切り合いであることを確認したのは5月6日であった。この炉穴の精査は6月29日まで行ったが、これと併行して4月26日より弥生中期の住跡居が5軒検出され、ほぼ一つの集落の広がりを把握するに至る。これらについては、順次精査を7月14日まで実施する。この後、中世墓塚等の調査を行い、7月23日航空写真撮影を経て先土器時代の調査を開始する。しかし、何ら遺物の出土を見ないまま8月14日に明花向遺跡B区すべての調査を終了する。

（飼持 和夫）

註1 三友国五郎・安岡路洋「東中尾」埼玉県立文化会館

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（S I-1）（第71図）

I-15-2グリッドを中心に位置する。北側の一部をS Z-1の南溝に切断されるほか、内部にはS F-6が床を掘り抜いている。さらに削平と近世土壤による搅乱が激しく、遺存状態は極めて悪いものである。形態は7.1×6.8mを測る隅丸方形であり、面積約48.3m²、主軸方向はおよそN-42°-Wを指す。四辺は直線的となり、このうち北東壁はやや長くなっている。尚、炉跡は検出されなかった。

覆土は以下の4層であるが、床面上に1枚が乗るのみである。いずれも緻密で強くしまり、ローム質化している。このため、床面との境界は不明瞭であった。

第1層 暗灰色土 きめ細かいがややしまりは粗い。ローム粒・若干の焼土粒・炭化物粒を含む。

第2層 暗黄茶褐色土 ローム粒は目立たず炭化物を良く含む。焼土粒も見られる。粘性は良い。

第3層 茶褐色土 きめ細かく、しまり大変良い。ロームは部分的にブロック溶混が見られる。

第4層 黄茶褐色土 きめやや粗くしまり弱い。ローム粒・焼土粒を含み若干の炭化物も見られる。

壁は削平のためにほぼ失われており、わずかに7cm程が残存するにすぎない。現状では緩やかに立ち上がり、住居跡全体は浅く窪んだような状態となっている。

床面はハードローム層に掘り込まれ、硬くしまっている。全体は概ね平坦となっているが、中央部へ向けてわずかに傾斜していることが窺える。また、この床面からは39個の小穴が検出され、いずれも径8~25cm、深さ5~15cm程の小形のものである。その分布は壁及び壁際で集中する傾向が見られ、中央部ではまばらとなっている。このような状態は、近年報告例の増えた燃糸文系土器を出土する住居跡の形態と共通しており、本跡もその出土遺物とともに該期の一資料に加えられよう。

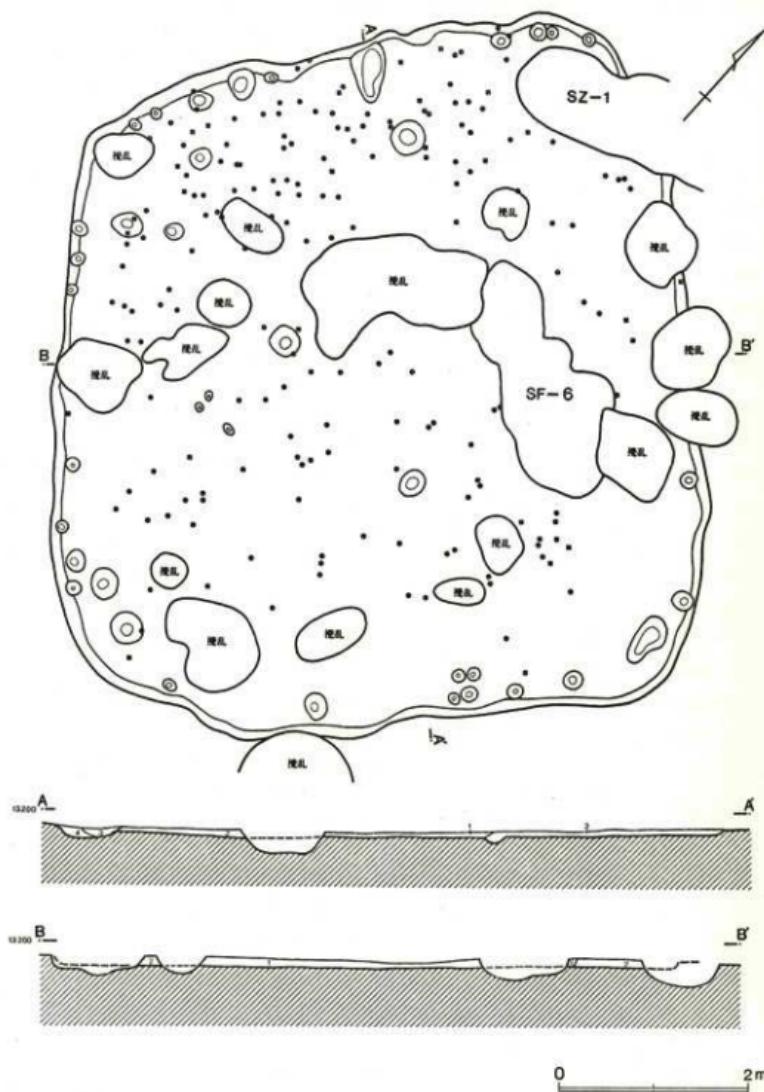
遺物は200点程が出土したが、多くは北西の壁寄りに集中する。土器はいずれも第Ⅰ群土器で、無文、あるいは燃糸文を有するものである。但し、極めて小片であるため、図示の可能なものは少量である。

(2) 炉 穴

第1号炉穴（S F-1）（第72~75図）

台地としては北側の肩部にあるG-12・13グリッドに位置し、37基が重複集合するものである。単位として認められるものも存在するが、その多くは複雑に切り合いを見せている。この他にも数基の土壤が設営されており、全体は巨大な落ち込みとなっている。その広がりは調査区外にも延びているため把握できないが、現状では東西約12.5m、南北約7mの範囲を有している。新旧関係が確認できたものは第74図に示したが（旧→新）、これはすべて土層観察に依拠している。

覆土は全体で以下の26層に分かれる。いずれもロームの影響が強く、しまり・粘性とも非常に優れている。



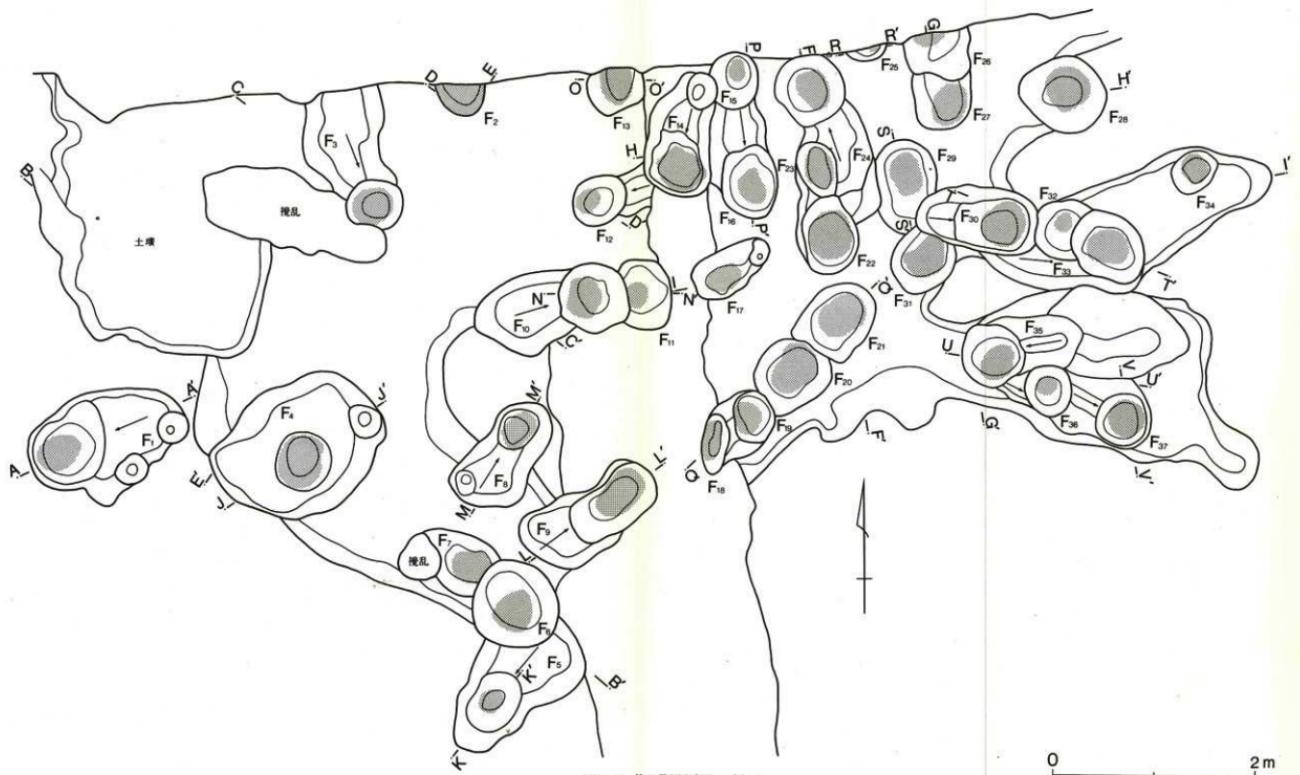
第71図 第1号住居跡 (S I - 1)

- 第1層 茶褐色土 ローム粒がしみ状に点在。少量の炭化物及び赤色スコリアを含有。
- 第2層 暗茶褐色土 褐色土と暗茶褐色土ブロックが混入している。炭化物粒を少量含有。
- 第3層 暗黄茶褐色土 ロームの溶混が強くロームブロックが点在、粘性・しまりとも強くなる。
- 第4層 暗茶褐色土 きめはやや粗くなる。炭化物粒・ローム粒を少量含有。
- 第5層 暗褐色土 褐色土ブロックが少量点在している。炭化物粒を多く含む。
- 第6層 暗茶褐色土 ロームブロックが褐色土中に溶け込み斑文となる。炭化物を少量含む。
- 第7層 茶褐色土 きめの非常に細かい土層である。良くしまっている。
- 第8層 暗茶褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。大形の黒色土を少数含む。
- 第9層 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含有。粘性が強い。焼土粒を少量含む。
- 第10層 褐色土 褐色土ブロックとロームブロックとが溶混している。焼土粒を含まない。
- 第11層 暗褐色土 粒は粗であるが、大変粘性の強い土層。わずかの焼土粒を含有。
- 第12層 茶褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含み、ロームの溶混が著しい。きめ粗く粘性あり。
- 第13層 褐色土 きめは粗いがしまりはある。焼土粒を少量含有。
- 第14層 暗茶褐色土 ロームが薄く溶混している。焼土粒を少量含有。
- 第15層 黄褐色土 ロームの溶混が著しい。きめは粗いが、しまり・粘性とも強い。
- 第16層 暗茶褐色土 土粒はやや粗く、粘性が弱くサラサラしている。
- 第17層 褐色土 ローム粒と褐色土ブロックを含む粘性の弱い土層。焼土粒・炭化物を少量含有。
- 第18層 茶褐色土 きめはやや粗いが良くしまっている。焼土炭化物は含まない。
- 第19層 暗茶褐色土 ロームが上部に多く溶け込んでいる。わずかではあるが、焼土粒を含有。
- 第20層 褐色土 焼土粒を含む。ややきめが粗い。
- 第21層 黄茶褐色土 ロームの溶混が著しい。炭化物を少量含有。大変良くしまった土層。
- 第22層 淡茶褐色土 土粒細かくパサパサするが粘性に欠ける。
- 第23層 淡黒褐色土 しまりは強いがパサパサする。微量のロームブロック・焼土粒を含む。
- 第24層 茶褐色土 しまり・粘性とも強い。焼土・炭化物粒を微量に混入。
- 第25層 暗茶褐色土 少量ではあるが、焼土粒を全体にわたり含入するため赤色味が強い。
- 第26層 暗黄色土 ロームブロック土層。土壤底付近に大形のロームブロックを含む。

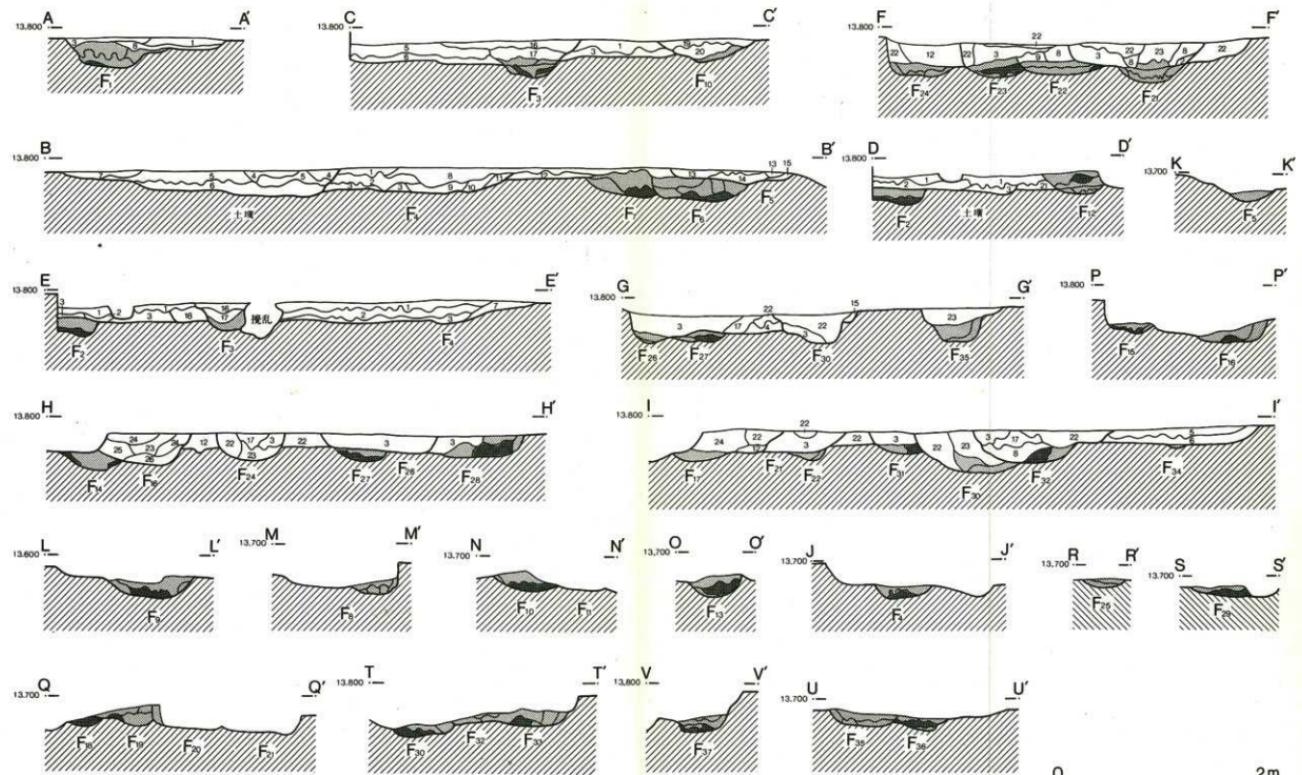
遺物は測点総数で1000以上が出土しているが、その分布は西側土壤からF₃・F₄周辺にやや集中する傾向が見られる（第75図）。土器は第I・IV・V群土器が認められる。第I群土器は一部焼土中に検出されるほかは覆土の上層に多く、第V群土器は焼土中及び覆土中位に多い。但し、全体的には剖跡中からの出土は少なく、各土器の所在する構造は特定しがたい。三者は第I群と第V群がほぼ同率、第V群がその3倍程度の割合で出土している。この他に石器・舟形土製品等がわずかながら見られる。

以下、各炉穴（炉跡）についてその概略を記す。

F：（位置）G-12-14グリッド（形状）炉跡と足場からなり、梢円形を呈する単体炉穴である。
 （規模）160×104×12cm（主軸方向）S-75°-W（焼土の状態）84×70cmの範囲を有し、厚さは

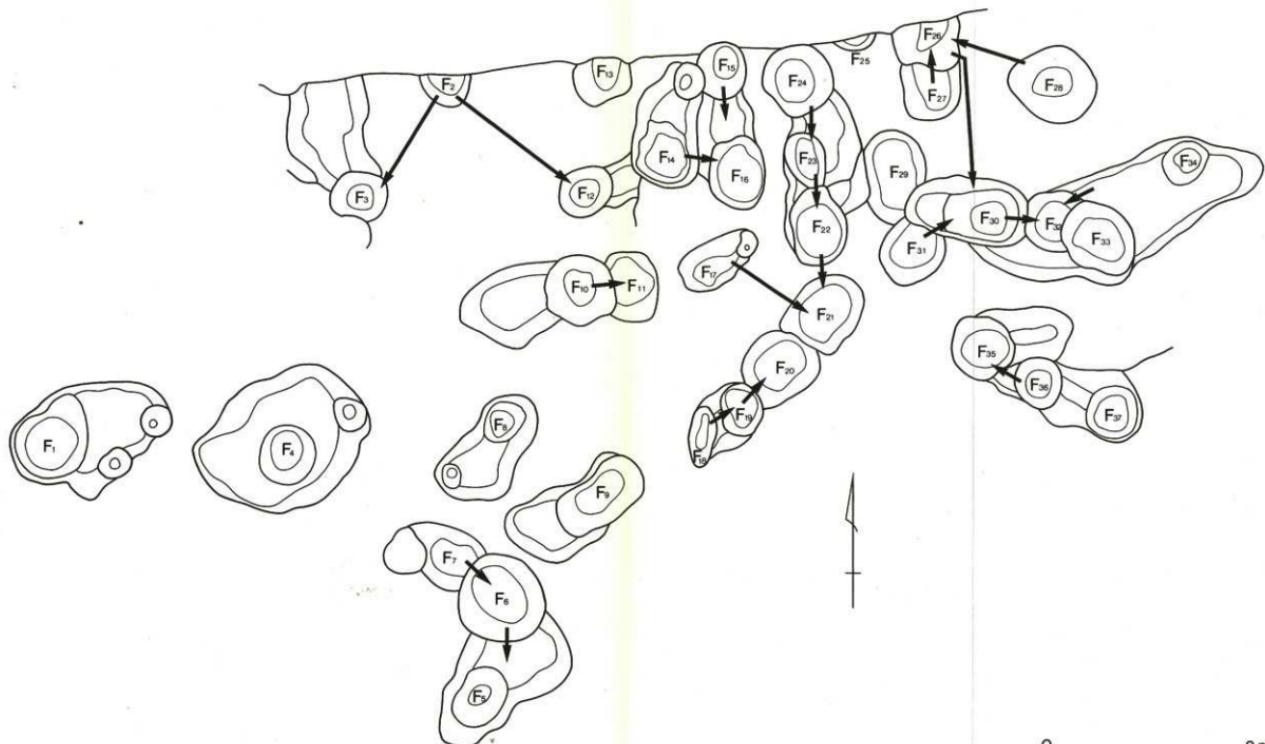


第72圖 第1号炉穴(SF-1)(1)



第73図 第1号炉穴(2)

-123,124-



第74図 第1号芦穴新旧関係
-125, 126-

0 2m



第75圖 第1号炉穴焼土範囲及び遺物分布状態

-127, 128-

約25cmを測る。上層は赤褐色を呈し、焼土粒と褐色土粒で構成される。下層はさらに赤味が強く、褐色土の混有はまれである。最下部は焼土ブロックが多く入る。（炉跡）74×66×18cmを測り、炉床は赤焼が顕著でバリバリとなる。

F₂（位置）G-12-10グリッド（形状）上部に土壤が設営されるほか、北側が調査区外へかかるため、全体の規模・形態は不明である。炉跡の半分程を検出したにすぎない。（焼土の状態）およそ70×32×16cmが認められ、焼土と焼土ブロックで構成される。きれいな赤色だがボソボソとする。（炉跡）現状で50×32cmの半円形を呈し、遺構確認面からの深さは約28cmを測る。炉床は良く赤焼しているが、やや軟質な感じである。

F₃（位置）G-12-15グリッド（形状）炉跡と足場からなり、長楕円形を呈すると思われる。（規模）現状で146×90×18cm（主軸方向）S-18°-E（焼土の状態）径約52×42cm、厚さ約20cmを測る。焼土粒と褐色土粒からなり、下層では多量の炭化物が含まれている。色調はやや暗くザラザラする（炉跡）60×54cmの円形で、深さは約14cmである。炉床は良く焼けており、炭化物が多く密着している。

F₄（位置）G-12-15グリッド（形状）楕円形でその中央に炉跡が営まれる。（規模）170×136×24cm（焼土の状態）62×30cm程の範囲に広がり、厚さは約12cmを測る。焼土粒と焼土ブロックからなり、ややボソつくがきれいな赤褐色を呈している。下層ではこの他にかなり多量の炭化物が含まれている。（炉跡）径60×58cmの楕円形で、深さは約14cmである。炉床は強く赤焼しており、広い範囲でガリガリの状態となっている。

F₅（位置）G-12-20グリッド（形状）小形の炉跡と広い足場からなり、やや洋梨状となる。

F₆埋没後の設営である。（規模）164×98×16cm（主軸方向）S-87°-W（焼土の状態）およそ径45cm、厚さ10cmを測る。焼土粒及び加熱されたローム粒で構成されるが、きめ粗くボソボソである。炭化物を多量に含んでおり、炉床にも多くが密着している。（炉跡）径64×44cmの楕円形を呈し、深さは10cm程である。炉床はわずかに硬化しているが、その範囲は狭く黄色味を帯びている。

F₇（位置）G-12-20グリッド（形状）大形の炉跡のみが検出された。F₇の埋没後にこれを切断して営まれる。（焼土の状態）75×58cm程の範囲を有し、厚さ約20cmを測る。上部は焼土粒と褐色土粒からなり、きめ細かくサラサラしている。下層は焼土ブロックを主としており、赤褐色で硬くしまっている。（炉跡）92×88cmの楕円形で、遺構確認面からの深さは約30cmである。炉床は良く焼けており、赤色味を強く帯びる。

F₈（位置）G-12-20グリッド（形状）炉跡のみの検出であり、東側をF₆に切断されている。（焼土の状態）範囲約70×55cm、厚さ約25cmを測る。上層は焼土粒に若干の加熱されたロームブロックと炭化物を含み、下層は主に焼土ブロックからなる。いずれもややボソつくものの、しまりに優れている。（炉跡）74×60cmの楕円形を呈し、遺構確認面からの深さは約28cmを測る。炉床は赤く良く焼けているが、やや軟質な印象を受ける。

F₉（位置）G-12-15グリッド（形状）長楕円形プランを示し、小形の炉跡と概ね平坦な足場からなる。（規模）122×60×24cm（主軸方向）N-28°-E（焼土の状態）45×35cm程の範囲に広がり、厚さ約12cmを測る。全体にきめの細かい均一した焼土粒からなり、赤褐色でサラサラする。

(炉跡) 44×36 cmの梢円形で深さは約14cmである。炉床は強く火熱を受け、赤くバリバリとなる。

F₉ (位置) G-12-15グリッド (形状) 非常に大形の炉跡と狭い足場からなり、不整の長方形を呈する。(規模) $142 \times 62 \times 12$ cm (主軸方向) N-54°-E とはほぼ平行して設営される。

(焼土の状態) およそ 80×35 cmの範囲を有し、厚さは約24cmで遺構確認面にまで達している。その広がりは瓢箪形であるため、確認時には2基の炉跡が切り合うものかと思われた。しかし断面観察と炉床の状態からはこれを示す形跡は認められなかった。上層では褐色土とロームを多く含んでおり、粘性が強い。下層はこれに反して赤色味が強く、焼土の他に炭化物も多量に見られる。(炉跡) $94 \times 50 \times 14$ cmを測り、炉床の赤焼は著しく、バリバリの状態が広範にわたって見られる。

F₁₀ (位置) G-12-15グリッド (形状) 炉跡は足場を切断するようにして営まれ、その東を一部F₁₁に切られる。全体は長梢円形状となる。(規模) $156 \times 74 \times 24$ cm (主軸方向) N-77°-E (焼土の状態) 径60cm程で、厚さは約20cmが認められる。しまりの良い焼土粒からなり、下部は焼土ブロック・炭化物を多く含む。尚、図示できなかったがF₁₁の焼土層は褐色土・ローム粒を多く含んでおり、その境界切断面は明瞭である。(炉跡) 70×68 cmのほぼ円形となり、深さは約13cmである。炉床は良く焼けているものの、やや軟質な感じである。

F₁₁ (位置) G-13-11グリッド (形状) 円形の炉跡のみで足場は不明。(焼土の状態) 40×36 cm程の範囲を有し、厚さは約16cmを測る。土層断面を図示できなかったが、焼土中には褐色土を多量に含んで赤色味が薄い。しまり弱くバサバサである。(炉跡) 80×70 cm程の梢円形を示し、深さは約8cmが認められる。炉床はわずかに赤く焼けているが、その範囲は狭いものとなっている。

F₁₂ (位置) G-12-15グリッド (形状) 梢円形を呈するものと思われるが、足場は東側を近世の溝とF₁₄に切断されている。(規模) 現状で $82 \times 40 \times 17$ cm (主軸方向) S-77°-W (焼土の状態) 範囲約 55×40 cm、厚さ約8cmを測る。焼土粒及び加熱されたローム粒が主体となり、しまりが強くザラザラしている。さらに、この上部から遺構確認面までにもかなりの焼土が認められ、部分的には厚く堆積した焼土ブロック層が見られる。(炉跡) $56 \times 49 \times 10$ cm。炉床はうっすらと赤焼し、その範囲は狭い。

F₁₃ (位置) G-12-10グリッド (形状) 現状では炉跡のみが部分的に検出されたにすぎないが、北側は調査区外へかかるために全体の規模・形態・主軸方向は不明である。(焼土の状態) 62×50 cm程の範囲を有し、厚さ約20cmを測る。主に焼土粒と焼土ブロックで構成され、これに若干の炭化物を含む。しまりが弱くボソボソする。(炉跡) 現状では $58 \times 48 \times 22$ cmが認められる。炉床は赤くきれいに焼けており、硬くザラザラとなっている。

F₁₄ (位置) G-13-11グリッド (形状) 長梢円形を呈し、大形の炉跡とやや狭い足場からなる。F₁₅に上部を切られる他、足場端部にはピット状の掘り込みが見られる。(規模) $124 \times 62 \times 22$ cm (主軸方向) S-11°-W (焼土の状態) 約 60×44 cmの範囲に広がり、厚さは約16cmを測る。焼土粒を主体として構成され、しまり弱くバサつく。また、加熱されたローム粒を多く含むため、全体的に黄色味を帯びる。(炉跡) 68×52 cmの円形を呈し、深さは約20cmが認められる。炉床は良く赤焼しているが軟質である。

F₁₅ (位置) G-13-6グリッド (形状) おそらく足場は南側へ延びるものと思われるが、F₁₆

に切断されるために不明である。（焼土の状態） $64 \times 46\text{cm}$ 程の範囲を有し、厚さは約8cmである。赤褐色の完全焼土層で、特に下部では大形の焼土ブロックが密集している。（炉跡） $58 \times 48\text{cm}$ の梢円形を呈し、遺構確認面からの深さは約34cmを測る。炉床の赤焼は著しく、狭い範囲ながらもバリバリとなっている。

F₁₆（位置）G-13-11グリッド（形状）大形の炉跡とこれに向って傾斜する足場からなり、全体は長梢円形を示すものと思われる。（規模） $168 \times 58 \times 38\text{cm}$ （主軸方向）S-10°-E（焼土の状態）範囲約 $42 \times 40\text{cm}$ 、厚さ約6cmを測る。下部に焼土ブロックを含むものの、上部では焼土量がやや少ない。（炉跡） $72 \times 58\text{cm}$ と大形であるが、深さは約8cmと浅い皿状の窪みとなる。炉床はバリバリで良く焼けている。

F₁₇（位置）G-13-11グリッド（形状）細長い梢円形を呈する炉跡のみの検出である。F₂₁及び近世溝に上部を切られているため、設営時の規模や形態は不明である。（焼土の状態）現状でも $82 \times 46 \times 12\text{cm}$ とかなり広い範囲を有するが、全体に焼土の量は少ないものとなっている。（炉跡） $84 \times 46\text{cm}$ で、遺構確認面からの深さは約30cmとなる。炉床はあまり火熱を受けておらず、軟質で赤色味が薄い。

F₁₈（位置）G-13-11グリッド（形状）細長い炉跡のみが検出されたが、F₁₉や近世溝により大きく切られている。（焼土の状態）F₁₉を含めて $68 \times 38\text{cm}$ 程を測り、厚さは約8cmが認められる。F₁₈の炉床にあたるためか赤褐色の完全焼土層となっており、しまりが強くザラザラする。（炉跡） $60 \times 28\text{cm}$ の長梢円形で、現状での深さは約10cmである。炉床の焼けかたは顕著となり、赤くバリバリの状態となっている。

F₁₉（位置）G-13-11グリッド（形状）炉跡とF₁₈の焼土上に延びる平坦な足場からなるが、F₂₀及び近世溝に両端部を切断される。全体はほぼ梢円状を呈するものと思われる。（規模）現状では $80 \times 60 \times 15\text{cm}$ を測る。（主軸方向）N-45°-E（焼土の状態）範囲はF₁₈参照。厚さは約18cmが認められる。主に加熱されたローム粒で構成されるため、色調はかなり黄色味を帯びたものとなる。また、しまりが弱くF₁₈との境界は明瞭である。（炉跡） $52 \times 40\text{cm}$ の梢円形で、遺構確認面からの深さは約20cmを測る。炉床はやや軟質で赤焼度も低い。

F₂₀（位置）G-13-11グリッド（形状）大形の炉跡のみが検出された。概ね梢円形を呈し、北側の一部をF₂₁に切られる。（焼土の状態）およそ径 56cm の範囲を有し、厚さは約16cmである。土層断面を図示できなかったが、焼土の量は全体に少なく、焼土ブロックも見られなかった。（炉跡） $70 \times 68\text{cm}$ 、遺構確認面からの深さは約20cmを測る。炉床はうっすらと赤く焼け、その範囲は広い。

F₂₁（位置）G-13-11グリッド（形状）かなり大形の炉跡である。F₁₇・F₂₀・F₂₂を切断しており、土層観察ではF₁₇とF₂₂の中間方向に足場が延びることが窺える。（焼土の状態）径 55cm 程の範囲に広がり、厚さは約12cmを測る。微量の炭化物を含むが焼土自体は少なく、ロームの影響が強いものとなる。（炉跡） $80 \times 66\text{cm}$ の梢円形で深さは約15cmである。炉床はあまり焼けておらず、軟質で赤色味は薄い。

F₂₂（位置）G-13-11グリッド（形状）これも梢円形の炉跡のみの検出である。F₂₃の焼土層を切り込んで設営されるが、逆にF₂₁にはこれを切られている。（焼土の状態）F₂₃を含めて128

×54の範囲となり、厚さは約12cmを測る。焼土と加熱されたロームで構成され、これに若干の炭化物を含む。他に比して焼土の量が少ないため黄色味が強い。（炉跡）78×56cmと大形で、造構確認面からの深さは約30cmを測る。炉床は広範囲にわたって焼けているが、軟質で赤色味は薄い。

F₂₂（位置）G-13-11グリッド（形状）F₂₂の埋没後に設営された楕円形の小さな炉跡である。南側へ向って足場が延びるようであるが、F₂₂に大きく切られるために確認できなかった。（焼土の状態）その範囲はF₂₂と一連のものとなり、厚さは約16cmを示す。焼土粒及び同ブロックで構成され、赤色味が強くザラザラとする。（炉跡）径58×38cm、造構確認面からの深さ約32cmを測る。炉床は強く火熱を受けたものと思われ、バリバリで硬くしまっている。

F₂₄（位置）G-13-6グリッド（形状）全体は長楕円形を呈し、炉跡が足場を切断するような形で営まれる。足場の南端はF₂₃に切られている。（規模）176×72×24cm（主軸方向）N-23°-W（焼土の状態）およそ径56cmの範囲を有し、厚さは約12cmを測る。ロームの混入が多く赤色味は薄い。しまりが強く微量の炭化物を含む。（炉跡）70×68cmの楕円形を呈し、深さは約10cmとなる。炉床は黄色味が強く、ザラつくものの軟質である。

F₂₅（位置）G-13-6グリッド（形状）炉跡の一部を検出したにすぎない。北側は調査区外へかかるため、全体の規模や形態は不明である。（焼土の状態）現状で48×14cm、深さ7cm程度が認められるにすぎない。主に加熱されたロームで構成され、焼土粒は少量で赤色味が薄い。（炉跡）これも現状で40×14cmの半円形、焼土確認面からの深さ約10cmを測るのみである。炉床の焼けかたも乏しい。

F₂₆（位置）G-13-6グリッド（形状）半円形の炉跡であるが、土層観察からは足場が南へ延びていることが窺える。但し、掘り込みが浅いことなどから全体の規模や形態、及び主軸方向は不明である。（規模）長径は土層断面より150cm程が測れる。深さは約16cmで、南側はF₂₅に切られている。（焼土の状態）範囲50×42cm、厚さ12cm程が認められたにすぎない。主に加熱されたローム粒からなり、焼土化したものは少量である。（炉跡）現状で60×50cmの半円形、深さ約10cmとなる。炉床は狭い範囲ながらも良く焼けている。

F₂₇（位置）G-13-6グリッド（形状）F₂₆に切断されており、わずかに半円状の炉跡が検出されたのみである。（焼土の状態）60×40cm程の範囲が確認でき、深さは約12cmを測る。焼土粒及び加熱されたローム粒を主体とし、しまりが強く淡い赤褐色を呈する。（炉跡）現状で58×56cm、造構確認面からの深さは約26cmである。炉床は良く焼けており、赤くバリバリとなっている。

F₂₈（位置）G-13-7グリッド（形状）大形で楕円形の炉跡。西側には足場を有すると思われるが、全体の規模や形態はF₂₆に切られるため不明。（焼土の状態）74×66cm程の範囲を有し、厚さは約12cmを測る。主に焼土ブロックで構成され、しまりが弱くボロボロである。この上部にも、かなり焼土を多く含む層が見られる。（炉跡）90×80cmの楕円形を呈し、造構確認面からの深さは約20cmである。炉床は良く焼けてバリバリとなり、その一部はほぼ垂直に立ち上がる炉壁に達している。

F₂₉（位置）G-13-17グリッド（形状）楕円形の大形炉跡であるが、周囲の炉跡との新旧関係や全体の形態等は不明である。（焼土の状態）62×54cm程の範囲を有し、厚さは約10cmが認められ

る。焼土粒及び同ブロックからなり、しまりが強くガリガリである。（炉跡）94×56cmの梢円形を呈し、遺構確認面からの深さ約18cmを測る。炉床は著しく赤焼し、バリバリとなっている。

F₃₀（位置）G-13-11グリッド（形状）炉跡とそこへ向けて傾斜する足場からなり、長梢円形を呈している。（規模）120×112×28cm（主軸方向）S-5°-E（焼土の状態）F₃₀に一部を削られるが、およそ径60cm程の範囲に広がり、厚さは約10cmを測る。焼土粒及び加熱されたローム粒で構成され、しまりが強くややボソつく。（炉跡）74×48×14cmの大きな梢円形で、炉床は良く焼けるがその範囲は狭い。

F₃₁（位置）G-13-11グリッド（形状）北側をF₃₀に切られる炉跡のみの検出である。（焼土の状態）60×56cmの範囲に認められ、厚さは10cmを測る。主に粒の粗い焼土と加熱されたロームからなり、しまりが強くボソボソする。（炉跡）現状では径62cm、遺構確認面からの深さは約20cmとなる。炉床は良く焼けているがやや軟質である。

F₃₂（位置）G-13-12グリッド（形状）ほぼ円形を呈する炉跡と思われる。F₃₀埋没後の設営であるが、F₃₂との新旧関係は不明。（焼土の状態）F₃₀を含めた長径は112cmとなり、短径と深さはそれぞれ42cm、14cmを測る。主に細かい焼土粒で構成され、中央部には焼土ブロックが集中する。しまりやや弱くボソつく。（炉跡）現状で62×60cm、遺構確認面からの深さは約32cmである。炉床は良く焼けて赤色味を帯びるが、その範囲はごく狭い。

F₃₃（位置）G-13-12グリッド（形状）大形の炉跡と足場からなる梢円形プランの炉穴と思われるが、北西部をF₃₂に切られるためにやや不明確となっている。（規模）現状で158×82×15cm（主軸方向）S-79°-E（焼土の状態）F₃₂参照。短径は約56cm、厚さ約16cmを測る。全体はきれいな焼土粒で構成され、淡い赤褐色を呈する。若干の炭化物を含みサラサラしている。（炉跡）80×60cmの梢円形で深さ約16cmとなる。炉床は良く焼けており、その範囲は広い。

F₃₄（位置）G-13-12グリッド（形状）F₃₂に切断される広い足場と、これに比してかなり小形の炉跡からなる。全体は長梢円形を呈するが、炉跡は北壁に寄っている。（規模）現状で156×90×14cm（主軸方向）N-67°-E（焼土の状態）40-38cm程の範囲を有し、厚さは約4cmとわずかである。焼土粒と加熱されたローム粒からなり、しまり弱くバサバサする。（炉跡）46×38cmの円形、深さは約4cmと浅い。炉床はあまり焼けておらず、やや軟質で黄色味を強く帯びる。

F₃₅（位置）G-13-11グリッド（形状）やや長めの梢円形プランで、炉跡と舟底状の足場を備えている。（規模）124×56×22cm（主軸方向）S-78°-W（焼土の状態）F₃₅を含めて98×46cmの広がりとなり、厚さは約12cmが認められる。主に焼土粒と加熱されたローム粒で構成され、これに若干の炭化物を含む。（炉跡）66×62cmの円形を呈し、深さ約14cmを測る。炉床は良く焼けており、かなりバリバリとなっている。

F₃₆（位置）G-13-12グリッド（形状）北西へ延びる足場を有するものと思われるが、F₃₅に大きく切断されるために不明確となる。（焼土の状態）範囲はF₃₅参照。厚さ約14cm。焼土粒と焼土ブロックからなり、若干の炭化物を含んでいる。赤褐色でしまりに優れている。（炉跡）50×46cmの円形を示し、遺構確認面からの深さ約38cm、足場からは約16cmをそれぞれ測る。炉床は良く焼けるがその範囲は狭く、周囲は赤色味の薄い軟質なものとなっている。

F_{3r} (位置) G-13-12グリッド (形状) 全体は楕円形を呈するものと思われ、炉跡と舟底状の足場からなる。(規模) F_{3s} より掘り込みが浅いため、現状では 104×82×30cm を測るに止どまっている。(主軸方向) S-62°-E (焼土の状態) 48×44cm 程の範囲を有し、厚さは約15cmである。上層は主に加熱されたロームで構成されており、焼土量は少なくしまりも弱い。下層では焼土の増加に伴って赤色味を増し、加熱されたロームブロックや炭化物を良く含むようになる。(炉跡) 53×50cm の円形で深さ約14cm を測る。炉床は良く焼けており、広い範囲がパリパリとなっている。

第2号炉穴 (S F-2) (第76図)

(位置) H-15-23グリッド (形状) 現状では大形の椭円形となるが、土層観察からは炉穴が土壤に切られる状態が窺える。但し、平面においてはその切り合いが不明瞭であり、炉穴自体の規模や主軸方向等も不明である。(規模) 土壌を含めて 320×188×26cm を測る。(焼土の状態) 84×70cm 程の範囲を有し、厚さ約15cm が認められる。焼土粒と加熱されたローム粒を主体に構成され、炉床上では焼土ブロックがかなり密に堆積する。暗い赤褐色でしまり強く若干の炭化物を含む。(炉跡) 80×65cm の椭円形を呈し、深さは約16cm である。炉床は良く焼けており、赤くパリパリとなる範囲が広く認められる。(遺物) いずれも覆土の中位からではあるが、第Ⅰ・Ⅴ群土器の小片が少量出土している。

第3号炉穴 (S F-3) (第76図)

H-15-23グリッドに位置し、S F-2 の東側に接して営まれる。2基の炉跡が重複するものと思われるが、足場についてはともに不明確である。両者の新旧関係は F₁(古)→F₂(新)となる。

覆土は以下の3層に分けられ、第1・2層が F₂、第3層が F₁ に伴う。

第1層 灰褐色土 しまり弱いが粘性は強い。色調は灰色味が強い。

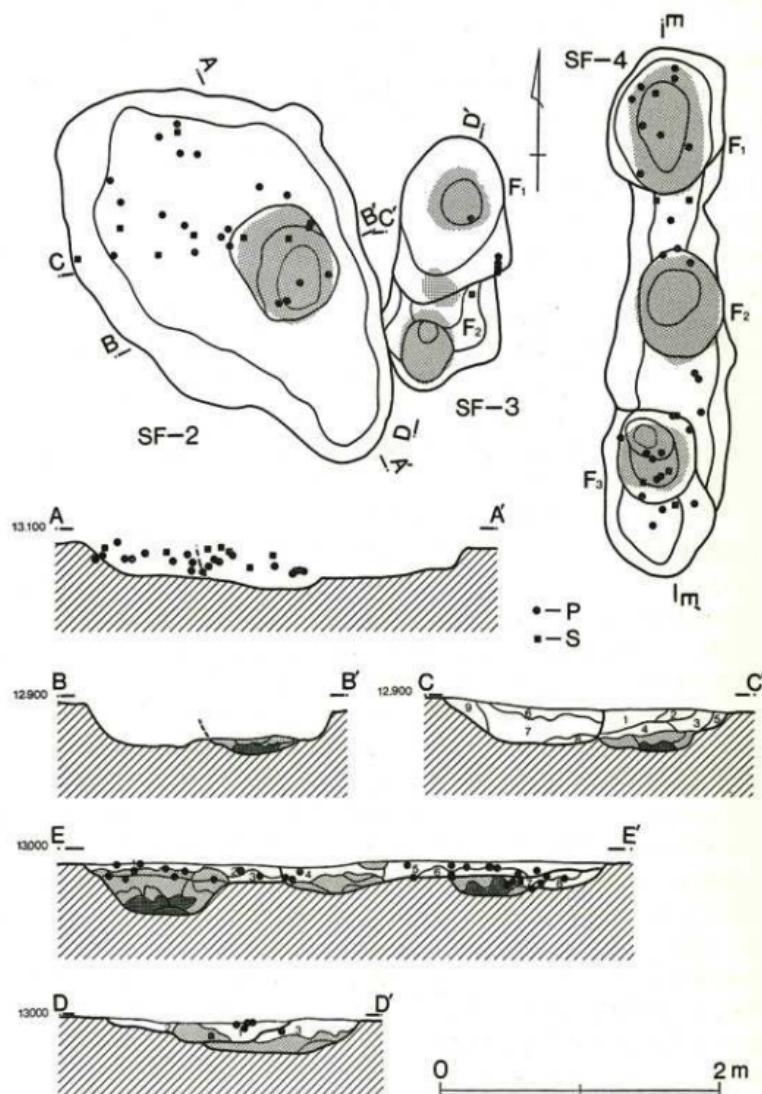
第2層 赤褐色土 焼土が溶混するため色調はもっとも赤色味が強い。焼土粒・炭化物を含有する。

第3層 灰褐色土 焼土粒を含み、しまりの弱い土層。

遺物は覆土上位より第Ⅰ・Ⅴ群土器がわずかに出土している。

F₁ (位置) H-15-23グリッド (形状) F₂ に上部を切られる大形の炉跡であるが、足場の存在を示す形跡は認められなかった。(焼土の状態) およそ 100×65cm 程の範囲を有し、厚さは約12cm を測る。焼土粒と加熱されたローム粒で構成され、しまりが弱くバサバサである。(炉跡) 径 100×74cm、造構確認面からの深さは約22cm となる。炉床はかなり赤く焼けており、硬くパリパリとなっている。

F₂ (位置) H-15-23グリッド (形状) F₁ 埋没後に設営された炉跡で、浅く窪んだ皿状を呈する。立ち上がりは緩やかであるが、中央部は稜を境として一段深くなる。さらに南端にもわずかに掘り込まれる部分が見られる。両者の底面はいずれも焼けており、ともに炉床あるいは別個の炉跡と思われる。(焼土の状態) 中央部に径40cm、厚さ12cm 程が認められる。焼土粒が多く含まれるもの、全体にロームの影響が強く赤色味は薄い。尚、南端の炉床部には焼土層が存在せず、F₂ に切られる別の炉跡かとも思われる。(炉跡) 土層断面から 130×85×12cm の規模が推定される。



第76図 第2・3・4号炉穴(SF-2・3・4)

先述のように炉床は2箇所に検出されたが、両側のものが良く焼けており範囲も広い。

第4号炉穴（S F-4）（第76図）

H-15-24グリッドライン上を中心に位置する。S F-4の東側に営まれ、3基が南北に重複するものである。その新旧関係はF₁・F₃(古)→F₂(新)を示し、概ね同一の主軸方向を取る。

覆土は以下の8層であり、第1～3層はF₁、第4～6層はF₂、第7・8層はF₃、各々に伴う。

第1層 暗茶褐色土 きめ細かくしまった土層であり、焼土粒を多く含む。

第2層 暗茶褐色土 黒味が強くなりローム粒を多量に含む。焼土を若干含む。

第3層 暗茶褐色土 ロームブロック・黒褐色土ブロックが溶混した土層。焼土粒を含む。

第4層 茶褐色土 きめはやや粗いが良くしまった土層。焼土粒を大変多く含む。

第5層 暗茶褐色土 黒褐色土ブロックがが薄く溶混した土層。焼土粒・炭化物を多く含む。

第6層 暗茶褐色土 焼土粒・炭化物・半焼けのローム粒を少量含む。

第7層 褐色土 ロームブロック・焼土粒・炭化物を若干含む。良くしまって硬い土層。

第8層 茶褐色土 焼土粒・炭化物を含まない土層。ロームが薄く溶混した単一的土層。

遺物はF₁の炉跡上部、F₂・F₃の足場部分に集中し、焼土中からの出土はまれであった。出土土器は第I・V群の両者が認められたが、いずれも小片で特に第V群のものは図示できなかった。

F₁（位置）H-15-23グリッド（形状）大形で深く掘り込まれた炉跡と南へ延びる足場からなる。足場はほぼ平坦であるが、F₂に切られるために全体の規模は不明。（規模）現状で142×64×12cm（主軸方向）N-2°-E（焼土の状態）およそ90×60cmの範囲に広がり、厚さは約26cmを測る。上部は主に焼土粒と加熱されたローム粒からなり、これに若干の炭化物を含む。きめ細かくしまりは良い。下部では焼土の量も増し、焼土ブロックが厚く堆積している。かなり硬くしまっており、炭化物を良く含んでいる。（炉跡）98×70cmの楕円形を呈し、足場より約24cm深くなる。炉跡及び炉壁は強く火熱を受けており、広い範囲が赤くバリバリとなっている。

F₂（位置）H-15-24グリッド（形状）長楕円形を呈し、浅い炉跡と細長く平坦な足場からなる。F₁・F₃を切断して設営され、足場はF₃の焼土上にかかっている。（規模）235×90×11cm（主軸方向）N-1°-W（焼土の状態）およそ70×65cmの範囲を有し、厚さは約14cmが認められる。焼土粒及び多量の加熱されたローム粒で構成され、うっすらと黄色味を帯びている。きめ細かいがしまりは弱く、微量の炭化物を含んでいる。（炉跡）78×60cmの楕円形で、深さ約6cmと浅い皿状の窪みとなる。炉床は火熱を受けた範囲こそ広いが、赤色味は薄く軟質である。

F₃（位置）H-15-23グリッド（形状）上部をF₂に切られる楕円形の炉穴である。炉跡に狭い足場を備えている。（規模）128×80×18cm（主軸方向）N-9°-W（焼土の状態）現状で径60×55cm、厚さ約14cm程が認められる。上部はF₂の足場となるためかなり硬くしまっている。主に焼土粒と焼土ブロックからなり、きれいな赤褐色を呈する。（炉跡）68×58cmの楕円形で深さは約12cmを測る。炉床には焼土ブロックが密着し、赤くバリバリとなっている。

第5号炉穴 (SF-5) (第77
図)

(位置) H-15-24グリッド (形
状) 大形の広い足場と円形の炉跡
からなる。全体は梢円形を呈する
ものと思われるが、北側を土壤状
の掘り込みに切斷されるために不
明確である。(規模) 182×116×
14cm (主軸方向) N-38°-W
(覆土) 以下の2層が認められる。

第1層 暗茶褐色土 ローム粒を
含み、きめ細かくしまり
強い。焼土粒をわずかに
含む。

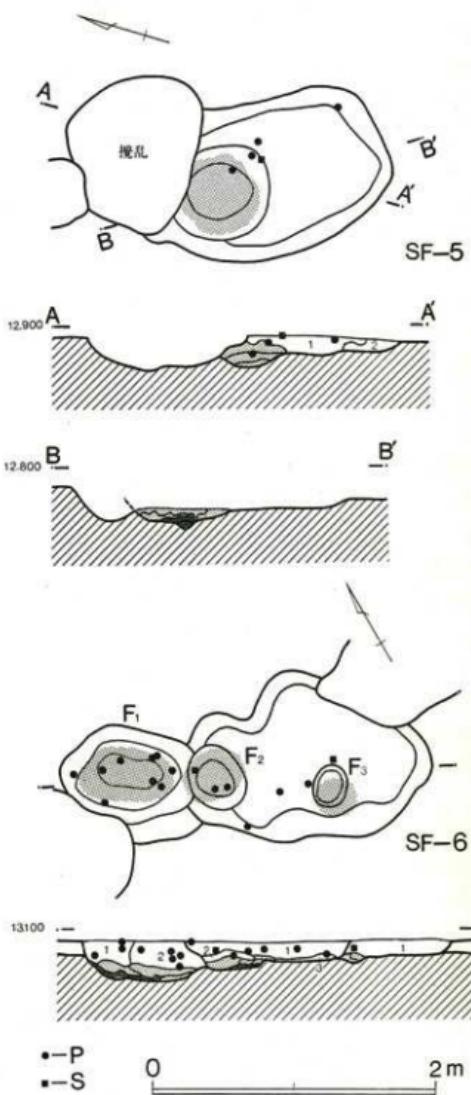
第2層 暗茶褐色土 褐色土の大
形ブロックを少數含む。
焼土少々有り。

(焼土の状態) 65×50cm程の範囲
を有し、厚さは約10cmを測る。上
部は焼土粒・焼土ブロック及び加
熱されたロームブロックで構成さ
れ、きれいな赤褐色で硬くしまっ
ている。下層は主に焼土ブロック
からなり、きめ粗くボソボソす
る。炭化物は上層に多く含まれ、
最下部ではほとんど見られない。

(炉跡) 76×66×11cm。炉床は良
く焼けており、広い範囲がバリバ
リとなっている。(遺物) わずか
に第I・V群土器が2点づつ出土
している。

第6号炉穴 (SF-6) (第77
図)

I-15-2グリッドに位置す
る。S I-1の内部に設営されて



第77図 第5・6号炉穴 (SF-5~6)

おり、3基の炉跡が重複するものである。その新旧関係はF₁・F₂(古)→F₃(新)を示し、主軸方向は概ね同一となるようである。

覆土は以下の3層に分けたが、3基の同一層は微妙に異なる。

第1層 褐色土 しまりは良いがきめや粗くボソつく。焼土粒の他若干の炭化物を含む。

第2層 暗褐色土 ロームブロックを密に含み黄色味を帯びる。若干の焼土粒・炭化物を含む。

第3層 暗黄色土 ほとんどローム。壁の溶軟化層。

遺物は少量かつ少片の第V群土器が検出されている。

F₁: (形状) 大形の梢円形を呈する炉跡。F₂に切られており、足場については不明である。(焼土の状態) 70×60cm程に広がり、厚さは約10cmが認められる。主に焼土粒と焼土ブロックで構成され、しまりが弱くややボソつく。(炉跡) 径74×50cm、遺構確認面からの深さ約28cmを測る。炉床は良く焼けており、赤く硬化している。

F₂: (形状) 炉跡と平坦な足場からなり、梢円形プランを示すものと思われる。(規模) 土層断面より115×90×14cmが推定される。(焼土の状態) 径約40cm、厚さ約8cmを測る。焼土粒と加熱されたローム粒からなり、炉床上には焼土ブロックが密集する。しまり強く黄色味をやや帯びる。(炉跡) 48×40cmの梢円形で深さ8cm。炉床は著しく赤焼しており、硬くバリバリの範囲が広い。

F₃: (形状) 小形の炉跡と広い足場からなると思われるが、全体の規模・形態等は不明である。(焼土の状態) 径20cm、厚さ約6cmの小規模な広がりにすぎない。焼土粒と多量の加熱されたローム粒で構成され、黄色味を強く帯びたものとなっている。(炉跡) 30×24cmの梢円形を呈し、深さは約4cmを測る。炉床はうっらると赤くなるが、軟質でその範囲は広い。

(3) 土 壤

第1号土壤 (SK-1) (第78図)

(位置) G-13-7グリッド (形状) 全体は梢円形を呈する浅い皿状の掘り込みとなる。遺構確認面よりだらだらと凹凸を描きながら傾斜し、壁の立ち上がりと底面の区別はつけにくい状態となっている。また、掘り込みは一部ローム層に達してはいるが、いずれの部分も軟質でしまりに欠けている。(規模) 156×116×20cm (主軸方向) N-54°-W (覆土) 以下の7層に分けられる。

第1層 暗茶褐色土 粘性の強い良くしまった土層。少量の焼土粒を含む。

第2層 褐色土 粒の緻密な土層で、黒色土粒がしみ状に広がっている。ローム粒を含む。

第3層 茶褐色土 ロームブロックが斑文となって広がっている。焼土粒・炭化物を含有。

第4層 褐色土 若干灰色がかった土層。粒が粗く軟層である。焼土粒をわずかに含む。

第5層 暗茶褐色土 ロームブロックがしみ状になって混入している。

第5層 暗茶褐色土 やや粒が粗くなり、わずかであるが、茶褐色土ブロックが見られる。

第7層 黄褐色土 良くしまった硬い土層で粘性も強い。ロームブロックが斑文状に広がる。

(遺物) 総測点数で91片が出土している。少量の破碟以外はすべて第V群土器であり、かなり細かく破碎した状態で検出された。いずれも脆弱な小片であるが、このうちより1個体が接合復元され

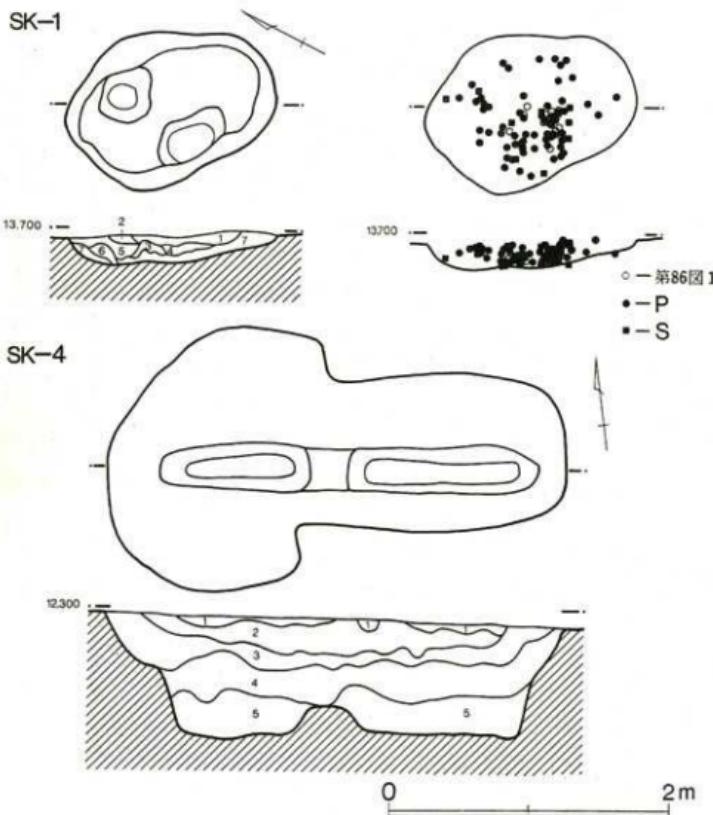
第6表 明花向遺跡B区縄文時代炉穴一覧表

番号	グリッド	形態	規模(cm)	炉跡(cm)	主軸方向	出土遺物	備考
1F ₁	G-12-14	不整梢円形	160 × 104 × 12	74 × 66 × 18			
F ₂	G-12-10			50 × (32) × 28			
F ₃	G-12-15	長梢円形	(146) × 90 × 18	60 × 54 × 14	S-18°-E		F ₃ より新
F ₄	G-12-15	梢円形	170 × 136 × 24	58 × 60 × 16	?		
F ₅	G-12-20	梢円形	164 × 98 × 16	64 × 44 × 10	S-37°-W		F ₅ より新
F ₆	G-12-20			92 × 88 × 30			F ₆ より新
F ₇	G-12-20			74 × 60 × 28			
F ₈	G-12-15	長梢円形	122 × 60 × 24	44 × 36 × 14	N-28°-E		
F ₉	G-12-15	長方形	142 × 62 × 12	94 × 50 × 14	N-54°-E		
F ₁₀	G-12-15	長梢円形	156 × 74 × 24	70 × 68 × 13	N-77°-E		
F ₁₁	G-12-11			70 × 48 × 8			F ₁₁ より新
F ₁₂	G-12-15	梢円形	(82) × 40 × 17	56 × 49 × 10	S-77°-W		F ₁₂ より新
F ₁₃	G-12-10			58 × (48) × 22			
F ₁₄	G-13-11	長梢円形	124 × 62 × 22	65 × 52 × 20	S-11°-W		
F ₁₅	G-13-6			58 × 48 × 34			
F ₁₆	G-13-11	長梢円形	168 × 58 × 36	72 × 58 × 8	S-10°-E		F ₁₆ より新
F ₁₇	G-13-11			84 × 46 × 30			F ₁₇ より新
F ₁₈	G-13-11			60 × 28 × 10			
F ₁₉	G-13-11	梢円形	80 × 60 × 15	52 × 40 × 20	N-45°-E		F ₁₉ より新
F ₂₀	G-13-11			70 × 68 × 20			F ₂₀ より新
F ₂₁	G-13-11			80 × 66 × 15			F ₂₁ より新
F ₂₂	G-13-11			78 × 56 × 30			F ₂₂ より新
F ₂₃	G-13-11			58 × 38 × 32			F ₂₃ より新
F ₂₄	G-13-6	長梢円形	176 × 72 × 24	70 × 68 × 10	N-23°-W		
F ₂₅	G-13-6			40 × (14) × 10			
F ₂₆	G-13-6		(150) × ? × 16	66 × (50) × 10			F _{26, 28} より新
F ₂₇	G-13-6			58 × 56 × 26			
F ₂₈	G-13-7			90 × 80 × 20			
F ₂₉	G-13-11			94 × 56 × 18			
F ₃₀	G-13-11	長梢円形	120 × 112 × 28	74 × 48 × 40	S-5°-E		F _{30, 31} より新
F ₃₁	G-13-11			62 × 62 × 22			
F ₃₂	G-13-12			(62) × 60 × 32			F _{32, 33} より新
F ₃₃	G-13-12	長梢円形	158 × 82 × 15	80 × 66 × 16	S-79°-E		
F ₃₄	G-13-12	"	155 × 190 × 14	46 × 38 × 4	N-67°-E		
F ₃₅	G-13-11	長梢円形	124 × 56 × 22	66 × 62 × 14	S-78°-W		F ₃₅ より新
F ₃₆	G-13-12			50 × 46 × 38			
F ₃₇	G-13-12		(104) × 82 × 30	53 × 50 × 16	S-62°-E		
2F ₁	H-15-23	梢円形	320 × 188 × 26	82 × 66 × 12			
3F ₁	H-15-23			100 × 74 × 22			
F ₂	H-15-23			130 × 85 × 12			F ₂ より新
4F ₁	H-15-23	長梢円形	142 × 64 × 12	98 × 70 × 24	N-2°-E		
F ₂	H-15-24	"	235 × 90 × 11	78 × 60 × 6	N-1°-W		
F ₃	H-15-23	梢円形	128 × 80 × 18	68 × 58 × 12	N-9°-W		
5F ₁	H-15-24	梢円形	182 × 116 × 14	76 × 66 × 11	N-38°-W		
6F ₁	I-15-2			74 × 50 × 18			
F ₂	I-15-2	梢円形？	115 × 90 × 14	48 × 40 × 18			
F ₃	I-15-2			30 × 24 × 4			

ている。

第2号土壤 (SK-2) (第79図)

(位置) H-13-22グリッド (形状) 西側が調査区外へかかるために不明確であるが、全体は端部のすばんだ長椭円形を呈するものと思われる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、強い屈曲をして底面へと移行している。その底面は中央部へ向けて緩やかに傾斜しており、断面はわずかに舟底状を呈する。底面のしまりはさほど強くなく、むしろ軟質な印象である。(規模) 現状で356×230×42cmを測る。(主軸方向) N-60°W(覆土) 以下の10層に分けられるが、その堆積はやや不自然な



第78図 第1・4号土壤 (SK-1・4)

ものとなっている。

第1層 明茶褐色土 ローム粒・焼土粒を全体に散在する。きめ細かいが、しまり・粘性ともにごく弱い。

第2層 暗茶褐色土 ローム粒を若干、焼土粒を微量に含有し、炭化物粒も少量見られる。

第3層 茶褐色土 やや大形の炭化物粒が少量点在する。ローム粒・焼土粒も若干見られる。

第4層 茶褐色土 第3層に準ずるがロームがブロック化して大形になり、焼土もブロックとして見られる。

第5層 暗黄茶褐色土 茶褐色土層にロームがしみ状に混入している。焼土粒も若干認められる。

第6層 暗黄黑褐色土 第4層と含有物は同様であるが、構成は黒色土である。

第7層 黄茶褐色土 非常にきめ細かい粒土により構成され、ロームが混入している所はバサバサする。

第8層 明黄茶褐色土 若干の焼土粒のほか、ローム粒を微量に含有。きめ細かくしまり・粘性は乏しい。

第9層 黄褐色土 ほとんどロームにより構成。粘性強い。

第10層 暗黄褐色土 ロームに黒色土が少量混入。粘性極めて強い。

(遺物) 測点数で364片の土器、200点の礫と破碟が出土しているが、いずれも造構全体に散在している。但し、その平面分布は土器が長軸線を境として南側、礫が同じく北側に集中する傾向が見られる。また、垂直分布では土器が造構中位より上半、礫が同じく下半に集中する傾向が窺える。土器は大半が第V群であり、これに少量の第Ⅱ・Ⅳ群のものが混在する。このうちで第V群の土器は1個体が接合している。礫及び破碟は焼けたものが多い。これにチャートの剥片やチップもかなり含まれている。

第3号土壤 (SK-3) (第80図)

(位置) H-14-2グリッド(形状) 西側を近世の溝に切断されるが、プランは不整の円形を呈するものと思われる。造構確認面からは中央部へ向って緩やかに傾斜を有し、全体が大きな皿状の窪みとなっている。このため、底面と壁の区分は不明瞭である。底面は軟質でかなり激しく凹凸をしており、さらに中央部には多くのピット状の掘り込みが見られる。(覆土) 以下の9層に分けられる。

第1層 暗茶褐色土 しまり・粘性強く緻密な層を構成。土器片・礫等を多量に含む。

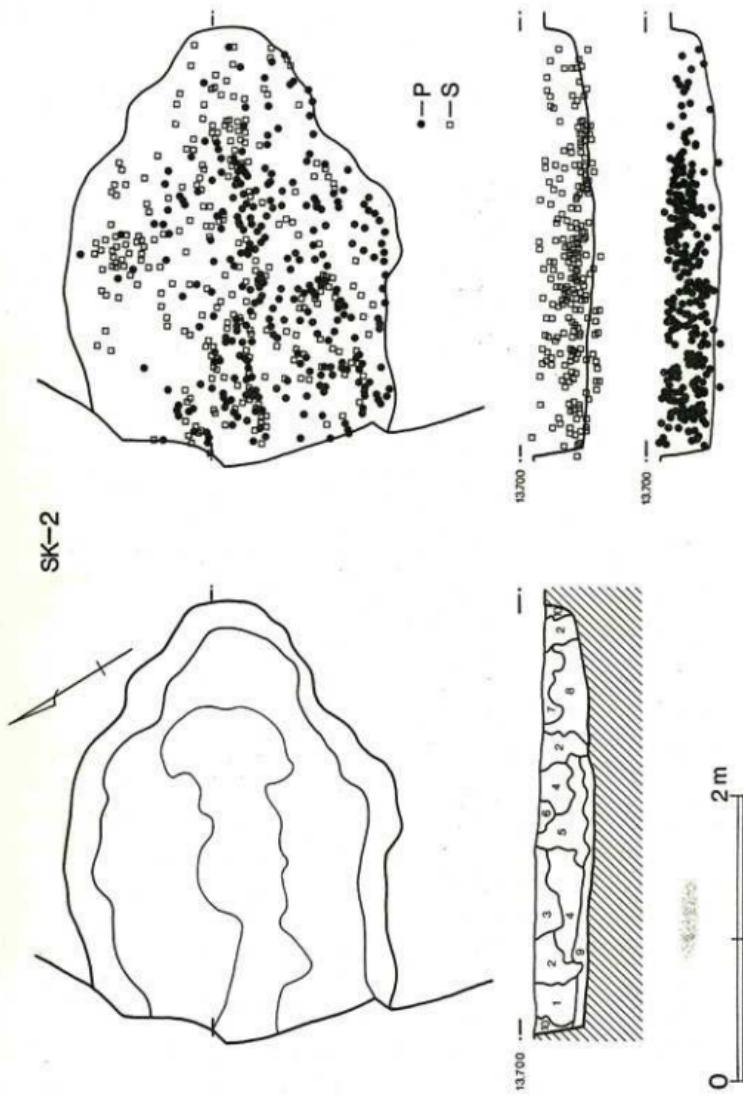
第2層 暗黄灰褐色土 土器片・礫等を多量に含む。ロームブロックが混入するため黄色味が強くなっている。

第3層 暗茶褐色土 しまり・粘性著しく強い。遺物の出土は少ない。ロームブロック混入。

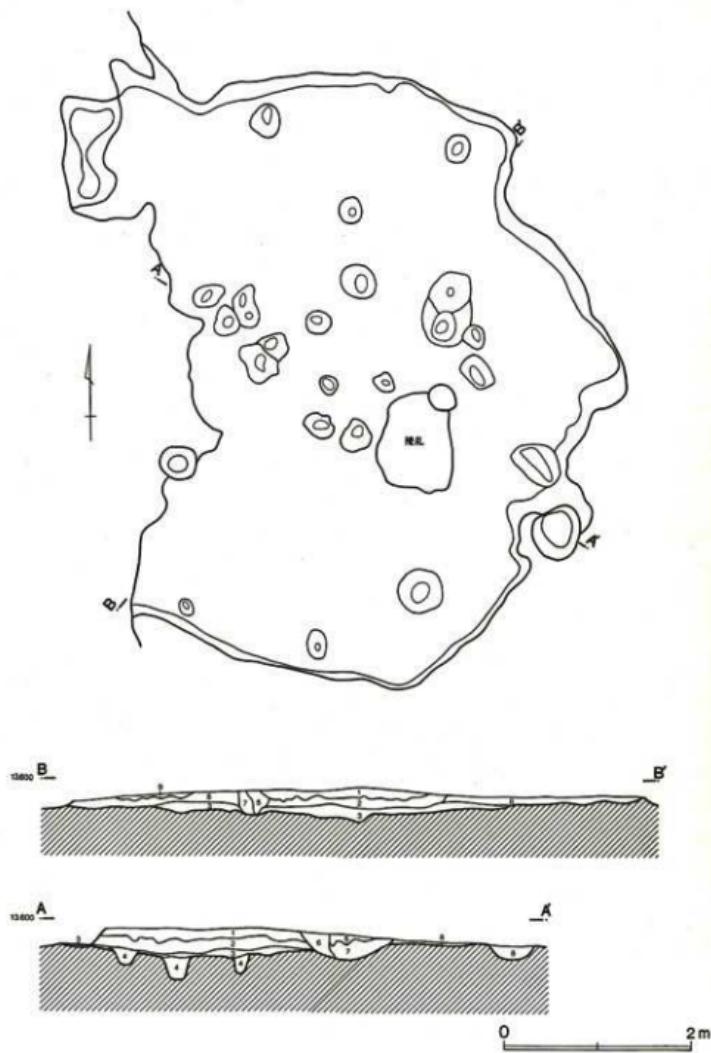
第4層 暗茶色土 しまり・粘性やや強い。少量の土器片等出土する。ピットの覆土。

第5層 淡茶色土 しまり・粘性強く緻密な層。ロームブロック混入。

第6層 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強く、ロームブロックの混入少ない。



第79圖 第2号土壤（SK-2）



第80図 第3号土壤 (SK-3)

明花向B

- 第7層 暗灰色土 しまり・粘性やや弱く、バサバサする。
- 第8層 淡黄褐色土 しまり・粘性弱く、バサバサする。一部褐色のブロックがしみ状に分布する。
- 第9層 暗灰色土 しまり・粘性やや弱く、土粒は細かい。
- (遺物) 図示しなかったが、中央部周辺より多量の諜とわずかの第Ⅶ群土器が出土している。

第4号土壤 (SK-4) (第78図)

(位置) H-16-18グリッド (形状) 所謂Tピットである。全体は長い楕円形を呈するが、西半は円形状に大きく広がっている。底面は中央部が20cm程高まり、これが框状に東西を二分している。壁は概ね垂直であるが、中位より上はかなり緩やかな立ち上がりとなる。このため、平面形も中位以下は極度に細長いものとなっている。

(覆土) 以下の5層に分けられる。

- 第1層 黒褐色土 茶褐色・黒褐色土が斑文状に溶け合う土層。溶混はそれほど強くはない。
- 第2層 黒褐色土 第1層に近似するが、しまりはかなり強い。若干のロームブロックが含まれる。
- 第3層 黄褐色土 ロームの溶混が強くなり粘性も強い。やや斑文状となる。
- 第4層 黄褐色土 ほとんどロームで構成される。ローム塊が若干含まれる。
- 第5層 黒褐色土 スコリア・炭化物を多く含む。しまり・粘性強い。床面とは明確にわかれれる。
- (遺物) 見られなかった。

(飼持 和夫)

第7表 明花向遺跡B区縄文時代土壤一覧表

番号	グリッド	形態	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	主軸方向	出土遺部	備考
1	G-13-7	椭円形	156	116	20	N-54°-W	第86図1 第84図15~25, 第85図1~20,第86図2 第85図21~22	
2	H-13-22	長椭円形	356	230	42	N-60°-W		
3	H-14-2	円形	732	598	38			
4	H-16-18	楕円形	334	132	88	N-83°-W		

(4) 遺構出土の土器

第1号住居跡（第81図1～38）

出土土器は第Ⅰ群土器と第Ⅳ群土器である。第Ⅴ群土器は出土量も少なく、流れ込みと判断されるため割愛した。

1～15は口縁部であり、口唇形態に差異が認められる。1～3は口唇部が殆ど肥厚せず、直立気味の丸頭状を呈する。1は撚糸Rが口唇下から器面全面に施文され、2, 3は無文土器の様である。1は焼成が悪く器面の荒れが著しい。1～3の胎土は緻密であり、白色の粒子が目立っている。4, 8は口唇部が肥厚するもので、直立気味の丸頭状を呈する。肥厚部に撚糸文の施文は認められない。4, 8とも長石、石英類が多く含み、4に白色粒子が多く含まれる。5は口唇部内端が直立し、外端が若干肥厚してナデの施される土器である。焼成は悪く、器面の荒れが著しい。口唇肥厚下に撚糸Lが施文される。6は若干肥厚する口唇部が外傾し、口縁部がやや凹線状に窪むものであり、無文土器である。砂粒と白色粒子を多く含む。9, 11は若干肥厚する口唇部の上面と外端にナデが施され、口縁部が僅かに窪むものである。9は撚糸Rが施文され、器面の荒れが著しく、小礫、砂粒、白色粒子が目立つ。11は無文土器であり、長石、石英類が少量含まれる。7, 10, 12～15は口唇部が肥厚し、直立気味にやや外傾するものである。口唇外端は明確に面取りが施され、内端が直立するものと丸味を帯びるものとが存在する。口縁部は緩い凹線状の窪みを呈する。12の内端がやや丸味を帯びる以外、全て内端は直立している。7は口唇外端の面取りが強いものであり、撚糸しが施文される。10, 12～15は破片内に撚糸の施文はなく、13～15は無文土器と思われる。7と13は胎土が類似し、石英、長石類よりも白色粒子が目立つ。他の胎土は緻密であり、石英、長石類はあまり含まれず、細砂粒が多く含まれる。

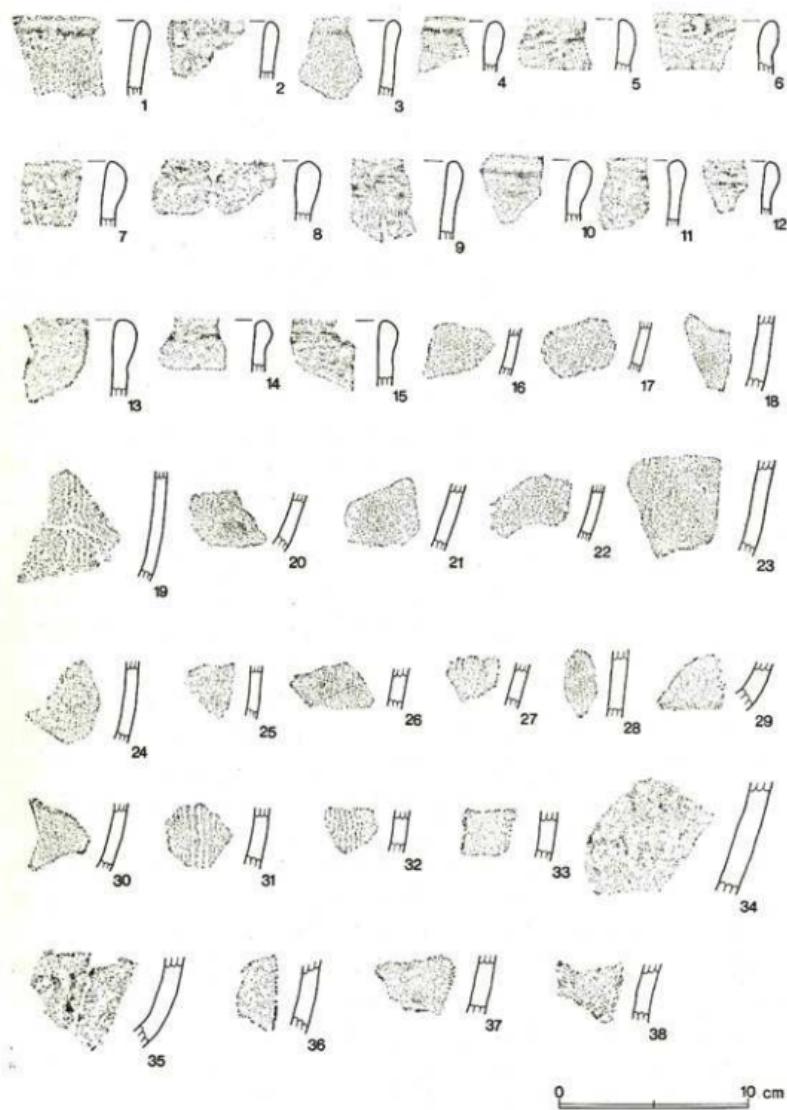
16～32は胴部破片であり、殆どが帶状に撚糸施文されるものである。16, 17, 22, 23はやや大目の撚糸Rが施文される。16, 17, 22は石英、長石類が目立ち茶褐色を呈するが、23は白色粒子が目立ち灰褐色を呈する。18, 19, 21は撚糸Rが、20は撚糸Lが施文される。24, 25は細い撚糸Rが施文される。いずれも石英、長石類はあまり目立たず、細砂粒が多く含まれる。25～28, 30～32は原体にほずれが認められたり、条状に引きづったりする痕跡が認められるものである。25～28, 30は撚糸Rが施文され、31, 32は撚糸Lが施文される。32は若干方向をずらして施文される。26, 32は白色粒子が目立ち、他は長石、石英類を少量、細砂粒を多く含む。24, 27, 31は橙褐色を呈し、他は暗褐色を呈する。29は底部付近の破片であり、やや太目の撚糸Rが施文される。

33～38は無文土器である。33, 37は細砂粒と白色粒子を多く含み、暗褐色を呈する。器面には調整時の擦痕が観察される。34～36, 38は橙褐色を呈し、石英、長石類は目立たず、器面に擦痕がみられる。焼成はあまり良好とは言えない。

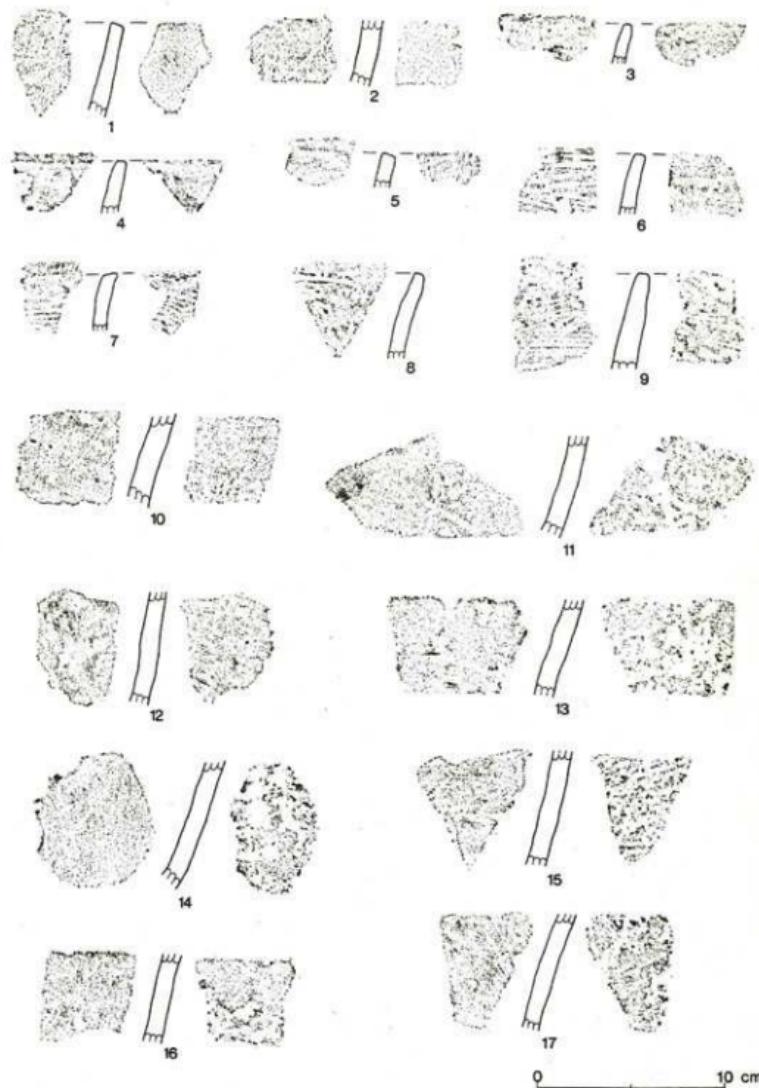
第1号炉穴（第82図1～17、第83図1～19）

出土土器は第Ⅰ群土器、第Ⅳ群土器、第Ⅴ群土器である。

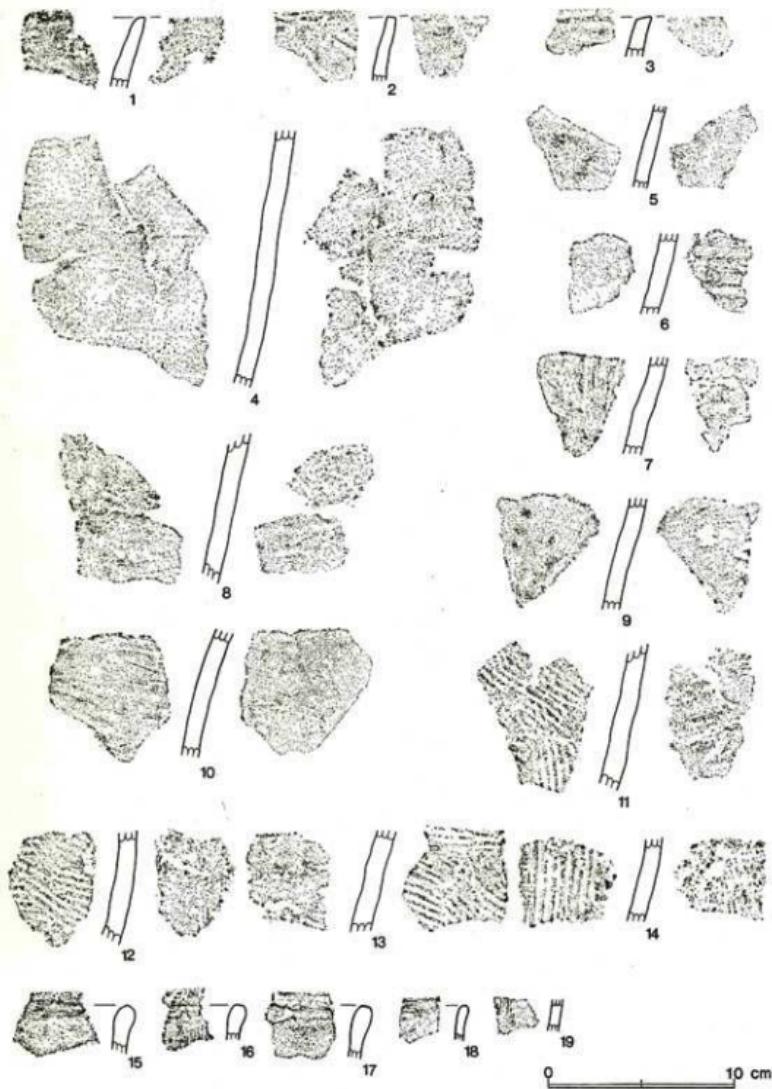
第83図15～19は第Ⅰ群土器であり、15～18は口唇部が若干肥厚するものである。16は口唇下から撚糸Rが施文され、15, 17は口縁部に無文部を残して撚糸Lが施文される。19は帶状に撚糸しが施



第81図 第1号住居跡出土土器



第82図 造構出土土器(I)



第83図 造構出土土器(2)

文される。いずれも原体は細く、条間は密であり、帯状に施文されるものと思われる。

第82図1、2は第Ⅴ群土器であり、同一個体である。口唇部は若干外削状を呈し、刻目は施されない。貝殻腹縁文は口縁から垂直方向に施文され、何段かに亘って行なわれる。胎土は砂粒が多く含み、白色粒子が目立つが纖維は含まれない。焼成は良好であり、色調は淡橙色を呈する。

第82図3～17、第83図1～14は第Ⅵ群土器である。第82図3～9、第83図1～3は口縁部であり、口唇部形態は全て角頭状を呈する。口唇部に刻目は施されない。3～5、第83図1～3は条痕の施文されない所謂無文土器であり、器面に微妙に調整痕としての擦痕が認められる。第82図6～9は表裏面とも条痕が施文されるものであり、9のみ口唇部に刻目が施される。いずれも纖維を若干含む。第82図14～17、第83図4～10は貝殻条痕文ではない擦痕が認められるものである。擦痕は軽くナデた程度のものから、器面を割り取る様なものまで様々であるが、ヘラ状の工具によるものと思われる。いずれも裏面の剥落が著しいため、条痕の有無は不明瞭であるが、大半は表面と同様な調整痕がみられる。纖維を少量含み、色調は暗褐色を呈するものが多い。

第83図11～14は表裏面に条痕が施文されるもので、裏面は剥落のため不明瞭となっている。纖維を少量含む。

第2号炉穴（第84図1～3）

出土土器は第Ⅰ群土器と第Ⅴ群土器であり、第Ⅴ群土器は細片であるため図示し得なかった。1～3は第Ⅰ群土器で、撚糸Rが施文されている。1、2は石英、長石類が目立ち、3は白色粒子が目立つ。いずれも焼成は良く、橙褐色を呈する。

第3号炉穴（第84図4）

出土土器は少なく、第Ⅴ群の細破片と第Ⅰ群土器である。4はやや太目の撚糸Rが施文され、胎土に石英、長石類が目立つ。

第4号炉穴（第84図5～9）

出土土器は第Ⅰ群土器と第Ⅴ群土器であり、第Ⅴ群土器は細破片であるため図示し得なかった。5は丸頭状の口唇部を呈する無文土器であり、補修孔が穿たれる。6はやや太目の撚糸L、7～9は撚糸Rが施文される。

第5号炉穴（第84図10、11）

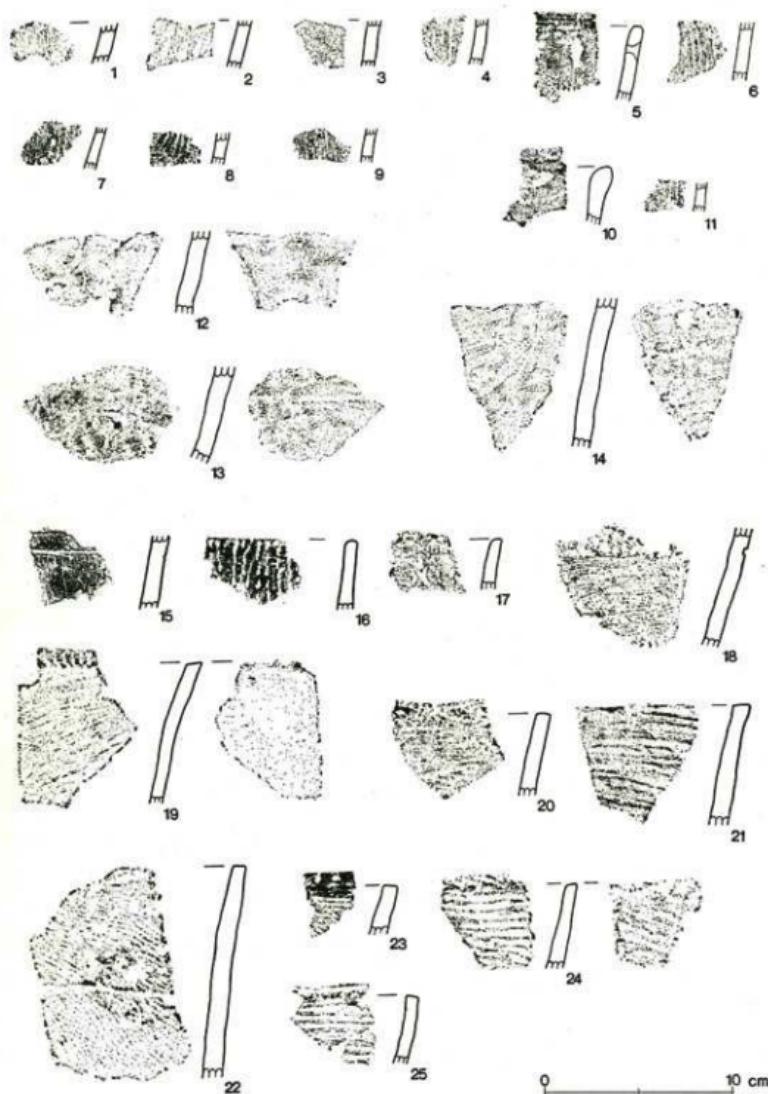
出土土器は第Ⅰ群土器と第Ⅴ群土器である。10は口唇部が肥厚し、口唇下から撚糸Rが施文される。胎土は緻密であり、色調は橙褐色を呈する。11は撚糸Rが施文される。

第6号炉穴（第84図12～14）

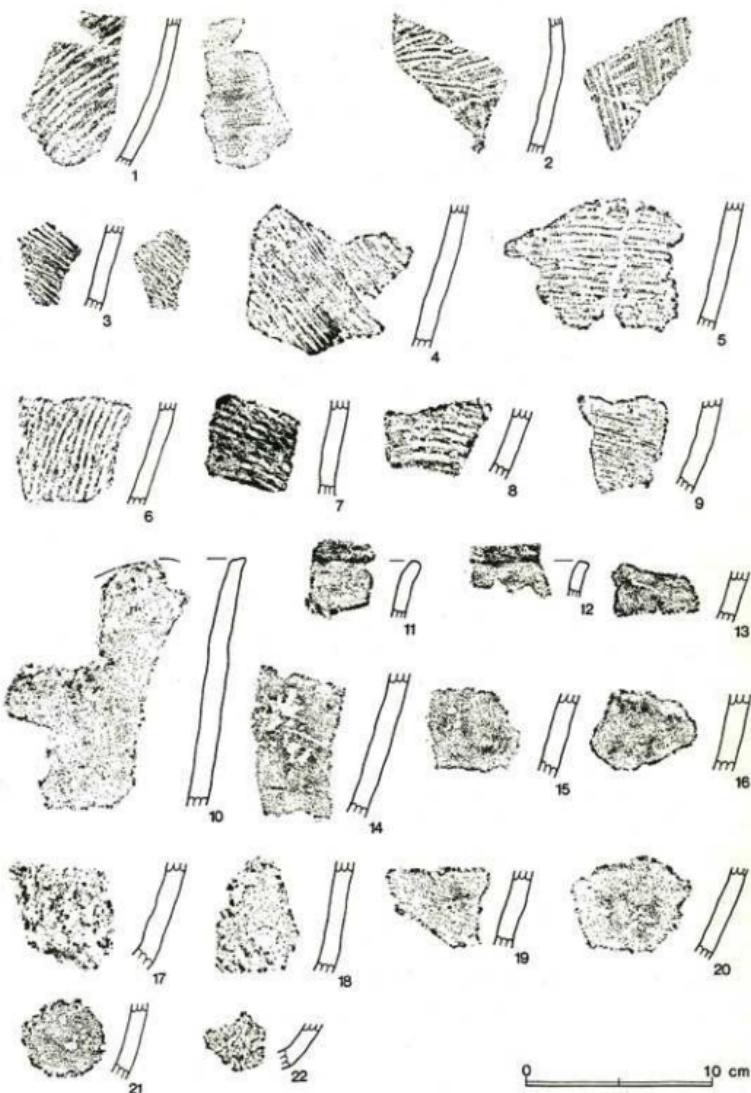
出土土器は全て第Ⅴ群土器である。12～14は貝殻条痕文ではなく、別の施文具による細かな擦痕状の条痕が施文されるものである。植物質のものかヘラ状施文具か判別されないが、器面を薄くナデる様に条痕が施文される。12、13は裏面に、14は表裏面に条痕が施文されている。いずれも胎土は緻密であり、纖維を少量含む。焼成はあまり良好ではなく、色調は12が暗褐色、13、14が橙褐色を呈する。

第1号土壙（第86図1）

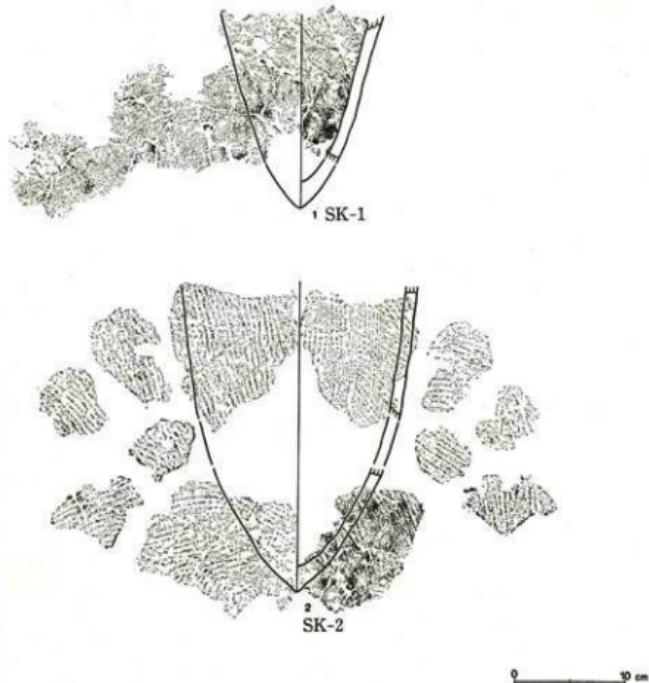
出土土器は全て第Ⅴ群土器である。有文土器は出土していない。1は胸部下半が現存するもので



第84図 遺構出土土器(3)



第85圖 遺構出土土器(4)



第86図 遺構出土土器実測図

最大径15cm、現存高13.5cmを測る。底部を欠損するが、かなり鋭角の尖底が付くものと思われる。表面は条痕ではなく所謂擦痕が観察されるものであり、裏面は条痕が施文される。繊維を少量含むが、緻密な土器であり、焼成が悪いため脆い土器である。色調は暗赤褐色を呈する。

第2号土壤（第84図15～25、第85図1～20、第86図2）

出土土器は第Ⅰ群土器、第Ⅱ群土器、第Ⅳ群土器、第Ⅴ群土器である。第Ⅰ群土器は細片であり図示し得なかった。

第84図15は第Ⅲ群土器であり、1点のみ出土した。赤褐色を呈する器面に沈線が1条水平に施文される。胎土は緻密で、白色粒子を多く含む。焼成は良好であり、器面は研磨されている。

16、17、19、20は第Ⅳ群土器であり、貝殻腹縁文が施文されるものである。17は貝殻腹縁が縦位に何段かに亘って施文されるもので、口唇部が角頭状を呈し貝殻腹縁による刻目が施される。繊維

を少量含み、擦痕が施文され、灰褐色を呈する。16は17と類似するが、貝殻腹縁文ではなく、扁平な施文具を器面と垂直に施文することによって得られる疑似貝殻腹縁文が施文される土器である。口唇部は角頭状を呈し、刻目は施されない。胎土に若干繊維を含み、条痕ではなく擦痕が認められる。

19, 20は口唇部に貝殻腹縁による刻目が施される土器である。19は口唇部が若干内削状を呈し、深い貝殻刺突が施される。器壁は7mm前後と薄いが緻密であり、細砂粒はあまり含まれず、繊維を若干含む。表裏面とも擦痕状の条痕が施文され、焼成は良好であり、色調は灰白色を呈する。20は角頭状を呈する口唇部に浅い貝殻腹縁刺突が施される。表面は擦痕が、裏面は条痕が施文される。胎土は若干繊維を含むが緻密であり、白色粒子が目立つ。焼成は良好であり、色調は灰褐色を呈す。

18は角頭状施文具により刺突列が描出されるものである。文様帶下及び裏面に細かな条痕が施文されている。胎土は繊維を少量含み、白色粒子が目立つ。第V群土器である。

第86図2は推定最大径約21cm、現存高約27cmを測る。尖底土器で、底部の先端は乳頭状に突出し条痕が施文され、胎土に繊維を少量含む。焼成は良好で、色調は暗赤褐色を呈する。第V群土器である。

21～25、第85図1～9は条痕が施文される第V群土器である。21～25は口縁部破片であり、いずれも角頭状の口唇部を呈する。21は表面に横位の条痕が施文され、裏面は不明瞭である。胎土は繊維を少量含み、白色粒子が目立つ。口唇部に刻目は施されない。22, 23は表裏面に条痕が施文されるものである。胎土は若干繊維を含むが緻密であり、白色粒子が目立つ。口唇部に刻目はなく、色調は灰白色を呈する。25も口唇部に刻目の施されないもので、表裏面に条痕が施文される。繊維を少量含み、茶褐色を呈する。24は若干内削状を呈する口唇部に斜めの刻目が施されるものであり、表裏面に条痕が施文される。胎土は繊維を少量含むが緻密で肌理の細かいものである。この種の土器の特徴的な胎土である。

第85図1～9は胸部破片である。1は表面に条痕、裏面に擦痕が施文されるもので、繊維を少量含み肌理の細かい灰褐色を呈する土器である。2～5は表裏面とも条痕が施文されるもので、いずれも繊維を若干含み、細砂粒の目立つ土器である。6～9は表面のみ条痕が施文され、裏面は荒れが著しく条痕の有無は判別されない。

第85図10～22は貝殻条痕文が施文されない土器である。11～12は角頭状を呈する口縁部であり、いずれも微かな擦痕が観察される。10は繊維を若干含み、緻密な土器である。11, 12は若干繊維が含まれるが、細砂粒が目立つ。14～22は微かに擦痕が観察されるだけの無文土器であり、いずれも繊維を少量含むが、緻密なものである。以上は第V群土器である。21は面取りは施されないが、形状から土錐もしくは、土製円盤の可能性がある。

(5) グリッド出土の土器

明花向遺跡B地点出土土器は、第I群土器、第II群土器、第IV群土器、第V群土器、第VII群土器、第IX群土器、第X群土器である。主体的に出土したものは第I群土器と第V群土器であり、他

の時期の土器は殆どを図示した。

第Ⅰ群土器は総数1400点余を、第Ⅶ群土器は総数3200点余を数える。しかし、本遺跡も後世の削平及び擾乱等により、かなりの数が損失しているものと思われる。以下、第Ⅰ群土器と第Ⅶ群土器を中心にして分類を進めて行きたい。

第Ⅰ群土器（第87図、第88図、第89図、第90図、第91図）

撚糸文系土器群を一括する。口唇部形態及び施文法の相違により、類別される。

第1類土器（第87図1～12）

口縁が肥厚せず、丸頭状の口唇部形態を呈するものである。繩文施文ではなく、全て撚糸文が施文され、口唇下から施文されるものが多い。1はやや条間を開けて撚糸Rが帶状に施文される。2は口縁に若干無文部を残し、撚糸Rが施文される。3～12は全て撚糸Rが施文され、口唇下から施文されるのが特徴的である。撚糸の条間はやや開け気味であり、破片が小さいため不明瞭であるが、撚糸文は、器面全体というよりも帶状に施文されているものと思われる。胎土は石英、長石類も含まれるが、器面に浮き出ているものは少なく、全体的に白色粒子が目立っている。色調は暗いものが多く、暗赤褐色、暗褐色系を呈する。

第2類（第87図13～43）

口縁が肥厚し、口唇部が丸頭状を呈するもので、直立又はやや開き気味の器形を呈するものを一括する。撚糸文は口唇下から帶状施文されるものが多く、口縁に無文部を残す様に施文されるものも存在する。

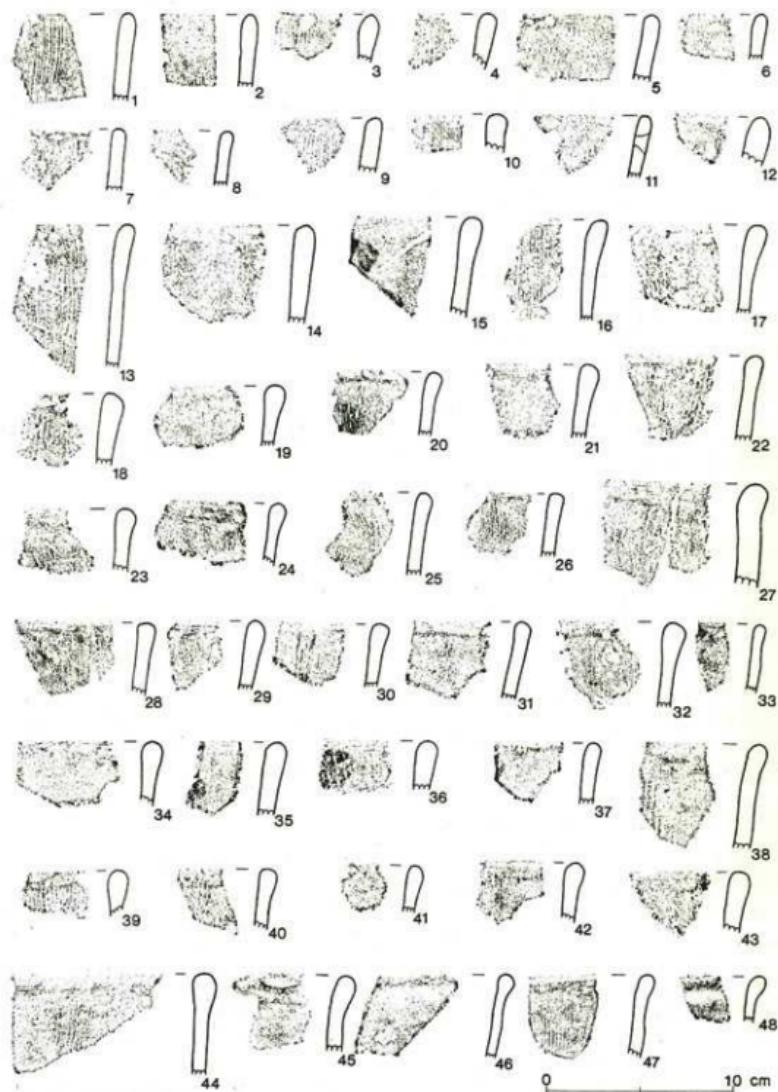
a…口縁下から撚糸文が施文されるものである。13、14はやや条間の開いた撚糸Rが、16は撚糸Lが施文される。18、19はやや細目の撚糸Rが、20、22～24はやや太目の撚糸Rが施文される。25は口唇不直垂直方向に、それ以下は斜位に撚糸Rが施文される。26はあまり口唇部の肥厚しないものであるが撚糸Rが施文される。27は器壁の厚い土器で口唇部が若干外傾し、撚糸Rが施文される。28～32は細い撚糸Rが施文され、28、29は不明瞭であるが、30、31は帶状施文が明瞭である。36、37、39、40、42、43は撚糸Rが施文され、39は深く施文されている。

b…口縁に無文帯が残る様に撚糸文が施文されるものである。撚糸文が帶状施文される点はaと同様の施文である。15、17は原体をやや斜めに施文している。これは条間を開くため条の左傾、右傾を防ぐ様に施文したためであろう。両者とも撚糸Rが施文される。21、34、35、41は口唇下少し離れた所から撚糸Rが施文される。33は器面の荒れが著しく、撚糸施文の有無は不明瞭であるが、無文土器の可能性もある。

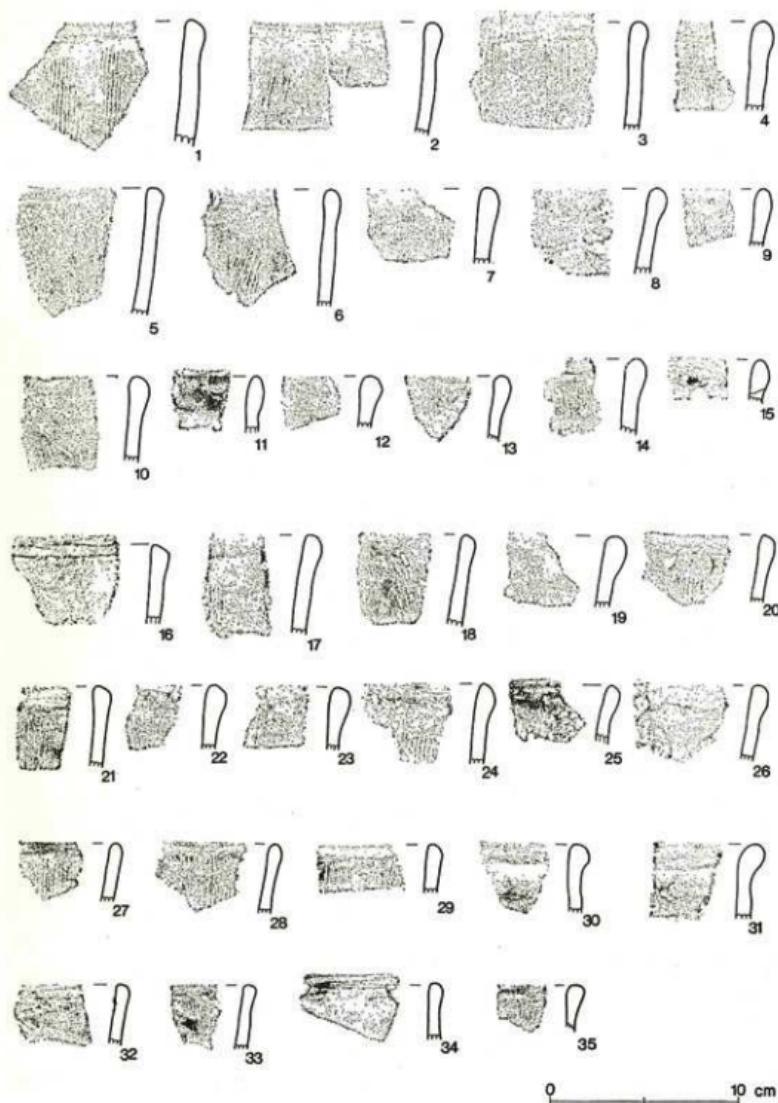
第2類の胎土は概ね第1類と類似し、長石、石英類が目立つものは少ない。焼成も比較的良好であり、色調は暗赤褐色系のものが多い。

第3類（第87図44～48）

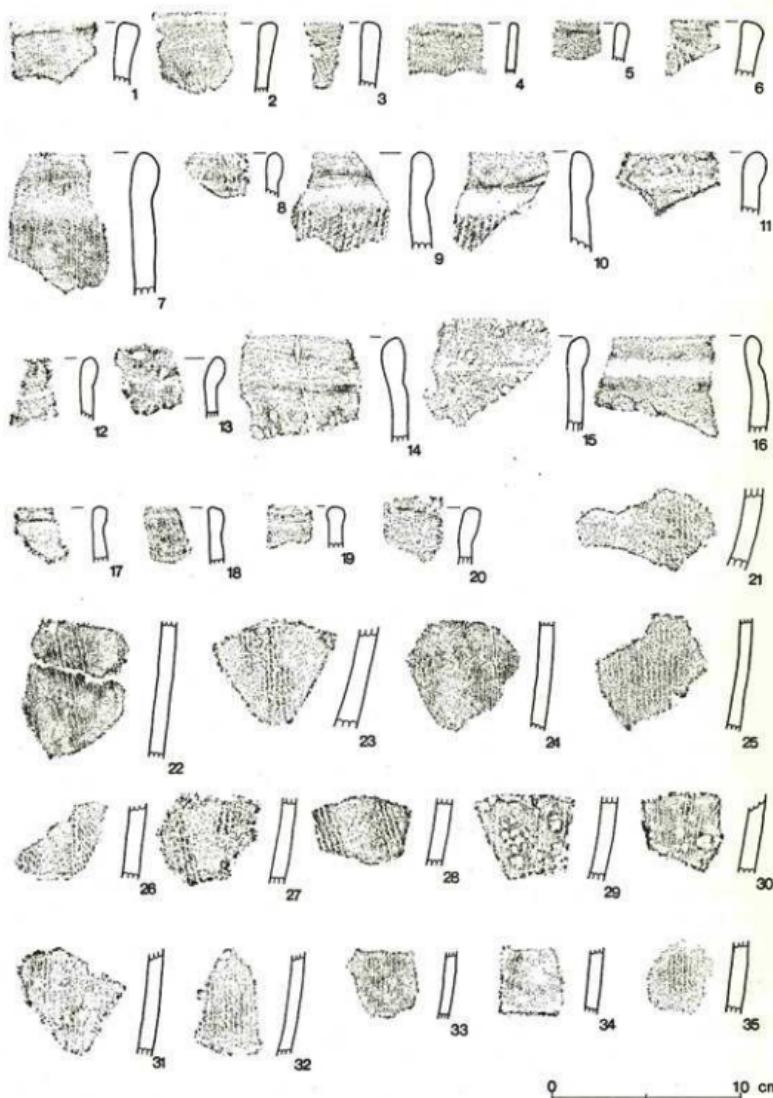
口唇部が丸く肥厚して、外傾するものである。撚糸は肥厚部下に施文され、口縁部は無文帯となる。44は撚糸Rが帶状に施文されるが、施文域が短かく、何回かに分けて施文されるものと思われる。胎土は砂粒を多く含み、長石、石英類が目立つ。45は撚糸Rが施文され、胎土に白色粒子が目立つ。色調は黒褐色を呈する。46は器壁の薄い土器で撚糸Rが施文される。47、48は細い撚糸Rが



第87図 グリッド出土土器(1)第I群



第88図 グリッド出土土器(2)第I群



第89図 グリッド出土土器(3)第I群

施文されるもので、口縁の外傾度が強いものである。45, 48は石英、長石類が目立ち、他は白色粒子が目立っている。色調は46が灰褐色を呈する他は、暗赤褐色系である。

第4類（第88図1～15）

口唇部が肥厚するもので、口唇内端が直線的に立ち上り、外端が弓状に張らみナデが施されるものである。口縁部が緩く回線状に窪むものも存在する。撚糸文は帯状に施文されるが部分的にヘラ状工具によるナデが施され、帯状の形状を整えるものも存在する。1は条間の狭い撚糸Rが帯状に施文されるもので、部分的にナデによる修正が加えられる。胎土は緻密で、白色粒子が目立つ。器面はよく研磨されている。2はやや雑な撚糸Rが施文される。3, 4は口唇肥厚部下に撚糸Rが整然と帯状に施文されており、器面はよく研磨されている。5は撚糸Rが浅く雑に施文され、胎土に石英、長石が多く含まれる。6は撚糸Rがやや斜めに施文され、ヘラ状工具によるナデ状の磨消しが行なわれて帯状となっている。7, 8, 10, 14は撚糸Rが施文され、9は撚糸Lが施文される。11～13は微かに撚糸Rが施文され、15は補修孔が穿たれる。胎土は白色粒子が目立つものが多く、全体的に緻密である。焼成は良好であり、色調は暗褐色、赤褐色系を呈する。

第5類（第88図16～29）

第4類と明確な分類は出来ないが、口唇部外側のナデが強くなり、面取りを行なうものを一括した。口唇部は肥厚するものと、しないものとが存在し、口唇部内端の立ち上りが第4類よりも強く直線状となるものである。器形は口縁が直立するか又は若干開くものと思われる。

a…口唇部が肥厚するものである。16～18, 20～25は口唇部外端が強く面取りされるものである。19, 26はやや口唇部が丸味を帯びるが、面取りは行なわれる。16, 25, 26は無文土器であり、16は器面に削り状の擦痕がみられる。胎土は石英、長石類があまり含まれず、細砂粒及び白色粒子が多く含まれる。16は暗赤褐色、25は橙褐色、26は灰褐色を呈する。18はやや太目の撚糸Rが、17, 19～24は全て撚糸Rが施文されている。

b…口唇部が肥厚せず、外端に面取りが施されるものである。27～29はいずれも直立気味の口縁を呈し、口唇部の外端に強い面取りが行なわれ、撚糸Rが施文される。撚糸文は口唇下から施文され、帯状構成をとるものと思われる。27, 28は暗橙褐色を呈し、石英、長石類が目立つ。29は灰褐色を呈し白色粒子が目立っている。

第6類（第88図30, 31）

口唇部が肥厚して外傾し、口縁部に幅の広い回線状の整形が認められるものである。両者とも撚糸Rが施文される。胎土は長石、石英類をあまり含まず、白色粒子が目立つ。色調は30が橙褐色、31が灰褐色を呈する。

第7類（第88図32～35、第89図1～6）

口唇が角頭状を呈するもので、口唇上端が平坦に面取りされるものを一括した。32～34は器壁が薄い土器で、口唇部が若干肥厚し僅かに外傾するものである。口唇上端は平坦に面取りされ、口唇下に指頭圧痕がみられる。33は撚糸Rが施文され、32, 34は無文土器である。32, 33は暗橙褐色を呈し、34は灰褐色を呈する。35、第89図1, 6は内面が直立気味に立ち上り、外側に張らむ口唇部

形態を呈し、上端が平坦に面取られるものである。35と36は撚糸Lが施文され、1は撚りの弱い撚糸Rが施文される。胎土はいずれも砂粒を多く含み、白色粒子が目立つ。第89図2～5は口唇部が角頭状を呈するもので、上端は平坦に面取りが施される。2、4は撚糸R、3、5は撚糸Lが施文され、3～5は赤褐色、2は灰褐色を呈する。

第8類（第89図7～13）

口唇部が肥厚して立ち、胴が緩く膨らむ器形を呈し、口縁に凹線が巡るものを一括する。全て撚糸文が施文される。口縁部は無文帶となるが、撚糸文が施文されるものも存在する。

第1種（7、8）

口縁から胴部にかけて撚糸文が施文されるものである。7は口唇部が若干肥厚し外側に丸味を帯びるが、面取りは施されない。器壁の厚い土器であり、口縁から胴部にかけて撚糸Rが一面に施文されている。胎土は長石、石英類が多く含まれ、焼成は良好であり、色調は黒褐色を呈する。8は器壁の薄い土器で、口唇部が若干肥厚して立ち、口縁部に凹線が巡る。撚糸Lが口唇部から胴にかけて施文される。胎土は緻密であり、白色粒子が目立つ。色調は灰褐色を呈する。

第2種（9～13）

第1種と同様の器形を呈し、口縁部が無文帶となるものである。口縁内側が直線状を呈し、外側が若干膨らむ形状を呈し、幅の広い凹線が巡る。撚糸Lが一面に施文され、器面は良く研磨される。胎土は緻密であるが、小礫を多く含み白色粒子が目立つ。色調は暗褐色を呈する。

第3種（11～13）

口唇部が若干肥厚して丸味を帯び、外傾するものである。11～13は口唇の屈折部が明瞭であり、沈線状を呈するもので、13は撚糸Rが施文される。12、13は砂粒が目立ち、焼成はあまり良好とは言えず、器面の荒れが著しい。色調は橙褐色を呈する。11は肌理の細かい胎土であり、色調は灰褐色を呈する。

第9類（第89図14～16）

沈線によって口縁部無文帶が明瞭に区画されるものを一括する。口縁部形態に差異が認められるが、口縁部無文帶を形成するという意識では共通する。

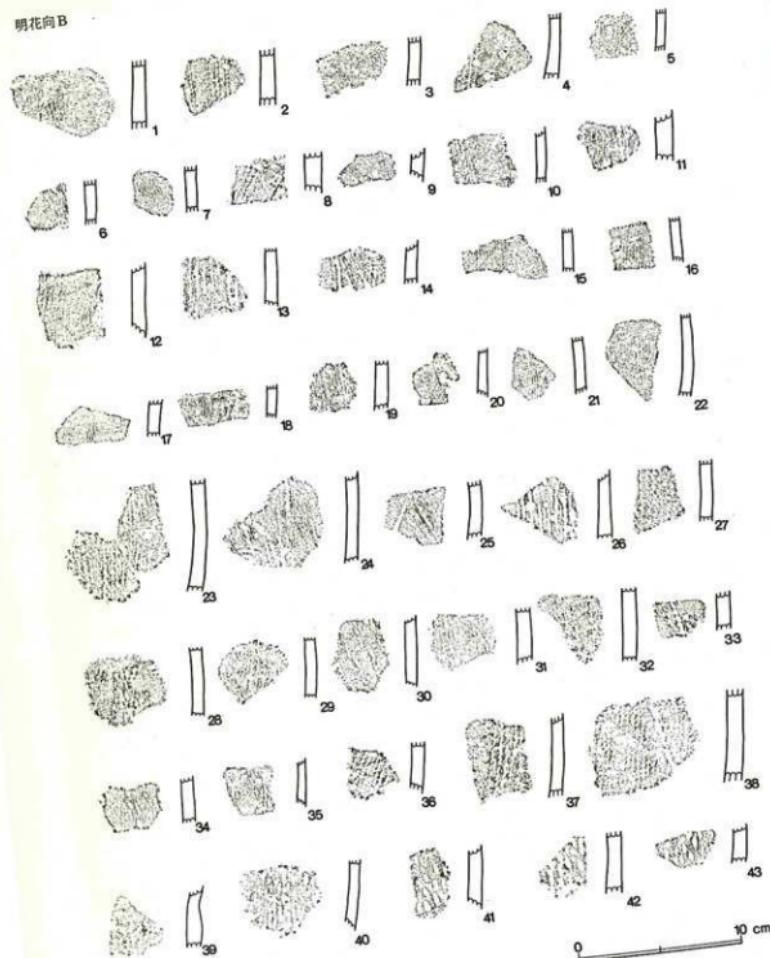
第1種（14、15）

口縁が直立し、胴部がやや膨らむ器形を呈する。口唇部は内唇側に肥厚するもので、外側が直線的になる。口縁の屈折部は段状に成形され、沈線が巡る。胴部は条の太い撚糸Rが施文される。器面は良く研磨されている。胎土は砂粒を多く含み、石英・長石類が目立つ。焼成は良好であり、色調は灰褐色を呈する。15は14より口縁の造りがあまいものであり、太い撚糸Rが施文される。胎土は肌理が細かく、色調は灰白色を呈する。

第2種（16）

口唇部が若干薄くなり、凹線によって幅の狭い無文帶が形成されるものである。口唇部は丸頭状を呈し、直立する。沈線というよりも幅の狭い凹線で区画されるが、胴部に撚糸文の施文はみられない。無文土器と思われる。胎土は砂粒を多く含み、石英、長石類が目立つ。焼成は良好とは言えず、器面のざらつきがみられ、色調は橙褐色を呈する。

明花向B



第90図 グリッド出土土器(4)第1群

第10類（第89図17～20）

口唇部が肥厚せず、角頭状を呈するもので、凹線により幅の狭い無文帯が区画されるものである。口唇部上面は平坦に面取りされており、凹線部分で口縁が若干開くものも存在する。17, 18は凹線が強く施文されるもので、撚糸Rが凹線部にも施文されている。胎土は細砂粒を多く含み白色粒子が目立つ。色調は灰褐色を呈する。19は肌理の細かい胎土であり、色調は橙褐色を呈する。20は焼成が悪く器面がざらつき、石英、長石類が目立つ。色調は暗赤褐色を呈する。

第11類（第89図21～35、第90図1～43、第91図1～15）

胸部破片を一括する。撚糸文施文の有無、施文法等により類別される。

第1種（第89図21～35、第90図1～22）

比較的条間が狭く、細い撚糸文が帶状施文されるものである。部分的に撚糸文を磨消し、帶状に調整するものも存在する。

a…撚糸Rが施文されるもので、圧倒的に多い。25, 31は帶状施文というよりもまばらに施文される。27, 30は施文方向が異なり、雜に施文される。22～26, 28, 29, 31～35は一様帶状に施文されるが、回転の幅が短かく、何處かに分けて施文されるため、整然とした帶状とはならない。21, 23, 28は、撚糸文が磨消される。

b…撚糸Lが施文されるものである。施文法等aと同様であり、6, 9に磨消手法がみられる。この種の胎土は石英、長石類を含み、白色粒子の目立つものが多く、色調は赤褐色、暗褐色系のものが多い。

第2種（第90図12～22）

擦りがほずれ気味のもの又引きずりながら撚糸文が施文されるものである。12, 15, 20, 21は一部原体を引きずるもので条痕化している。13, 14, 16～19, 22は擦りが弱くなるものである。19は磨消手法がみられる。色調・胎土とも第1種と類似する。

第3種（第90図23～38）

やや太目の撚糸文が施文されるもので、整然と帶状に施文されるものは少ない。胎土は緻密であり、白色粒子が目立つものが多く、色調は橙褐色系のものが多い。

a…撚糸Rが施文されるものである。23～33は施文法が雜であり、条間はやや開き気味になる。

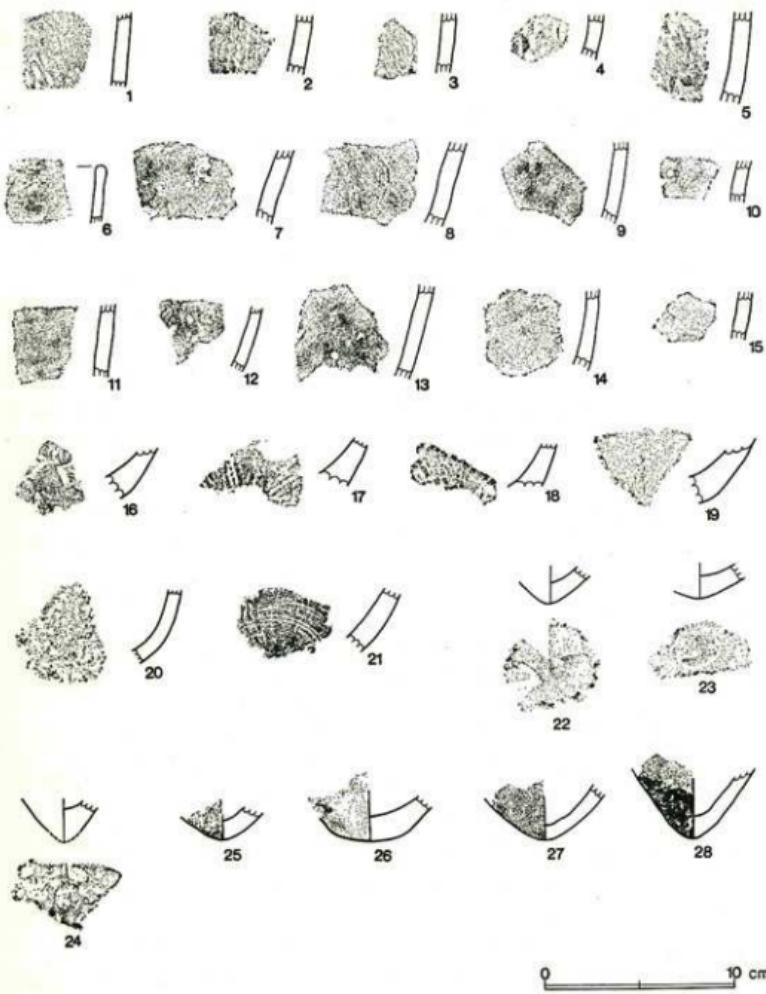
b…撚糸Lが施文されるものである。34, 35は縱位で、36～38はやや斜めに施文される。38をみると器面一面に施文される様である。

第4種（第90図39～43、第91図1～5）

太目の撚糸文が施文されるものである。撚糸は全てRが施文される。39は口縁部の凹が残る破片であり、他は全て胸部である。撚糸文は器面一面に施文される様であり、帶状構成を取らないものと思われる。胎土に石英、長石類を含み、砂粒を多く含むが、器面は良く研磨されている。色調は灰白色、灰褐色系を呈する。

第5種（第91図6～15）

撚糸文の施文されない無文土器である。胎土に砂粒を多く含み、白色粒子が目立つが、器面は概ね良く研磨されている。色調は灰褐色系、灰白色系を呈し、第4種と類似する。



第91図 グリッド出土土器(5)第I群

第12類（第91図16～28）

底部を一括する。鋭い尖底状を呈するものではなく、丸底状のものも存在する。17, 18は細い撚糸Rが、20は太い撚糸Rが施文される。21は撚糸Rが縦位に施文され、底部より若干上に同心円状の擦痕がみられる。この擦痕は器面が荒れているため不明瞭であるが、よく観察すると、撚糸の節の

様に見える。撻糸文であるとすると珍しいものである。23, 24は細い撻糸Rが施文される。26は丸底状を呈し太目の撻糸Rが施文される。28は尖底の角度がやや鋭いものであり、撻糸文の施文はない。色調は24が赤褐色、20が橙褐色、他は灰白色系、灰褐色系を呈する。

第Ⅱ群土器（第92図1～30）

沈線文系土器群を一括する。施文具、施文手法の相違により細別される。

第1類（1, 2, 16）

細沈線によりモチーフが描出されるものは一括する。1は口唇部が角頭状を呈し、刻目が施される口縁部破片であり、細沈線による矢羽状文が描出される。胎土は緻密であり、器面がよく研磨される。色調は赤褐色を呈する。2は口唇部が先細りの角頭状を呈し、刻目は施されない。細沈線が葉脈状に施文される。胎土は緻密であり、橙褐色を呈する。3は併行細沈線が重複して施文されるもので、器壁が薄く、石英、長石類が目立つ。色調は橙褐色を呈する。

第2類（3～6）

水平の併行細沈線文と刺突列とが帶状施文され、段構成をとるものである。3～6は同一個体と思われる。刺突列は梢円状を呈する刺突文が3～4列に施文されるもので、ヘラ状施文具の先端を使用するものである。器壁は薄く、緻密な胎土である。器面は良く研磨され、焼成は良好であり、色調は橙褐色を呈する。

第3類（第92図8）

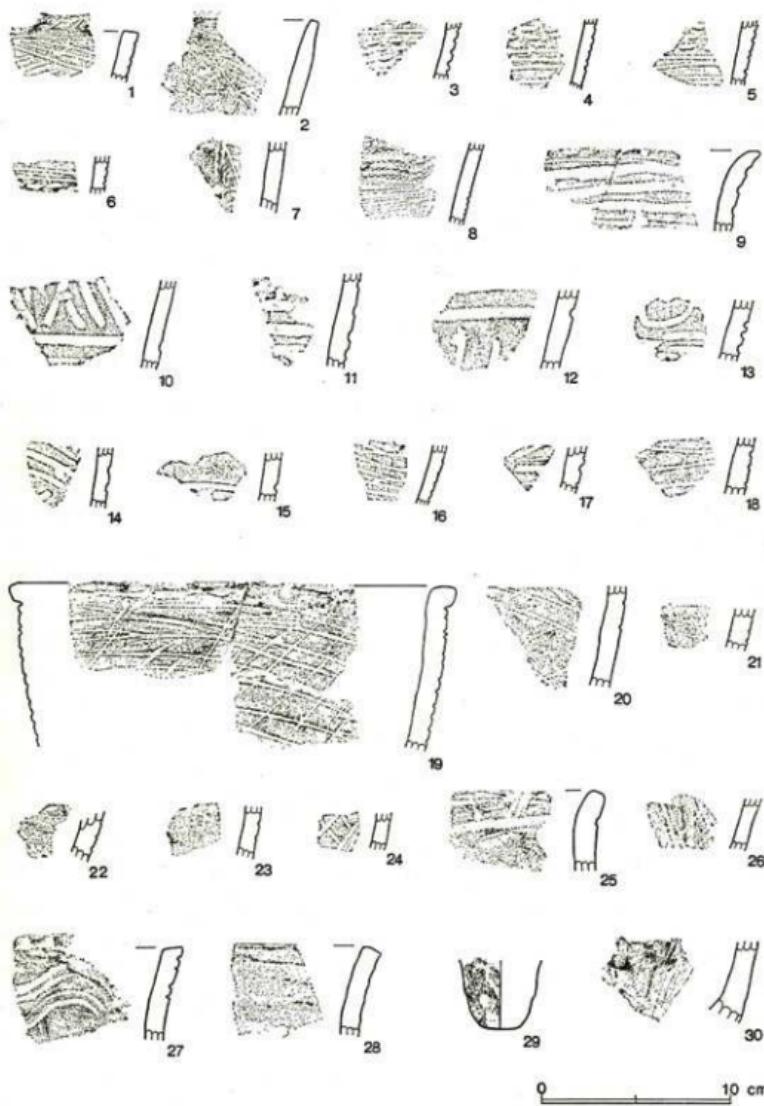
細沈線文と貝殻腹縁文が施文されるものである。8は貝殻腹縁文が緩い鋸歯状に施文され、ほぼ水平に併行細沈線が施文されるものである。貝殻腹縁文は細沈線によって帯状もしくは細長い三角形状に区画された内部に、ほぼ平行になる様に施文されている。胎土に長石、石英類を少量、砂粒を多く含むが堅致な土器であり、器面も良く研磨されている。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。

第4類（第92図9～15, 17）

太沈線文が描出されるものである。太沈線は半截竹管状施文具の外側を使用して施文されるものであり、モチーフにバラエティーがみられる。9は口縁部が外反し、口唇部が内削状を呈するものであり、太沈線による水平の併行沈線が施文される。胎土は石英、長石類を含むが緻密であり、器面は良く研磨されている。色調は橙褐色を呈する。10～13は水平な太沈線で分割されるものである。文様は基本的に帶状施文されるものと思われる。10は水平太沈線の上部に鋸歯状の太沈線文が施文される。11は4条の太沈線文が施文され、12は太沈線下に3条の太沈線が垂下する。13, 14は曲線モチーフが描出され、15は水平太沈線が施文される。17は太沈線文と細沈線文区画の中に細沈線が施文される。いずれも胎土は緻密であり、細砂粒を含むが、器面は研磨されている。色調は10, 11, 17は暗赤褐色、12は橙褐色を呈する。

第5類（第92図18～26）

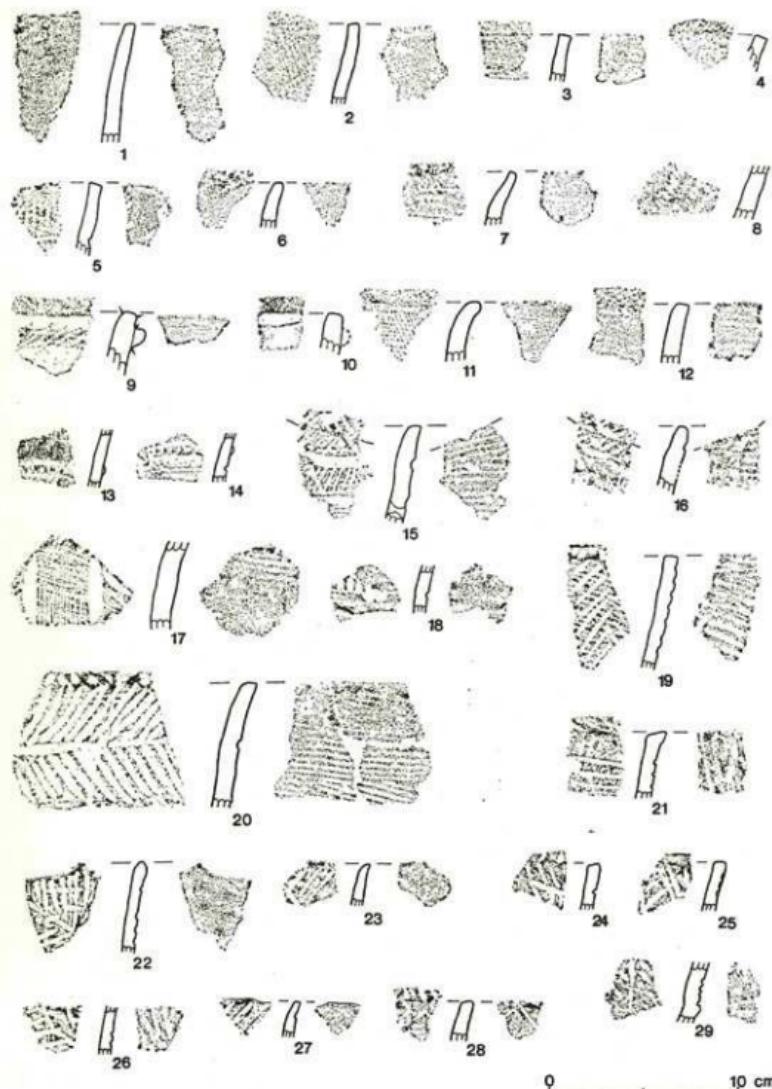
細沈線により、斜格子目文が描出されるものを一括する。19は推定口径約24cm、現存高8.5cmを測るもので、上面平坦な口唇部が外折する土器である。口唇部には刻目は認められない。ヘラ状施文具による細沈線で雑な斜格子目文が描出される。胎土は石英、長石類が若干、白色粒子が多目に



第92図 グリッド出土土器(6)第III群



第93図 グリッド出土土器(7)第IV・V群



第94図 グリッド出土土器(s)第V群